2021年度

教師国内研修

授業実践報告書

SDGs(持続可能な開発目標)の達成に向けて、
私たちに何ができるか
－地域の多文化共生から考える－

2021年度JICA関西　教師国内研修　授業実践報告書

JICA 関西　独立行政法人国際協力機構　関西センター
〒651-0073　兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2
電話：(078) 261-0384（課直通）　FAX：(078) 261-0357
URL：https://www.jica.go.jp/kansai/

2022 年 3 月発行

JICA関西　独立行政法人国際協力機構　関西センター

CONTENTS

研修概要 …… 1

研修日程 …… 3

参加者の声 …… 8

参加教員による授業実践

■小学校

安達　祐佳　（大阪市立大宮小学校） …… 10
片上　綾子　（摂津市立鳥飼北小学校） …… 18
中村　寛子　（神戸市立兵庫大開小学校） …… 24
船曳　妙子　（奈良市立青和小学校） …… 31
堀居　真帆　（高島市立マキノ南小学校） …… 37
吉川　優　（神戸市立桜の宮小学校） …… 44

■中学校

北山　理加　（大阪市立玉津中学校／社会科） …… 53
兒島　正子　（吹田市立豊津西中学校／美術） …… 65

■高等学校

北村　啓明　（立命館守山中学校・高等学校／数学） …… 75
高市　佳名子　（大阪教育大学付属高校池田校舎／外国語） …… 83
二宮　宏樹　（兵庫県立明石西高等学校／外国語） …… 92
峯川　昇二　（奈良県立法隆寺国際高等学校／外国語） …… 99

■大学

上田　安希子　（国立大学法人京都教育大学） …… 112
松居　勇（大阪府立大学 ボランティア・市民活動センター） …… 122

JICA の開発教育支援事業

独立行政法人国際協力機構(JICA)は、開発途上国における事業で培った経験を基に、日本社会に対する開発途上国に関する「知見の還元」、世界の現状・課題に向けて自分に何ができるかを「考える機会の提供」、および地域の開発教育推進に向けた「橋渡し役」の 3 点に重点を置き、国際理解教育／開発教育の支援に取り組んでいます。

JICA 関西では、教育委員会や教員の皆様、大学や自治体、NGO の皆様と連携しながら所管地域である近畿 2 府 4 県(大阪府、兵庫県、京都府、奈良県、和歌山県、滋賀県)を対象に、国際協力出前講座や、JICA 関西施設訪問、教師海外研修、開発教育指導者研修等のプログラムを広く展開し、地域での開発教育・国際理解教育を支援しています。

本「教師国内研修」は、新型コロナウィルス感染拡大の影響を受け、2020 年度、2021 年度においては海外研修を実施する事ができない事から、その代替事業として実施したものです。

教師国内研修とは…

I.研修概要

■研修目的

開発教育・国際理解教育に関心を持つ教員や教育関係者を対象に、主に関西圏内における多文化共生、地域の国際化を学ぶオンラインワークショップを実施し、これらの現状・課題に対する自身の理解を深め、その知見を生かした授業実践案を各参加者で作成いただく事を目的とした研修です。

参加者自身が研修を通じて学んだ内容や作成した授業案を、学校現場での授業等を通じて実践いただき、次代を担う児童・生徒の教育に役立ててもらい、同時に開発教育・国際理解教育の実践者として活躍いただくこともねらいとしています。

■主催

独立行政法人国際協力機構　関西センター(JICA 関西)

■後援

近畿 2 府 4 県ならびに政令指定都市の教育委員会

■参加人数

近畿 2 府 4 県の学校教員ならびに教育関係者　14 名

II.2021 年度研修の流れ(全体スケジュール)

募集
- 募集(6/1-7/9)
- 結果通知(7月中旬)

事前研修
- 2021年7月17日(土)、18日(日)　オンライン研修
- 本研修効果を高めるため、開発教育や多文化共生に関する基礎講座・ワークを実施しました。

本研修
- 8月8日(日)、9日(月)、21日(土)、29日(日)　オンライン研修
- 関西地域の経験豊富な講師を迎え、多文化共生を学ぶ講座や参加者間意見交換を実施しました。

事後研修
- 2021年9月11日(土)　オンライン研修
- 研修の学びを整理し、実践授業案を検討するための事後研修を実施します。

授業実践
- 勤務校における授業実践　(2021年9-12月・原則)
- 研修の学びを各自の所属校における授業実践を通じて還元します。

ﾌｫﾛｰｱｯﾌﾟ研修
- 2021年12月26日(日)　対面研修
- 関西地域の多文化共生の現状を学ぶため、対面研修を実施しました。

報告会
- 2022年2月12日(土)
- 国際協力イベント「ワン・ワールドフェスティバル」内にて実施。

開発教育の継続的な実施へ…

研修日程

研修プログラム

事前研修

実施日：2021 年 7 月 17 日(土)、18 日(日)

場所：オンライン(zoom)

目的：①研修目標の理解　②開発教育・国際理解教育の基礎を学ぶ　③国内多文化共生の基礎を学ぶ

1 日目：7 月 17 日(土)

時間	内容	講師／担当	ねらい
10:00 － 10:40	オリエンテーション ・自己紹介 ・JICA 事業概要・研修の目的	JICA 関西 市民参加協力課 後藤田　蕗子	・研修を共にする参加者と JICA 関係者について知る ・研修の趣旨目的について理解する
10:50 － 12:00	講義&ワーク 「開発教育について　①」 グループワーク： 開発教育とは？SDGs とは？	（特活）開発教育協会 理事　佐藤　友紀 氏	・開発教育とはなにか、ミニレクチャーとワークで理解する
13:00 － 14:10	講義&ワーク 「開発教育について　②」 手法の体験:フォトランゲージ	（特活）開発教育協会 理事　佐藤　友紀 氏	・開発課題を教材化するためのヒントやコツについて授業で活用できるワークショップを通じて学ぶ。
14:20 － 15:00	講義&ワーク 「多文化化する日本」 在留(登録)外国人数の推移、国別内訳、在留資格紹介など	（特活）開発教育協会 理事　佐藤　友紀 氏	・日本国内における外国人市民増加背景や在留資格について、現状など基礎的な事項を学ぶ。
15:10 － 16:10	講義「地域の多様な子ども達の学び合い」 国内の外国にルーツを持つ児童に関する現状やそれをとりまく国の方針、取り組み、必要な支援(母語教育の重要性)	名古屋外国語大学 教授 /NPO 多言語センター FACIL 代表 吉富　志津代　氏	・日本国内において、特に外国にルーツを持つ児童に何が起こっているのかを知り、教育現場や教員の役割について考える(セミリンガル、ダブルアイデンティティ、母語教育の重要性、外部団体との連携など)
16:20 － 17:00	ふりかえり	（特活）開発教育協会 理事　佐藤　友紀 氏 名古屋外国語大学 教授 /NPO 多言語センター FACIL 代表 吉富 志津代　氏	学びの整理、スケジュール確認

2 日目：7 月 18 日(日)

時間	内容	講師／担当	ねらい
10:00 － 12:30	講義&ワーク「文化とは何か」 多文化共生の考え方やアイデンティティについて、「多文化共生」を題材とした新聞記事を通じた意見交換	川崎医療福祉大学 教授 山中 信幸 氏	研修１日目のプログラムを振り返り、多文化共生や個人のアイデンティティに関する考え方、概念について理解を深める。
13:30 -16:00	講義&ワーク「外国人の人権と多文化共生社会」 日本で“外国人”になるということや共生社会の実現に向けて必要な取り組み	川崎医療福祉大学 教授 山中 信幸 氏	・日本における多文化共生の理想や現状について理解を深める。 ・本研修開始に向けた参加者の関心事項、視点を定める。
16:00- 16:30	事務連絡 研修スケジュール・提出物確認等	JICA 関西 市民参加協力課 後藤田　蕗子	本研修プログラムの確認、事後提出物の確認

本研修

実施日：2021 年 8 月 8 日(日) 、9 日(月)、21 日(土)、29 日(日)

場所：オンライン(zoom)

目的：①地域における多文化共生推進取り組み紹介、関係者へのインタビューを通じて地域の現状、世界との繋がりについて理解を深める。

②学校現場、地域における多文化共生推進に向けて必要な教育活動、実践授業内容を考える。

1 日目：8 月 8 日(日)　テーマ「送り出し国の事情を知る」

時間	タイトル	講師	目的
13:00- 14:30	技能実習制度の 現状と課題	神戸大学大学院 国際協力研究科 准教授 斉藤 善久　氏	技能実習制度の概要、課題を知り、国内の現状について理解を深め、参加者との意見交換を通じて、社会のあり方を考える。
14:45- 15:45	企業による 外国人雇用現状	(株)鶴見製作所京都工場 生産管理グループ総務課 課長　山本　和子　氏	技能実習生を受け入れる企業や技能実習生との意見交換を通じて、自分たちの社会を支える外国人について理解を深め、社会のあり方を考える
16:00- 17:00	送り出し国の事情	JICA 海外協力隊 甲藤　瞳　氏 （ラオス・日本語教育）	現地と接続し、協力隊活動や日本語を学ぶ生徒の紹介などを通じて、外国人材来日背景や出身国の事情、日本の支援について理解を深める。
-17:30	ふりかえり （学びの整理、気づきの共有）	川崎医療福祉大学 教授　山中　信幸 氏 （特活）開発教育協会 理事　佐藤　友紀 氏	研修内容の学びを整理し、参加者間で気づきを共有する。研修内容から教育現場へ伝えたいポイントを考える。

2 日目：8 月 9 日(月)　テーマ「地域の外国人事情・コミュニティを知る①」

時間	タイトル	講師	目的
13:00- 14:30	外国にルーツを持つ子供達が日本で前向きに生きる為には	インフィニティ(株) 代表取締役 上森 秀夫　氏	外国にルーツを持つ子供達が日本で前向きに生きる為に必要な取り組み、考え方について学ぶ。
14:45- 15:15	滋賀県国際協会による外国にルーツを持つ児童生徒支援取り組み	(公財)滋賀県国際協会 副主幹 大森 容子 氏	国際交流協会の外国にルーツを持つ児童に向けた支援取り組み事例紹介から、日本の学校現場の現状について理解を深める。
15:30- 17:00	多文化共生教材 体験	国際教育研究会 Glocal Net Shiga/ 滋賀大学教育学部附属中学校 教諭　倉　公一　氏	多文化共生の意識をはぐくむための教材を体験し、参加者間の意見交換を通じて、学校に必要な教育を考える。
-17:30	ふりかえり （学びの整理、気づきの共有）	川崎医療福祉大学 教授　山中　信幸 氏 （特活）開発教育協会 理事　佐藤　友紀 氏	研修内容の学びを整理し、参加者間で気づきを共有する。研修内容から教育現場へ伝えたいポイントを考える。

3 日目：8 月 21 日(土)　テーマ「地域の外国人事情・コミュニティを知る②」

時間	タイトル	講師	目的	ｷｰﾜｰﾄﾞ（一例）
13:00-15:00	外国人によるコミュニティ、外国人支援者による支援	(特活)たかとりコミュニティセンター 専務理事 日比野　純一　様 常務理事 吉富　志津代　様 理事 大城 ロクサナ　様	外国人コミュニティの取り組み事例や当事者へのインタビューを通じて、地域と連携した取り組みや外国人定住者による外国人支援について理解を深め、外国人コミュニティと地域、学校の連携について考える	外国人ネットワーク、地域との連携、定住者による支援
-16:30	ふりかえり (学びの整理、気づきの共有)	川崎医療福祉大学 教授　山中　信幸　氏 （特活）開発教育協会 理事　佐藤　友紀 氏	研修内容の学びを整理し、参加者間で気づきを共有する。研修内容から教育現場へ伝えたいポイントを考える。	-

4 日目：8 月 29 日(日)　テーマ「地域の外国にルーツを持つ児童の状況を知る」

時間	タイトル	講師	目的	ｷｰﾜｰﾄﾞ（一例）
13:00-14:30	外国人児童・生徒の置かれた環境、現状(支援教室の事例から)	Minami 子ども教室 実行委員長 金 光敏 氏	実際に多国籍の児童らが在籍する学校や支援教室の活動内容、地域との連携について理解を深め、外国にルーツを持つ児童の置かれた現状、必要な支援について考える。	外国人児童支援、外国人と共生する地域づくり(学校と地域連携)、セーフティネット
14:45-16:15	多文化共生の学校づくり(経験共有)	・元兵庫県立湊川高等学校長　水畑 哲也 氏 ・立命館大学 講師　山田 文乃 氏 (元大阪市立小学校指導教諭) ・神戸市立港島学園 教諭　石動 徳子 氏	関西圏内の学校で多文化共生の学校づくり(児童支援、授業実践)を行う教員複数名より実践内容を共有し、参加者との意見交換を通じて、学校や教員のあり方について考える。	外国人児童支援、国際理解授業実践、学校と地域の連携
-16:30	ふりかえり (学びの整理、気づきの共有)	川崎医療福祉大学 教授　山中　信幸 氏 （特活）開発教育協会 理事　佐藤　友紀 氏	研修内容の学びを整理し、参加者間で気づきを共有する。研修内容から教育現場へ伝えたいポイントを考える。	-

事後研修

実施日：2021 年 9 月 11 日(土)

場所：オンライン(zoom)

目的：①本研修の学びの振り返り　②実践授業に向けた意見交換　③授業実践ヒントの共有

時間	タイトル	講師
10:00 -12:00	ワークショップ① （1）研修での学びの整理 （2）児童・生徒に伝えたい内容・キーワードの整理・意見交換 （3）手法の紹介①　ちがいのちがい	川崎医療福祉大学 教授　山中　信幸 氏 （特活）開発教育協会 理事　佐藤　友紀 氏
13:00 -16:30	ワークショップ② （1）手法の紹介②　新聞ワーク、PBL、ランキングゲーム （2）児童・生徒らに伝えたい内容・キーワードの整理・意見交換（つづき）	川崎医療福祉大学 教授　山中　信幸 氏 （特活）開発教育協会 理事　佐藤　友紀 氏
16:30- 17:00	事務連絡 （1）報告書作成と今後の流れ　　（2）アンケートの記入	JICA 関西　市民参加協力課 後藤田　蕗子

フォローアップ研修

実施日：2021 年 12 月 26 日(日)　　場所：大阪市立玉津中学校内

目的：①大阪市の「民族学級」等の外国人児童生徒等に係る取り組み紹介や参加者間の意見交換を通じて多文化共生に向けて必要な教育・学校の取り組みについて考える。

②7-9 月の研修後に各参加者が所属校内で行う授業実践内容を共有する。

③対面研修機会を通じて、参加者間ネットワークを深化する。

時間	タイトル	講師
10:00-10:05	開会・挨拶	
10:05-11:20	ソンセンニム(先生)からのお話 ご自身の来歴や経験から、多文化共生社会に向けて大事なこと	大阪市民族講師 北中道小学校　金　泰賢 氏 舎利寺小学校　柳　侑子 氏
11:20-11:35	北山先生から自校の取り組みご紹介	大阪市立玉津中学校 教諭　北山　理加　氏
11:35-12:05	ふりかえりワーク	（特活）開発教育協会 理事　佐藤　友紀 氏
12:15-12:35	民族学級体験	
12:35-12:45	まとめ	川崎医療福祉大学 教授　山中　信幸 氏
12:45-13:05	事務連絡(報告会に向けて)・閉会	JICA 関西

参加者の声

研修に参加された先生方の感想（一例）をお届けします。

多文化共生における日本の現状が、思った以上に進んでいないのだと実感しました。
自分が関わる子供たち、そして大人も含め、多くの外国人の方と関わる中で相互理解の気持ちを大切にできるよう、今日学んだことを伝えていきたいです。
また、今は日本人だけのクラスですが、その中で一体どれだけそれぞれの「文化」を尊重できていただろうと考えさせられました。**今までの当たり前にとらわれず、子供たちが楽しく居心地よく学べる環境を模索していきたい**です。

在日外国人の方の生活について広く学ぶことができました。
実際に日々学校で会っている生徒と照らし合わせて考えると、担任として彼らに貢献する方法がまだまだあることに気づきました。**これから出会う生徒も含め、誰1人も取り残さないことを念頭に置き教育を通して貢献したい**と思います。

多くの先生方とつながりが持てたこと。
新しい考え方を知ることができたこと。
オンラインのワークの方法や技術的なことを知ることができたこと。
教育に対する熱意を共有でき、エネルギーの充電ができたことなど、（研修に参加した利点は）多岐にわたります。

今回の、どの研修でも感じたことは、**「知らないことが差別に繋がることもある」**ということです。
小学校の教員としては、学年に合った多文化共生学習に取り組む中で、なるべく低年齢のうちから様々な事柄に触れられるよう、**「世界にはいろいろな国があって、それぞれに文化や生活のありかたがある。」ことを知ってもらい、それが当たり前であるという感覚を身に着けることができればいいな**と思います。

技能実習制度に関する様々な課題や日本で暮らす外国にルーツを持つ方々の支援など、**多文化共生を実現するにあたって解決すべき課題がたくさんある**ことを学ぶ貴重な研修だった。
私自身不勉強で、これからも学び続けなければならないことが山積していることに気づかされ、学校という組織で働く教員として自分には何が求められているのか、改めて考えさせられる時間だった。

様々な場所で頑張っておられる先生方とつながることができたことが何より嬉しい。

日本に住む外国人の人権と多文化共生社会について、**外国人の人々が「日本で生きる」ことの良さと課題**を多様な視点から考えることができた。
課題解決に向けて、子どもたちに歴史や正しい知識や情報を学び、学んだことを形として生み出し、発信していけるような授業を行うことの重要さを感じた。研修全体から私たちの社会を見出し、問い直すきっかけとなったことが自分自身の大切な学びとなった。この学びを子どもたちにも伝えていけるように、**これまでの教員としての学びや経験をふまえ、「多文化共生」を切り口に、さまざまなことにチャレンジしていきたい**と思った。

「世界とつながろう」という（よく語られる）ニュアンスについて、**海外に目を向けるばかりではなく、自分たちの身の回りで暮らす、多様な文化的背景をもつ人たちの存在も意識する事、その人たちが心地よく日本社会で生活するためには何が必要なのか**を慮る事について、まずは学生たちに伝えたいです。

外国にルーツのある児童生徒や保護者をサポートする方々が地域でどのような活動をされているのかということについて具体的に知ることができ、また、**私たち教職員が視野を広げて共に関わることの必要性**を感じた。

研修を受ける前までは、日系人や、在住外国人、技能実習生の支援は国・政府が行っていると思っていました。しかし、**公的な支援は十分ではなく、「インフィニティ株式会社」や「株式会社鶴見製作所」のような企業の善意や取り組み、「滋賀県国際協会」のような公益財団法人の協力によって成り立っているのだと初めて知りました**。
どうすれば様々なルーツを持つ人々が互いを認め合って暮らせるのか、そのために自分は何ができるのか、これからも考え続けていきたいと思います。

【全ての子どもたちが過ごしやすい環境にしていくために】
学校や社会が外国にルーツがある児童が、過ごしやすい環境になることは、全ての児童（障がいがある・家庭に課題を抱えるなど）が健やかに成長できる環境になるのではないかと思います。国際教育と聞くと、大きな問題であり、自分事として捉えることが難しい児童もいると思いますが、人権教育の1つとして色々な国があることを知るところから始めていくところから始めていきたいです。

せかいぷちりょこう

氏名：安達　祐佳　　学校名：大阪市立大宮小学校

時間数：全 8 時間　　対象学年：1 年　　人数：80 名

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標

・他の国と日本の暮らしには、相違点があることを知る。
・他国の文化・遊び・生活を知る。
・自分たち（日本）の暮らし・生活を振り返る。

【2】 単元の評価 規準例	（ア）知識・技能	・地球には，たくさんの国があり，それぞれに違う文化があることに気付くことができる。 ・他国の子どもたちに伝えるために自分たちの日本の生活についての絵日記を書くことができる。
	（イ）思考・判断・表現	・日本と他国の暮らしの中で違うところや同じところを見つけることができる。
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	・日本以外の国の文化や暮らしについて知ろうとする。

【3】
単元設定の理由

✓ 児童観
✓ 教材観
✓ 指導観
✓ 設定時に想定された児童の変容

本校には、外国にルーツがある児童が 5 人在籍しており、児童全体の 1%を示している。また、大阪市内でも外国籍の人口の割合が増加傾向にあり、令和 2（2020）年 12 月末現在、大阪市内には 143 の国や地域を出身とする 144,123 人の外国人住民が居住し、全市民のうちの約 5.3%を占め、人口・比率とも政令指定都市の中で最多となっている。（大阪市 HP より引用）国語科、道徳科の中でも外国のことが取り入れられるようになった昨今、多くの児童が今後、外国籍の方と接することが予想される。

本校の高学年の児童は、SDGｓの一貫として某企業の活動に参加し、不要になった衣服を寄付する活動やユニセフ募金活動などに取り組んでいるが、1 年生児童にとっては、行動そのものは理解できても途上国がどのような状況なのか理解するのは難しく、外国に触れる学習機会もまだまだ少ないのが現状である。

今回、アジア近辺国の学校や生活の様子の写真や映像教材として用い、日本との相違点を考えていく。また、国際機関日本アセアンセンターによるプログラム「小学校向け ASEAN 出張授業」を通じて出前授業を依頼し、より各国の現状を児童たちに知ってもらうようにする。その上で気づいたことを交流したり、他国の遊びを体験したり学びを深めていく。他国の暮らしや文化を知った後、最後の第 7 時では、外国の子どもたちに向けて自分たちの日本の学校や家での日常生活を振り返り、絵日記を書く。

はじめに多文化国家であり、国際色が強く日本と繋がりがあるインドについて学習を進めていくことで日本と文化と比較しやすいのではないかと考えた。より低年齢の間に、自分たちが暮らしている国以外の暮らしや文化を知り、体験することで「日本と外国は違っていて当たり前」という感覚を身に着け、外国にルーツがある人とも分け隔てなく接することができるようになることを願う。また、その後は中学年や高学年の外国に関わる学習にも繋げていきたい。

【4】展開計画（全 7 時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	○ 学習課題を掴む。 ・ 国によって、肌の色や服装が違うことに気付くようにする。	・ オリンピックの開会式の写真を見て気づいたことを話し合う。	・地球儀 ・写真 ・パワーポイント
2・3本時	○ インドの暮らし・文化について考える。 ・ それぞれの国に文化があり、その国の人にとって自国の文化が当たり前であるということに気づくようにする。	・ 写真や映像を見て、日本と同じところ（似ている）・違うところを見つけ交流する。 ・ 日本とインドの繋がりを考える。	・地球儀 ・パワーポイント ・写真 ・みんぱっく
4	○ インドの遊びを体験する。 ・ 鬼ごっこと似ていることに気付くようにする。 ・ 外国には、日本にない遊びがあることを知る。	・ カバディで遊ぶ。	
5	○ インドネシア・フィリピン・シンガポールの小学校の様子を知る。 ・ 同じ小学校でも、国が変わると違うところがたくさんあることに気付くようにする。	・ ASEAN 出前授業を受講し、他国の文化を知り、気づいたことを交流する。	・資料
6	○ 日本で暮らすブラジルの子どもの気持ちを考える。 ・ 言葉が通じなくとも外国の人と関わることや友達になることができることに気付くようにする。	・ 道徳科の教材「学校へ　いくとき」（1 年「生きる力」より」を使用し、言葉が通じない友達がいたら、どのように接するのが良いか考える。	・道徳科教材
7	○ 自分たちの暮らし（日本）を絵日記に書く。 ・ 他国の子どもたちにも絵日記を見てもらうということを促し、意欲を持つ。	・ 学校・遊び・生活でのできごとを振り返る。	

【5】本時の展開
目標：国ごとに、文化や生活様式があることを知り、日本との相違点を考えることができる。

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 10 分	○　インドの暮らし、建物、街並みを知り、気づいたことを発表する。 ・　インドの写真を見て日本と比べる。 ・　めあてを確認する。 めあて：インドの暮らしを見て気づいたことを交流しよう。	・　肌や髪の色、服装が違うことに気づくようにする。 ・　インドの写真を見ながら、日本と比べて似ているとこと違うところに気付くようにする。 ・　日本以外の国に興味・関心を持てるようにする。	・教師が用意した写真
展開 20 分	○　インドと日本の繋がりについて考える。 ・　日本とインドのカレーを比べる。 ・　インドクイズ	・　カレーがインド発祥の食べ物であることを知り、日本との繋がりに気付くようにする。 ・　外国から色々な食べ物やスポーツなどの文化が来ていることを気づくようにする。 ・　インドの文化を知ることができるようにする。	・クイズ ・ワークシート
	○　インドの文化を体験する。 ・　みんぱっくを用いて、インドの服や日用品に触れる。 ・サリー ・食器 ・アクセサリー ・文房具　　など ○　それぞれの国に、挨拶の仕方があることを知る。 ・　絵本の読み聞かせ	・　世界には、たくさんの国があり、それぞれに文化や暮らしの在り方があることを知る。 ・日本にあるものと似ているやそうでないものがあることに気づくようにする。 ・　挨拶にも国の文化があることに気づくようにする。	・みんぱっく（国立民族博物館による貸出用学習キット）
まとめ 15 分	○　気づいたこと。感じたことをワークシートに記入し、交流する。 ・振り返りをする。	・　次回、インドの遊び「カバディ」をすることを伝え、さらに外国への意欲を高めるようにする。	・絵本 「世界のあいさつ」長新太 ・ワークシート

【授業実践の様子】

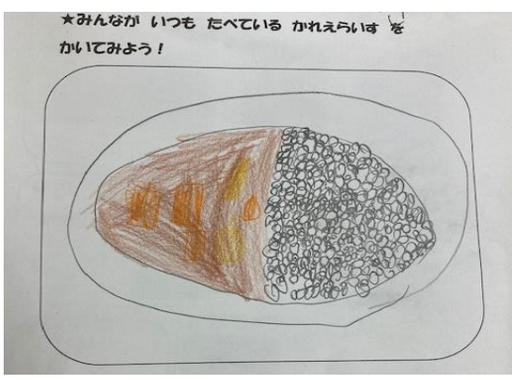
《みんぱっくによるインドの生活体験》

食器

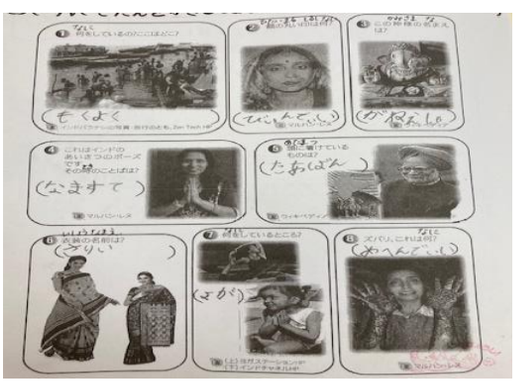
アクセサリー

雑誌・本

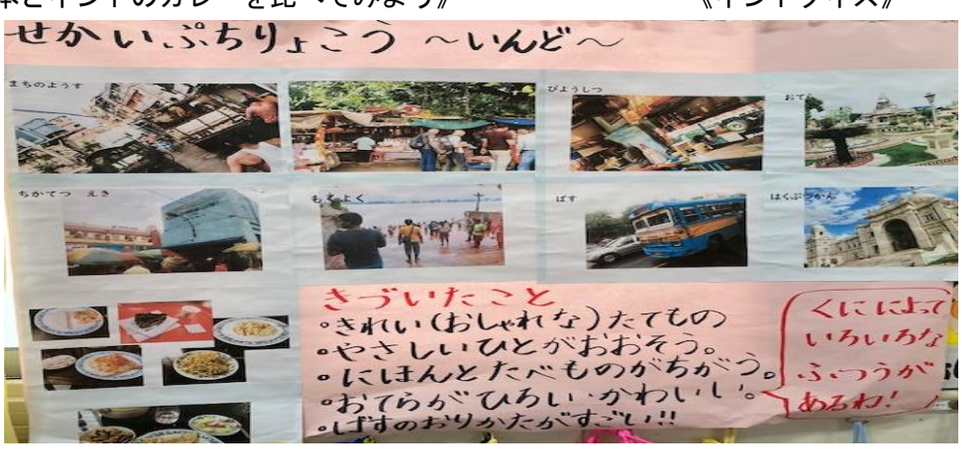
サリー・その他服



《日本とインドのカレーを比べてみよう》



《インドクイズ》



《本時の学習をまとめた側面掲示》

【6】本時の振返り

第１時にオリンピックの開会式の写真を見て、世界の人々のちがいに触れた後の本時であったので、少しずつ外国に興味を持ち出している様子が伺えた。

学習のはじめに「今日は、インドにプチ旅行に行くよ！」と声をかけると、「インド知ってる。」「どんな国なんだろう。」などと期待を膨らませていた。

つぎに、インドの博物館やお寺、バス、料理など様々な写真を見て日本と比べ、インドの挨拶「ナマステ」を練習した。そして、文化という言葉は 1 年生とって難しいと感じたので、「それぞれの国に挨拶があり、生活の中に当たり前がある。」ということを伝えた。すると、児童たちは「かわいそうなんじゃなくて、それが当たり前なんだね。」「日本の当たり前とインドの当たり前は違うね。」と違いを受け止めることができたように感じる。

インドの文化体験では、サリーやアクセサリーを見て「うわあ。可愛い。」と大喜びしていた。日頃、自分たちが使っている食器や楽器とは雰囲気がずいぶん違ったので、初めて見るものに大興奮の様子だった。

学習の最後に、各国の挨拶について絵本を読み聞かせると、「挨拶でキスするの。」「手にツバかけるの。」など日本の挨拶との違いに驚いていた。それでも、「それが当たり前なんだね。」「いろいろな国があるね。」と多文化を少しずつ理解しているようであった。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

《単元の最後の振り返り》

・インドネシアの旗と日本の旗が似ていた。
・フィリピンの海が綺麗で食べ物も美味しそうだった。
・もっとほかの国の洋服や家のことを知りたい。大人になったら遊びに行きたい。
・インドネシアのじゃんけんが楽しかった。
・私は、インドネシアの食べ物や学校での遊びをもっと知りたいです。他の国の挨拶を知れて良かった。
・シンガポールのカラフルなケーキを食べてみたい。外国の街がすごかった。
・家族と一緒に外国の食べ物を食べてみたい。
・シンガポールのマーライオンを初めて見た。
・インドのカレーとナンを食べてみたい。
・インドのナンと日本のカレーを一緒に食べてみたい。
・ブラジルは、日本と朝と夜が反対なのがびっくりした。
・外国の公園のことをもっと知りたい。
・インドの服（サリー）が可愛かった。
・ほかの国の自転車を知りたい。
・インドネシアにドラゴンがつく名前の動物がいておどろいた。
・コロナが終わったらフィリピンに行きたい。
・インドネシアの肉料理が美味しそうだった。
・インドのサリーを着てみたい。・色々な国の先生とお話したり勉強したりできて嬉しかった。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

小学１年生は，まだまだ自分のことに一所懸命な時期なので学習のはじめの頃は，外国と聞いても特に興味を示さなかった。この多文化共生の学習を行っていく中で最初は，日本以外の国の写真を見せると「おもしろい。」「かわいそう。」「なんか変。」など率直な意見であったが，学習を進めていく中で「それが普通。」という感覚に変わっていくのを感じた。

《ASEAN 出前授業の様子》

また，ASEAN 出前授業を通じて外国（インドネシア・シンガポール・フィリピン）のゲストティーチャーと実際に交流できたことで，児童たちの海外への興味関心が増したように思う。外国の人と話すことができたり，勉強を一緒にしたりしたことが大きな励みに繋がったようだ。

外国の学習を終えたあと，今度は日本の暮らしを外国の友達に伝えるための日記を書く活動を行った。テーマは，日本の日常に因んだ内容で「好きなあそび」「日本の食べ物」「日本の挨拶」「友達と遊んだこと」「家族との思い出」とした。自分たちが暮らす国の文化に気づいた上で，日本と外国どちらの文化も尊重できるようにしていきたい。

《日本での暮らしをテーマにした日記》

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

（授業前）

第一印象としては，外国に興味がある児童が多くないように感じた。児童たちに知っている国を尋ねると，すぐに名前が出てきたのが「アメリカ」や「中国」ほかにもヨーロッパ各国など，先進国や近隣の国もしくは，自分が好きなスポーツ選手がいる国の名前が多く出た。

（授業後）

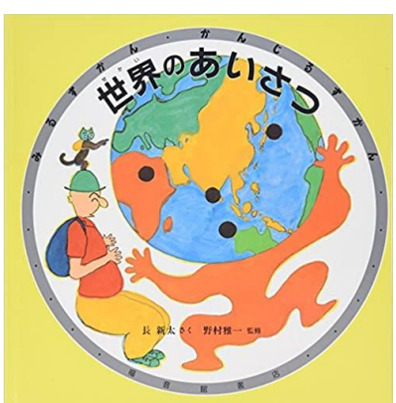
日本以外にもたくさん国があり，そこでの言語や文化があることに気づき，以前より外国により興味を持つようになった。

朝の英語タイムでは，「ほかの国でも，英語タイムあるのかな。」「インドネシア語タイムがあるかもしれない。」という会話が飛び交ったり，国語科の時間には，「日本では国語の時間がたくさんあるけれど，他の国でもその国の学習をたくさんするのかな。」と疑問を持ったりするなど自然と外国を意識する場面が見られた。

【8】自己評価

1. 苦労した点	1年生にとって「文化」という言葉の理解が難しく言い換えに戸惑った。「その国それぞれの当たり前や普通，約束があるんだよ。」と色々な例えを加えながら伝えたが，正しく児童たちが理解することができるような説明だったのか少々心配が残る。
2. 改善点	体験活動を重視したので，時間に余裕がないと取り組むのが厳しいと感じた。どの学校でも実践しやすくするためには，内容をまとめてコンパクトに授業を組み替える必要がある。
3. 成果が出た点	上記の授業後にも記載した通り，児童たちが外国を少しずつ意識するようになったことに成果を感じている。学年が上がる中で，国語科，社会科，総合の中で外国に関連した内容は増えてくる。いきなり外国と日本の産業の繋がりや，環境問題，途上国の貧困問題などの学習内容に入るのではなく，低学年のうちに興味関心を持つことで外国を少しでも身近に感じることができるようになることも1つの手立てだと思う。
4. 備考（授業者による自由記述）	「違いを受け止める」ということは，多文化共生に限らずとても大切なことである。昨今，外国籍や特別支援学級に在籍する児童が増加傾向にあり，またそのほかにも，家庭や心，学習面に課題を抱える児童がほとんどである。その中で，互いの違いを追求し責めるのでなく，それを受け止めあうことができるようになればと思う。一人ひとり違う人間なのだから違っていて当たり前ということを伝えていきたい。

添付資料：



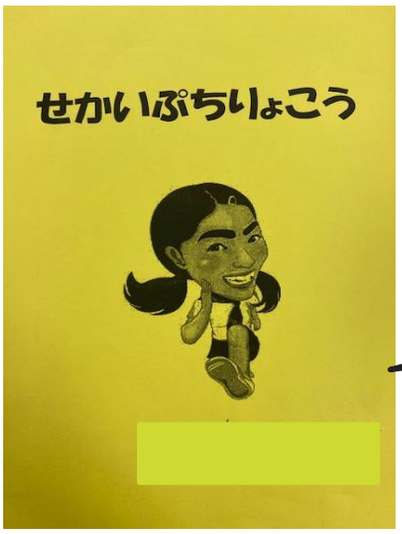
《世界のあいさつ》
長新太（1989　福音館書店）

《小学校道徳　いきるちから「学校へいくとき」》
（日本文教出版）

《インドの学習で用いたパワーポイント一部》

《地球儀を用いた学習》

《ASEAN 資料》



学習で活用したワークシートや資料を，添付していくことで１冊のポートフォリオを作成した。今回，主に学習してきたオリンピックのことやインド・インドネシア・シンガポール・フィリピンで自分たちが考えたことや振り返りが記されている。

《「せかいぷちりょこう」ポートフォリオ》

おにごっこと似てるね！

「カバディカバディ」って言い続けるのがおもしろい。

その後の体育科の時間にも，「カバディがしたい！」と，カバディの楽しさに気づいた様子が見られた。

《第４時　カバディの様子》

参考資料：

「世界の国を知る 世界の国から学ぶ　わたしたちの地球と未来　インド」(公財)愛知県国際交流協会
(http://www2.aia.pref.aichi.jp/koryu/j/kyouzai/index.html　2021 年 8 月アクセス)

「国立民族博物館　みんぱっくについて」国立民族学博物館
(https://www.minpaku.ac.jp/teacher/university/manual/minpack　2021 年 9 月アクセス)

「ASEAN 出前授業」国際機関　日本アセアンセンター
(https://www.asean.or.jp/ja/exchange-info/20180502/　2021 年 9 月アクセス)

SDGsから私たちの言葉・行動へ

氏名: 片上　綾子　　学校名:　摂津市立鳥飼北小学校
担当: 日本語指導　　実践教科:　総合的な学習の時間
時間数: 1 時間　　対象学年: 5 年生　　人数:58 名

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）

・外国にルーツのある人々の思いを考え、理解する。
・日常生活の中にある何気ない差別や偏見に気づく。
・気づいたことを自分の意見として発信する。

【2】 単元の評価 規準例	（ア）知識・技能	・SDGs の概要について知る。 ・マイクロアグレッションについて知る。
	（イ）思考・判断・表現	・外国にルーツのある人々の思いについて考える。
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	・班活動で自分の意見を伝える。 ・全体交流で意見を伝える。

【3】
単元設定の理由

✓ 児童/生徒観
✓ 教材観
✓ 指導観
✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容

【児童観】
本校の 5 年生は、1 年間を通して SDGs の学習に取り組んでいる。1 学期には SDGs の概要を学び、17 個の目標が設定されていることや「誰ひとり取り残さない」社会を実現するために日本国内で様々な取り組みが行われていることを学習した。夏休みには家でできる SDGs の取り組みについて考え、実践した。2 学期は世界に視野を広げ、17 の目標が誰の幸せにつながっているのかということについて考える取り組みを行っている。授業や行事に集中して取り組める反面、自ら進んで活動に取り組んだり、意見を伝えたりする児童が少ないことが課題であった。身近なところから正しいこと、そうでないことを自分で判断し、おかしいと思ったことに対して声を掛けていく力をつけるためにマイクロアグレッションについての学習を提案した。

【教材観】
大阪府在日外国人教育研究協議会（府外教）が発行している冊子『ちがいドキドキ多文化共生ナビ』の中に掲載されている教材「無意識の言葉が心に刺さる～気づいてほしいこの思い～（マイクロアグレッション）」を活用した。教材を通して、日常生活の何気ない言動が無意識のうちに差別や偏見に繋がっているかもしれないと考えること、SDGs で学んだことを身近な課題として捉え、行動に移す力につなげることを目標とする。

【指導観】
SDGs の学習内容が多岐に渡っているため、授業の導入ではキーワードを提示しながらこれまでの学んできたことを整理する。誰ひとり取り残さない社会を実現するためには、目標 10「人や国の不平等をなくそう」を達成する必要がある。具体的に私たちにできることとして、多面的に物事を捉えて知ること、多様な考えを理解することだと確認したうえで、本学習を進めた。

展開では、自分の考えをもって意見交流ができるようにした。はじめに個人で考える時間を設定し、ワークシートに自分の考えを書くようにする。次に Jamboard を使い、班で意見を整理できるようにする。多様な意見を出し合い、まとめていく過程を通して自分にない新たな考えに触れたり、同じような意見に共感し合ったりできる場面を設定する。

まとめでは、私たちの身の回りにも無意識の差別や偏見があることに気づけるようにする。また、SDGs の目標を達成するために行動へ移していくことが求められていることを伝え、自分ごととして考えられるようにする。

【4】展開計画（全４時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	身近な課題から広げよう 	【世界の子どもたちと SDGs】 ・世界には学校で教育を受けられない子どもたちがたくさんいることを知る。 ・学校に行けない理由と教育を受けられないことが貧困の連鎖に関連していることを知る。 	「生きる力」を育む国際理解教育実践資料集 第１章世界の現状を課題 第４節：教育の問題 ワーク⑵教育が受けられないことで起こる「負の連鎖」 (2019.10　JICA 地球ひろば)
2	世界とのつながり・国際協力について学ぼう 	【JICA 関西見学】 ・社会見学の一環として訪問した。 ・SDGs 展示の見学 →資料や展示物に触れながら、SDGs と日本、世界とのつながりを知る。 ・講和（国際協力について） →世界とのつながりをより具体的に知るため、海外協力隊経験者の方に講和をしていただいた。 開発途上国に支援することだけでなく、日本も援助してもらっているということを知った。	
3	「誰一人取り残さない」について考えよう 	【市内人権作品展に向けて】 ・SDGs の目標を達成することでどのような人たちの幸せにつながるのかということを考えた。 17 の目標カードの表面に現状を表すイラスト、裏面に達成できたときの様子を表すイラストをそれぞれ描いた。 ・日本語教室の児童は、SDGs の歌を作詞し、様々なちがいを越えて人々がつながることの大切さを表現した。	
4 本時	言葉と行動につなげよう 	【無意識の言葉と差別・偏見に気づく（マイクロアグレッション)】 ・これまでの学習を振り返る。 ・人や国の不平等をなくすためには、多面的に物事を知り、理解することが必要だということを確認する。 ・マイクロアグレッションカードに書かれている事例をもとに、外国にルーツのある人たちの思いを考える。 ・身の回りにも何気なく言った言葉が相手にとっては傷つくと感じる場面がないかを考える。	・『ちがいドキドキ多文化共生ナビ』 P.66～⑦マイクロアグレッション (2017 大阪府在日外国人教育研究協議会)

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5 分)	・SDGs についてこれまでに学習してきたことを振り返る。 ・目標 10 の内容を確認する。	・キーワードにまとめて簡潔にすることで、児童が要点を押さえられるようにする。 持続可能な開発目標　17 の目標 169 のターゲット　2030 年まで 世界中の国が協力 誰ひとり取り残さないなど	
	外国につながりのある人たちの思いを考えよう		
展開 (30 分)	・マイクロアグレッションについて考える。 ①おかしい・言われたら嫌な気持ちになる事例を選ぶ。言われた人の思いを想像し、ワークシートに記入する。 ②Jamboard を活用し、班で意見を出し合う。	例） ・「その名前(本名)じゃなくて、日本の名前はないの？」 ・「中国語しゃべってみて。」 ・「私もハーフになりたかったな。」 ・「いつ日本に来たんですか？」 ・「大丈夫！日本人に見えるよ。」 ・「外国にルーツがあるとかないとか、気にしないよ。今まで通り友だちだ。」 ・「〇〇さんも面倒くさがらずに、選挙にいかなあかんで。」 ※児童だけで考えることが難しいカードについては、補足説明をする。（在日外国人の歴史的経緯、選挙権など） ・司会、記入、タイムキーパー、発表の役割を決めてから進めるようにする。	・府外教 『ちがいドキドキ多文化共生ナビ』 P.66～⑦マイクロアグレッション
まとめ (10 分)	③全体交流する。 ・身の回りにあるマイクロアグレッションについて考える。 ・身の回りの言動で気になることがあった時にどのような行動をとるのかを考える。 ・2030 年までの目標達成に向けて「行動の 10 年」と言われていることを確認する。	・具体的な場面を例に挙げながら、日常生活の中にある何気ない言葉がマイクロアグレッションにつながると気づけるようにする。 ・SDGs の目標に繋がりがあること、それぞれの目標が関連していることを確認する。 ・行動には多様な方法があることを伝える。(意見発表、作文、グループ交流、相談など) ・知って理解するだけでなく、行動に繋げていくことを意識できるようにする。	

【授業実践の様子】

全体で SDGs のおさらい

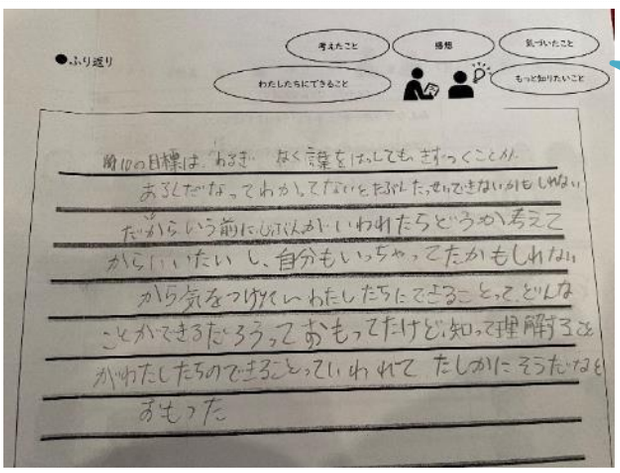
Jamboard で意見を共有

全体で意見交流

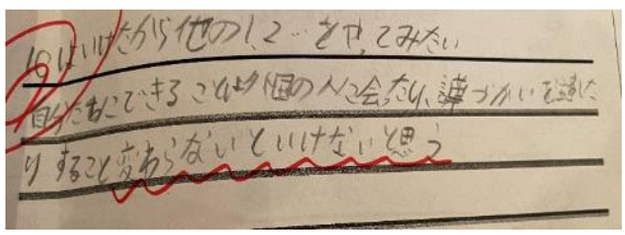
【6】本時の振返り

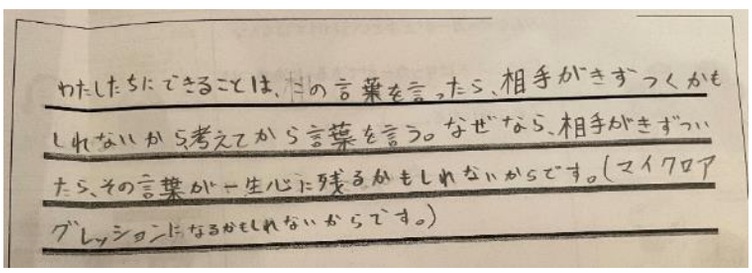
・本時のめあてである「外国につながりのある人たちの思いを考えよう」については、概ね達成できた。しかし、身の回りにあるマイクロアグレッションやこれからの行動について考える時間が少なく、後日振り返りとしてワークシートに書いてもらうこととなった。
・自分たちの身近なところにもマイクロアグレッションがあり、些細な言葉で相手を傷つけてしまうこと、声を上げたり相談したりする過程で解決につなげられることを最後に確認した。
・欠席していた児童はオンライン上で参加してもらい、グループ交流で意見を発表した。

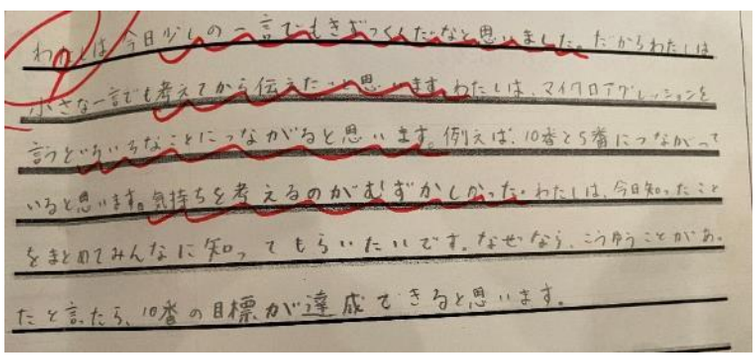
【7】単元を通した児童生徒の反応/変化



振り返りの視点







【感想】
・自分でいい感じに声かけたはずなのに、声かけられた人はその言葉できずつくことがあると知った。
・〇〇人だからできるとはかぎらないから、サッカーできればしてくれない？とやさしく聞いたらいいと思った。
・マイクロアグレッションはされるといやだ。
・言う言葉に気をつけてしゃべりたい。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

・SDGs の目標はそれぞれ関連していること、今後 10 年間は「行動につなげる」ということを学び、「次は〇番の目標についてもっと知りたい。」「相手がどう思うか一度考えてから言葉を伝えます。」など、具体的に自分には何ができるかと考えた児童が多くいた。発表が苦手な児童も Jamboard の付箋やワークシートに自分の意見を書くことで学習に参加した。
【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】
（授業前） ・学年に外国にルーツのある児童が在籍しており、低学年から国際理解の取り組みを行っていた。そのため、異文化に親しむ機会が多く、肯定的に捉えている児童が多かった。 ・その反面、メディア等で海外に関するニュースが取り上げられると、「〇〇人は…だ」というような決めつけを知らず知らずのうちにしている児童もいた。
（授業後） ・「ルーツって何？」という児童の質問から外国につながりのある人々の背景には様々な理由があることを伝えることができた。文化の理解にとどまらず、その人自身を知ろうというきっかけになった。 ・マイクロアグレッションにつながる言動は、外国にルーツのある人だけでなくジェンダーに関する言葉にも関係することから、自分たちの身の回りにもあることだということに気づいた。 ・少数ではあったが、無意識に相手を傷つけている人を見かけたらどのように声を掛けるかと行動につながる意見を考える児童もいた。

【8】自己評価

1. 苦労した点	・限られた時間の中で児童に外国につながりのある人たちの思い、身近にあるマイクロアグレッションと解決のためにとる行動を考えさせることが難しかった。振り返りとしてワークシートに書いてもらうことはできたが、全体での共有が不十分であった。 ・SDGs について幅広い切り口からテーマを設定することに苦労した。学年付きの教員や日本語指導で関わっている通訳の方にも相談をしながら、児童の課題に合わせた学習を考えた。
2. 改善点	・時間配分と内容については、改善する必要がある。 →第 1 時　外国につながりのある人たちが日常生活の中で感じるマイクロアグレッション第 2 時　私たちの身の回りにある無意識の差別・偏見と解決に向けて このように今回 1 時間で行った内容を 2 時間構成として設定することで、児童が考える時間と全体で共有する時間が確保できると考える。
3. 成果が出た点	7 枚のカード（事例）から ・本名ではなく通称名で生活している人がいること ・祖父母の世代に渡日している関係上、日本で生まれ、育っている人がいること ・ハーフ（ダブル）ということを明らかにしたくない人がいること ・日本人のように振る舞うことを求めたり過大評価したりすることは、ちがいの尊重にはつながらないということ ・カミングアウトしたのに「気にしない、今まで通り友だちだ」という言葉は打ち明けたことを無かったことにしている発言とも捉えられること ・〇〇人と一括りに捉えている発言によって傷つく人がいること について考えることができた。 これまで外国にルーツのある人は、仕事など家庭の事情で日本に来ている人とその家族というイメージが大半を占めていた。本授業を通してその背景は様々であり、何気ない一言で相手を傷つけてしまうことがあると多様な見方をするきっかけとなった。

4.　備考（授業者による自由記述）	Jamboard での意見交流(画像は『ちがいドキドキ多文化共生ナビ』より)

添付資料

・『ちがいドキドキ多文化共生ナビ』
　⑦「無意識の言葉が心に刺さる～気づいてほしいこの思い～（マイクロアグレッション)」
　大阪府在日外国人教育研究協議会　　2017

参考資料

・『こども SDGs　なぜ SDGs が必要なのかがわかる本』　著：バウンド　監修：秋山宏次郎　　2020.7
・『SDGs のきほん　未来のための 17 の目標　　不平等　目標 10』　著：稲葉　茂勝　監修：渡邊　優　2020.12
・NHK　for　school　動画『社会にドキリ　世界の人々とともに生きる』

友達の国を知ろう

氏名：中村　寛子　　学校名：神戸市立兵庫大開小学校

担当教科：全教科　　実践教科：特別活動（学活）

時間数：9時間　　対象学年：小学校1年生　　人数：1年生3クラス　計94人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

学級や学年にいる外国にルーツをもつ児童の困り感に寄り添うと共に、その児童の国の人々のくらしや文化に親しむことができる。

【2】 単元の評価 規準例	（ア）知識・技能	日本との違いや、言葉が通じないことによる難しさを理解している。
	（イ）思考・判断・表現	友達の困り感について考え、友達の国の文化について知ったことを中国すごろくに表そうとしている。
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	友達の国や他国の文化について興味をもって、クイズを考えようとしている。

【3】
単元設定の理由

✓ 児童/生徒観
✓ 教材観
✓ 指導観
✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容

【単元設定の理由】

地域には外国人が多く定住し、本校にも外国にルーツをもつ児童がどの学級にも在籍している。市内在住の外国人の方を講師に招いて、その国について理解を深める「こうべ地球っ子プログラム制度（神戸市教育委員会による国際理解教育推進プログラム）」を活用し、毎年１年生で中国についての学習を行っている。ともに学校生活を送り、一見すると共生しているようだが、様々な場面で課題が見えてきている。例えば、友人関係でトラブルがあると「〇〇人だから」という言葉を児童や保護者が口にしていることがあった。

そこで、まずは一番多くの児童が在籍している中国の文化について単元を組み、低学年のうちに体験的な活動を通して中国にルーツをもつ児童の困り感に寄り添い、中国の文化に親しむ学習をさせたいと考えた。児童が中国を単なる外国としてではなく、身近な友達の国として知る機会を作ることで、親しみをもって関わることができるようにし、また他国の文化について肯定的に学ぶことで、外国にルーツをもつ児童との関わり方を考えさせたい。

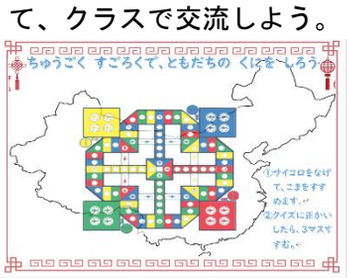
【児童/生徒観】

本学級には、日本語指導が必要な外国にルーツをもつ児童が複数名在籍している。これまでに、学級では毎朝、友達の国の言葉であいさつを行ってきた。漢字学習では、中国の字体も紹介し、中国ルーツの児童の活躍の機会を作ってきた。児童は外国語活動の時間では、ALT との交流を楽しみ、意欲的に取り組んでいる。しかし、国語科の音読発表会の練習では、外国にルーツをもつ児童に対して、「ちゃんと読んでよ。」という言葉を

	なげかける児童がいた。日本語での意思疎通ができるだけに、日本語を母語としない児童の困り感に気付いていないことがうかがえた。そこで、友達の国の文化に親しみ、その違いや困り感を理解することで、「共生」への第一歩につなげようと考えた。 【教材観】 この教材は、本校に在籍する外国にルーツをもつ児童に焦点を当てた教材である。文化の違いや、日本語が分からないことで起こる戸惑いを体感することで、自分たちが外国にルーツをもつ友達に対してできることを考え、友達の国についてより深く知ろうとする学習である。学んだことを生かして中国クイズを作り、それをすごろく形式にして遊ぶという異学年交流を通して、他の学年の児童にも友達の国を知るきっかけとなることを期待している。また、どの学級にも外国にルーツをもつ児童が在籍しているため、全学年で実施でき得るものであると考える。 【指導観】 まず、日本と違う文化に触れる機会をもつ。これまでの外国語活動で学んだアメリカと日本の違いの内容も振り返り、フォトランゲージを活用して生活の違いをいくつか紹介する。この際に、否定的な意見が出ないよう、国によって「あたりまえ」は違うことを押さえたい。また、多言語アナウンスで、日本語が分からない状況を作り、どのような困り感があるのかを気付かせたい。ここでは、持ち物や教室移動など、学校生活の中での出来事をアナウンスすることで、児童がより自分事として困り感に気付けるようにしたい。 次に、学年の友達の保護者をゲストティーチャーに招いて話を聴くことで、中国についてより身近に感じられるようにしたい。 そして、学んだことや調べたことを中国クイズにまとめ、異学年交流という形で発信することで、もっと知ろうとする意欲につなげたい。 また中国とひとくくりにしても、多くの民族が混在している。ここで知ったことが全てではなく、中国のごく一部であることに留意して指導したい。 【設定時に想定された児童・生徒の変容】 友達の国について、学年に在籍する外国にルーツをもつ児童の保護者から話を聴くことで、身近にとらえることができ、他国の文化に親しむ姿が期待される。さらには、そういった児童の姿から、他学年の児童や周囲の大人が「共生」の大切さについて気付くきっかけとしたいと考えている。

【4】展開計画（全９時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 本時	「ちがう」「分からない」について考えよう。 1.日本のあたりまえは、世界でもあたりまえなのか？ 2.「分からない」を体験しよう。 3.自分にできることを考えよう。	1．日本とは違う習慣を写真で見る。 2．多言語アナウンスの校内放送を聞く。外国語で書いてある、たし算の問題を解く。 3．分からなくて困っていた時、周りの人たちにどうしてほしかったかを考えて発表する。	・写真(作成) ・多言語アナウンス(作成) ・中国、ネパールの１年生の教科書（兵庫県 子ども多文化共生センターより）

2 ・ 3	中国について知ろう① 地球っ子プログラム講師からの話を聴き、一般的な中国について知ろう。 （児童が自主的に自由帳にメモを取っている様子。）	中国人講師による世界地図での中国の場所、日本との人口の違い、学校の様子、漢字のルーツについて、歌の紹介 （講師の話を、身を乗り出して聴いている様子。）	講師作成の資料
4	中国について知ろう② お家の人の話を聴こう。 （中国の小学１年生の教科書を見て、漢字の多さに驚いている様子。）	保護者をゲストティーチャーに招いて、中国についてのお話を聞く。 ①私の好きな食べ物 ②動物 ③有名な場所、私のおすすめの場所 ④服、文字、遊び、など 	保護者、子ども多文化共生サポーターの先生作成の資料 インタビューシート
5	伝えたいことを決めよう。 中国の〇〇クイズを作ろう。	話を思い出して、伝えたいことを決める。 各班で写真をもとに中国クイズを作る。 GIGA 端末(一人一台 PC)で検索する。 ①食べ物 ②動物 ③有名な場所、おすすめの場所 ④服、文字、遊びなど	２～４時の資料写真 中国すごろくマップ 関連書籍 50 冊 GIGA 端末 （株式会社明治のサイト「比べてみよう！世界の食と文化」）
6	作成した中国クイズを使って、クラスで交流しよう。 	各クラスが作ったクイズを合わせて、すごろくをする。 	中国クイズ 中国すごろく
7 ・ 8	作成した中国クイズを使って、ペア学年と交流しよう。 ※３学期に実施	ペアの６年生と交流する。 ２年生と交流する。	中国クイズ 中国すごろく
9	他国の文化についても調べてみよう。 ※３学期に実施	書籍、GIGA 端末を使って、気になる国について調べる。 ①食べ物 ②服 ③遊び ④有名な場所、おすすめの場所	関連書籍 50 冊 GIGA 端末 （株式会社明治のサイト「比べてみよう！世界の食と文化」） （キッズ外務省サイト）

【5】本時の展開

本時のねらい：日本と違う文化について知り、友達の困り感について考えることができる。

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5 分)	１．写真をもとに日本と違う習慣を写真で見る。	・本時の写真を見せる前に、外国語活動で学んだ、日本とアメリカの違いを思い出させる。	写真 ・手で食べる。 ・「いただきます」がない。 ・食べる前に、床に食べ物を置く。 ・器の中に少し残す。 ・トイレでは、水・手で流す。
	「ちがう」「分からない」とはどういうことか、考えよう。		
	・ちがう。 ・手を合わせていないとだめ。 ・なんだか、へん。 ・国が違うから、悪いことではない。 ・そういうことをする国もある。	・「日本と違うことは、ダメなことなのか。」「本当に汚いのだろうか。」と問いかけることで、国が違えば、あたりまえが変わることに気付かせる。	
展開 (20 分)	２．「分からない」を体験する。 ・分からない。 ・何を言っているのか、全然分からない。さっぱり。 ・疲れる。いやになる。 ・ぜったいに、分かるわけがない。 ・やりたいのにできない。くやしい。 ・読んでくれたら分かるのに。	・放送中に感じた、「分からない」や「もやもやする感情」を、ワークシートに書いて発表させる。 ・たし算の問題で、簡単な問いなのに言葉が分からないと解けない苛立ちを感じさせる。 ・児童から「読んでくれたら分かる。」と意見が出たところで、ルビうち問題を見せ、それでも意味が分からないと困ることを体験させる。	外国語アナウンス ・休み時間になりました。今日は外に出れる？出れない？ ・次の時間は、体育？図書？ ・掃除が終わったら、帰る用意？漢字の学習？
まとめ (20 分)	３．分からなくて困っていた時、周りの人たちにどうしてほしかったかを考えて発表する。 ・動きで伝える。 ・絵に描いて説明する。 ・準備を一緒にする。 ・次の用意を教える。 ・問題の意味を教える。 ・「分かる？」と、聞いてほしい。	・「教室内でこのような思いをしている友達はいないだろうか。」と、なげかけることで、教室で日本語指導が必要な児童が日常的に困っていたことに気付かせる。 ・児童が考えにくい様子があれば、ロールプレイで何人かに演じさせて、意見が出やすくする。 ・友達のことを理解するために、次時から中国について知ることを伝える。	外国語で書いてあるたし算の問題。 中国、ネパールの１年生の教科書（兵庫県子ども多文化共生センターより） 振り返りのワークシート

【授業実践の様子】

本時作成の資料

【6】本時の振返り

まだ十分に気持ちを言語化できない児童もいるため、「分からない」を体験する活動では、「ええ」「無理」とつぶやいて考えをやめてしまう児童や、集中力が途切れてしまう児童もいた。その様子をとらえて、代弁することも必要だと感じた。

まとめの活動では、日本語指導を必要とする児童が、「あっ、それ、わたしのことだ。」「いつも分からへんねん。」と、自分の言葉で話せたことが大きかった。分からなくて困っている友達にどう関わるかについて考えたことで、外国にルーツをもつ児童だけでなく、学びに課題のある児童からの意見も活発に出たことが意外な効果だった。国際理解として取り組んだが、困り感がある全ての児童への支援につながることを実感した。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

世界地図で中国や他の児童の国、ALT の国を探したり、オリジナルのクイズを作ったりと、積極的に関わろうとする姿が見られた。学習のまとめとしてすごろく形式で遊ぶことで、楽しみながら活動ができ、もっとやってみたい、もっと調べでオリジナルクイズを作りたいと、主体的に取り組もうとする姿が見られた。

以下、児童の感想より。(抜粋)

・中国からいろいろなものが来たなんて、すごい。おぼえておきたい。
・中国すごろくが面白かった。中国クイズをもっとしたいし、中国のことをもっと知りたい。
・いっぱい学べたので、次は違う学年に中国クイズをしたい。
・ママに中国クイズをしたよ。ママは全然分からなかったよ。また、難しい問題を出そうと思うよ。私の国のクイズも作ってみる。(ベトナムルーツの児童)
・冬休みにお父さんと中国に旅行に行きたいな。どうやったら行けるかな。
・パンダが中国にしかいないなんて、初めて知った。絶滅の危険がある動物がたくさんいた。生き物って大切だな。長生きするように大事に育てて守る。
・(中国ルーツの児童) もっと違うことも知りたいな。中国の他の場所にも行ってみたいな。もっとおいしいものがたくさんあるから、教えたいな。
・(日本語指導を必要とする児童) わからないし、書けない時もあるけど、「あのねちょう」をいっぱい書けるようにがんばるよ。
・アメリカ(ALT の国)はどんな暮らしをしているのか知りたくなった。
・ケビン先生(ALT)の言葉は分るときと分からない時があるから、英語が分かるようになりたい。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

関連する書籍を約 50 冊用意し、GIGA 端末でも調べられるようにした。また、朝の読書の時間に自分で調べられるようにした。児童はオリジナルの中国クイズを作ったり、家でも話したりして、保護者からも反響があった。興味が広がり、他の国についてこちらが声をかけるでもなく、自ら調べている姿が数多く見られた。単元後に新しく来た ALT に対して、その国を地図で調べようとしたり、「クイズを作りたいから聞きに行こう」「本、GIGA 端末で調べてみよう」としたりする姿も見られた。

日本語指導が必要な児童や、周りで困っている児童に対して、「はやく」「ちゃんとして」という言葉は聞かなくなった。「『分からない』ってどんな気持ちだったかな。」と、問いかけると、「あっ、そうか。」と、自分から動く姿が増えた。

異学年交流については、３学期に実施予定である。上の学年に伝えられることを楽しみにしている。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】
（授業前） 　ネパールでは食事を手で食べる、アメリカでは歩きながらハンバーガーを食べる（ALT の話）等を、初めて知った時は「なんで」「だめなのに」「汚くないのかな」といった率直な感想が出ていた。
（授業後） 　「国が違うから、あたりまえなんだ。」「汚いことではないね。」「意味が分かったら『違う』ことって、面白いし、学べる。」と、肯定的にとらえられるようになった。 　中国について書かれている本や、様々な国の文化について紹介してある本を見せながら、外国にルーツをもつ児童に積極的に関わるようになった。また、中国にルーツをもつ児童も、自身の国について知らないこともまだまだ多く、自分で調べるようになった。

【8】自己評価

1. 苦労した点	低学年にとって相手の立場になって考えることは容易ではなく、道徳の授業ではロールプレイや実体験を大切にしてきた。そのため、本単元でも児童が体験を通して考えられる内容が重要であると考えた。そこで、事前研修で行った多言語アナウンスでの防災ゲームを、低学年にも身近に感じられるように学校生活の内容に変えて作成した。 　保護者をゲストティーチャーに招くため、内容の打ち合わせや１年生でも分かる内容にすることが必要だった。当日来られない方もいたため、インタビューシートのような形で、様々な保護者の意見が取り入れられると、より多くのことを、より身近に感じられるのではないかと思った。
2. 改善点	多言語アナウンスを流す際に、１年生だとすぐに答えを言ってしまいがちなため、クラスのどの児童にも分からない言語でのアナウンスにした。ただ、そのクラスにいる児童の言語でのアナウンスも取り入れることで、普段とは違って日本語指導が必要な児童が優位に立って活躍する経験ができることも、授業の大きな意義になるのではないかと考える。 　今回は、単元を通して、文化の違いに大きく焦点を当てた。しかし、違いのみでなく、日本と同じ部分や、国が違っても共通する思いについても考える時間をとれればより深まるのではないかと感じた。
3. 成果が出た点	児童はもちろんのこと、保護者や教員への反響もあったことが大きな成果だと感じた。どの学年でも実施できるように、汎用性のある教材になることを目指して教材を作成した。そのため、多言語アナウンスを録音してパワーポイント上に添付し、誰もが授業で使える教材にした。その成果もあり、２学年が実施をし、校内でもその反響があった。
4. 備考（授業者による自由記述）	校内での反応が予想以上に早く返ってきたことに驚いた。今後、毎年１年生でこの授業ができるように、さらに改善していきたい。また、市内の研究会でも発信することで、今回の研修で学んだことを還元していきたい。

添付資料：作成資料、海外の教科書（中国、ネパール）、
参考資料：「新版 世界の学校（学事出版）」、「国際理解教育ハンドブック（明石書籍）」、「JICA 地球ひろば主催 国際理解/開発教育指導者研修 授業実践事例集」

SDGs をアート作品にしよう

氏名:　船曳　妙子　　学校名:　奈良市立青和小学校

担当教科:　図工科　　実践教科: 図工科

時間数: 全 10 時間　　対象学年:　4 年生　　人数: 79 人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）:

SDGs を達成するために子ども達の考える具体的な問題解決をポスター化して作品表現する。
作品作りの過程でリサイクル出来る物はリサイクルして行く。
ポスターを鑑賞しながら学び合う。

【2】 単元の評価 規準例	（ア）知識・技能	SDGs ゴール達成に向けたポスターを世界の国々との繋がりを持たせて、作品表現できる。
	（イ）思考・判断・表現	自分や友達の作品の表現・技法を言語化して伝えられる。
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	リサイクル物を工夫して作品に融合できる。

【3】
単元設定の理由

✓ 児童/生徒観
✓ 教材観
✓ 指導観
✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容

【単元設定の理由】

SDGs ゴール目標について、環境やリサイクルの視点については、1学期より子ども達に「おもしろダンボールボックス」や2学期の「コロコロガーレ」等の授業を通じて啓発してきた。リサイクル×環境×アート作品制作の取り組みを、一時的なものではなく、今後の作品作りにおいても継続して行きたい。

名画鑑賞や自分とクラスの友達の作品鑑賞は、1 学期より行って来たが、鑑賞会と言う形式では催した事がなかった。図工科の新指導要領においては、作品鑑賞における教育効果についても言及されている。自分や友達の作品について気付いた事について、言語活動を通して伝え合う力を育んで行きたい。

【児童観】

本クラスの子ども達は、図工授業において創作意欲が非常に高い。

本学年の児童達が 3 年次には外国語及び書写学習指導で関わって来た。異文化理解については外国語指導においても行って来たが、今度は図工科の授業を通して国際理解の視点の導入を実現したい。

【教材観】

SDGs ゴールを画用紙作品に絵の具等を用いて表現して行く事を通して、教科を越えて社会的な物の見方を育成できる。

ゴミ削減や SDGs ゴールを考えるために、小学校がアート作品や芸術作品制作を通じて出来る事の可能性を探究するに相応しい教材である。

【指導観】

　図工科の視点では、子ども達の下絵へのフィードバックの過程において、自分達の身近な物や人達だけを図案化するのではなく、遠い国にいる人達や自然環境の事、普段接していない人達の事も考えて、絵に表現することで、子ども達のより広い視野で問題を考える力を育成できる。

　制作の過程で、絵の具の扱い方、リサイクル出来る物の図工作品への活用の仕方を考えられよう。

●設定時に想定された児童の変容

　本授業を通して、子ども達は自分の身近な問題を世界全体、さらには地球規模で考える事ができるようになるであろう。

　自分の欲求のままに行動するのではなく、未来の事も考えながら行動するよう行動基準が変容して行くであろう。

　困っている人の立場で、より社会的問題を考察して行けるように、変化し続けて行くであろう。

【4】展開計画（全　10　時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	○SDGs について知る。	○SDGs の歌を歌う。 ○環境破壊についてビデオ学習する。 ○SDGs についてパンフレットを見る。 ○世界の課題である「SDGs」について知る。	・テレビ ・SDGs ブック ・Chrom Book ・四つ切り画用紙 ・スケッチシート ・NHK「SDGs かるた」 ・JICA フォトランゲージ教材「世界の課題を考える」
2	○アイデアスケッチを書く。	○自分の関心のある SDGs テーマについて学習する。 ○NHK SDGs かるた作り特設サイトで自分の関心のあるテーマ動画を見たり、キーワード検索で画像イメージを参考にアレンジして行く。 ○イメージが表出しにくい児童に、JICA 教材やキーワード画像検索を手伝って見せて、写真からのイメージをフォトランゲージで広げて行く。	・テレビ ・SDGs ブック ・Chrom Book ・四つ切り画用紙 ・スケッチシート ・NHK「SDGs かるた」 ・JICA フォトランゲージ教材「世界の課題を考える」
3	○画用紙に下絵を描く。	○画用紙に表現したい事を下絵する。	・テレビ ・SDGs ブック ・Chrom Book ・四つ切り画用紙 ・スケッチシート
4	○絵の具で表現する。	○グラデーション・ぼかし・混色・重ね塗り等絵の具技法に気を付けて色付けする。	・絵の具
5	○スパッタリングや小道具を活用して色付けする。	○モダンテクニック・型の付く小道具を使って色付けする。	・スパッタリング教具
6.	○コンテで描く。	○コンテ・クレパスでふちどりする。	・コンテ

7	○リサイクル出来る物を 活用しよう。	○接着剤を使ってリサイクル出来る物を コラージュして融合する。	・リサイクル用品 （リボン・新聞紙・ ストロー・色紙・ 毛糸・はぎれ等）
8	○八切り画用紙を 組み合わせる。	○四つ切り画用紙に八切りを組み合わせて 変形させる。	・リサイクル用品 （リボン・新聞紙・ ストロー・色紙・ 毛糸・はぎれ等）
9	○鑑賞会に向けて自分の作 品の見てもらいたい所を 言葉に表す。	○自分の作品の表現テーマ・創作の工夫を 文章化する。	・240 字詰め作文用紙
本時 10	○SDGs 作品鑑賞会をしよう。	○グループで作品を鑑賞し合う。	・付箋（75mm ×127mm）

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入	・SDGs ソングを歌う。	・SDGs パネルを鑑賞会の雰囲気を盛り上げるため教室に並べる。 ・付箋は休み時間中に配布。	・NHK SDGs ソング『色とりどり』 ・三菱アジア子ども絵日記フェスタ貸し出し用 SDGs セットパネル
(35 分) 展開	・目当てと活動手順の確認。 「SDGs 鑑賞会をしよう。」 「付箋には、お友達の作品の真似したい所・良い所を書こう。もし、もっとこうしたらさらに良くなるよ、というアドバイスもあれば書いて良いです。」 ・グループで発表する順番を決める。 ・教室の四つ角のブースで発表グループは、準備をする。 ・グループで最終の練習をする。 「タイマーが 5 分経ったら練習を止めて、本番を始めましょう。」 ・1 グループが終わったら、交代して、 発表と鑑賞を順番に行う。 ・早く終わった 2 ブースから順次グループの組み合わせを変えて、時間まで発表と鑑賞をし合う。	・グループメンバーの構成に配慮して、1 グループ 3~4 人のグループを 8 班作る。 ・コロナに配慮して空間を持たせて班で机を輪にして発表者は立って発表。 輪の中で発表しても良い。 ・発表者は赤帽、鑑賞者は白帽をかぶり、視覚的区別を付ける。 ・大きめの付箋を配り、 付箋に発表者への感想を 記述する。 ・5 分経過後、ベルを鳴らし、練習と本場のメリハリを持たせる。 ・発表者の声が聞こえるように黙って聞くように注意する。	
(5 分) まとめ	・感想をシェアする。 「褒め褒め言葉、フワフワ言葉もらえて、お友達の作品の良い所探しよく頑張りました。」	・感想を聞いて嬉しかった事を共有する。	

【授業実践の様子】（本時での写真を添付し、キャプションをつけて下さい）

SDGs のゴールの作品(リサイクルに活用した物:ペットボトルキャップや新聞紙、ミシン糸の芯、レジ袋、お菓子袋、不要になったネット、プラスチックトレー・紙皿、毛糸、ペットボトル等) / 鑑賞用付箋 / 発表原稿 / 画用紙の表面や裏面にはテーマに合わせたキャッチフレーズを考えさせた。

【6】本時の振返り

道徳や国語科授業や教員研修で、扱う事のあった付箋を、図工の鑑賞指導に使用するのは、私は初めてだったが、発表後にすぐフィードバックをもらえた事が嬉しそうだった。

社会を見つめる目、世界を見つめる目が広がって、様々な SDGs のテーマで見合う事で学びの質が高まった。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

友達に付箋に良い所を書いてもらう事で、自尊感情や自己肯定感を高める事が出来た。

作品を通して、友達と自分の作品の良い所探しが出来て良かった。

JICA 教材やフォトランゲージ用写真を個別にイメージ出来ない児童に安全な水、世界の飢餓の状況等を伝えるために、写真提示したら、なるほどと納得していた。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】
始めは、自分目線で、自分の身の回りに日常よく目にする事象しか想像を巡らせる事が出来なかったが、繰り返し、「自分の身の周りだけでなく、海外や世界中の人達、動植物、食べ物にも目を向けよう、と声掛けして行く中で、国際理解、多文化共生を感じられる作品に仕上がった。 NHK SDGs ソングを毎回、片付け時にかけていたため、リズムに合わせ、SDGs17 目標を歌いながら覚えられた。
【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】
（授業前） 児童は、人の絵を描く時も、自分の教室にいるお友達のような絵になりがちだった。 食べ物についても普段よく口にしている物、動物や植物を描いてもよく見る日本の動植物が多かった。自分の生活圏が狭く限られているため、イマジネーションも限定されたものになりがちだった。
（授業後） 人の絵を描くに際しても色々な人種の人達の肌色、髪色、目の色を描いたり、高齢の方、怪我や病気、障害のある方々と共生している絵を描けるようになった。 海の色を塗る時には、日本に見ないような色の海の色や、環境問題を絵に表現するために、赤潮等の社会問題についても、表現描写出来るようになった。 食品ロスの問題を取り扱い、食事の絵を描写した時、海外の食事についても考えたり、国外の生態系についてもイメージを想い巡らせるように変化し、成長を感じられた。

【8】自己評価

1. 苦労した点	児童は SDGs について授業で初めて学ぶため、最初のアイデアスケッチで、イメージを膨らませ辛く、単元の当初は作品のイメージ図案スケッチに時間を要する児童が少なからずいた。 リサイクル品を作品に融合して行く発想が、ひらめきにくい児童も少なくなかった。
2. 改善点	SDGs を図工科で立体表現の作品にするなら、どのように進めて行くか、またどのようなリサイクルツールを用いるかについても、今後の研究課題である。 発表の原稿を画用紙作品の裏に貼らせたが、次の発表者に絵を持って、みんなに見せてもらい、発表当事者は作文用紙のみを持たせて読ました方が、作品が鑑賞しやすく良かった。 付箋を画用紙裏に貼り付けたが、すぐはがれやすいため、別途糊付けさせた方が返却時の付箋回収が容易である。
3. 成果が出た点	身の回りにある廃棄物を図工作品に活かして行くという楽しさを児童自身が発見して、発想力豊かに工夫する事が出来た。 他の児童の発表を最終授業で聞き合う言語活動を生かして、友達の SDGs テーマにも関心を高められた。 子ども達は作品鑑賞の時間を通して、クラスメイトとのコミュニケーション力を高められた。
4. 備考（授業者による自記述）	図工科の中で国際理解に関わる事、多文化共生について考えられる機会を持て、児童のイマジネーションが豊かになった変容ぶりを目の当たりに出来て、良かった。 SDGs について、身近な事から世界中に想いを馳せて考えてもらう事が出来て、嬉しい。 JICA 教材 SDGs ブックカバーを 3 学期に配布し、年間を通して継続的に SDGs への意識を浸透させて行きたい。

添付資料：
・NHK「みんなでつくろう SDGs かるた　ひろがれ！色とりどり」
・NHK SDGs のうた「いろとりどり」
・作:ジョージナ・スティーブンス　岩崎書店 2020
『ステラとカモメとプラスチック　うみべのおそうじパーティー』
・三菱アジア子ども絵日記フェスタ貸し出し用　SDGs セットパネル
・Dolphins&Oceans　YouTube
「海洋プラスチックごみ問題について、イルカくんが教えてくれた」

参考資料：
●「未来の授業　SDGs ライフキャリア BOOK」
(佐藤真久,宣伝会議,2020)
●「やさしい英語で SDGs！
地球の課題(global　issues)を英語で学び、未来を語ろう！」
(本間正人　山本ミッシュールのぞみ,合同出版,2021)
●「CLIL 英語で考える SDGs 持続可能な開発目標」
(Shigeru Sasajima 他,SANSHUSHA)
●「WE HAVE A DREAM　201 countries 201 dreams
with sustainable development goals」
(WORLD DREAM PROJECT,IROHA PUBLISHING,2021)
●「HOW TO SAVE YOUR PLANET ONE OBJECT AT A TIME」
(DR TARA SHINE, Simon&Schuster UK,2020)
・『わたしたちがつくる未来　SDGsSTART　BOOK 持続可能な開発目標』東京書籍株式会社

色々な国を知ろう

氏名:堀居　真帆　　学校名:滋賀県高島市立マキノ南小学校

担当教科:小学校全科　　実践教科:学級活動　道徳

時間数:　4 時間　　対象学年:1 年　　人数:13 人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

・外国の食事について知り、他国の文化に親しむ。
・日本と他国の文化の違いを知る。

【2】単元の評価規準例	（ア）知識・技能	日本と他国の共通点や相違点について考えることができる。
	（イ）思考・判断・表現	様々な国があり、それぞれの文化があることに気づくことができる。
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	他国の人々や文化に親しむことができる。

【3】単元設定の理由

本学級の児童は、世界には様々な国があることを知っている。しかし、学級、学校内において外国にルーツを持つ児童は在籍しておらず、他国の方、自分たちと違う文化への抵抗が大きい。日本の文化への意識も薄い１年生ではあるが、遠く離れた国の写真を見て、同じところや違うところを見つける活動を通して、親しみを持ち、他国を身近に感じることができるようにしたいと考える。

この単元では、食事をテーマにして学習を行う。食事は、子どもにとって身近なものだと考える。普段日本の食事の様子と海外の食事の様子を比べてみることで、「同じだなあ」、「似ているなあ」、「違うなあ」という気づきを大切にしながら学習を進めていきたい。

この学習を通し、大きい変容を見ることは難しいかもしれない。しかし、海外では自分が思っている当たり前のことばかりではないこと、同じところもあれば、違うところもあるのだということに、少しでも気づくことができる時間になるようにしたい。

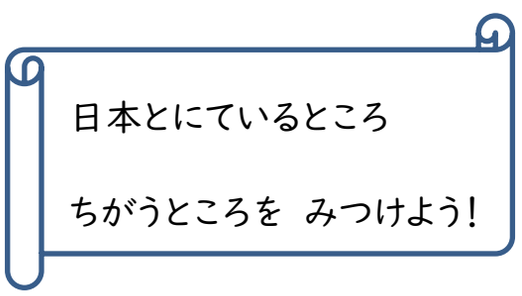
【4】展開計画（全４時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	○せかいのくにから オリンピック・パラリンピック（道徳） ・世界にはいろいろな国があることを知る。	・オリンピック、パラリンピックの写真を見て、気づいたことを話し合う。	・道徳の教科書 ・オリンピックの写真 ・世界地図
2	○日本の食事について振り返る。	・普段の食事を思い出し、どんなものを食べているのかを考える。	
3 本時	○様々な国の食事を知る。 ・日本と海外の食事を比べて、似ているところもあれば、違うところもあることに気づく。	・写真を見て、気づいたことを交流する。 ・日本の食事と、海外の食べ物を比べて、似ているところと違うところについて話し合う。	・写真
4	○タイ、台湾、アメリカ合衆国、カンボジアの小学校の様子を知る。 ・小学校の生活の様子を知り、たくさんのおなじところ、違うところがあることに気づく。	・それぞれの国の学校生活について知ることで、自分たちの学校生活との違うところについて考える。	・写真

【5】本時の展開

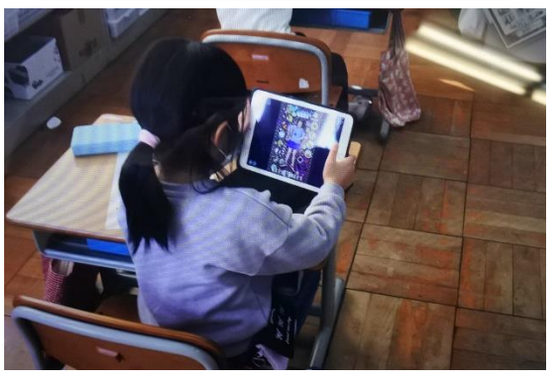
過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 （１０分）	１．日本の食事について話し合う。	・食卓の写真を見て、普段食べている食べ物を出し合うことで、日本の食事のイメージを持つ。	・写真
	日本と外国の食事をくらべてみよう。		
展開 （２５分）	２．アメリカ、ブラジル、フランス、インドの食事の写真を見て、気づいたことを発表する。	・食事だけでなく、その国の雰囲気も意識させる。 ・全体で、気づいたことを交流することで、多くの視点を持てるようにする。	・写真
	３．日本と比べてみて、共通点や相違点を見つける。	・出た意見を、色分けして整理することで、共通点と相違点を視覚的に捉えやすくさせる。 ・食事の雰囲気の違いに気づき、その中でも同じものを食べているということにも気づかせるように、様々なものに着目させる。	
まとめ （４０分）	４．学習のふりかえりをする。	・考えたことや気づいたことを認めていく。	

【授業実践の様子】（本時での写真を添付し、キャプションをつけて下さい）



日本と全然違う!

見つけたことを友達に伝えよう!



【6】本時の振り返り

アメリカ
・ピザ・アメリカンドッグ・ウインナー
・パスタ・ポップコーン・りんご・ポテト
・好きな食べ物ばかりでいいなあ
・食べ過ぎ
・お皿がかわいい

ブラジル
・バナナが腐っている・魚・足が赤い
・野菜が多い・知らない食べ物が多い
・体に絵がかいてある

フランス
バナナ・ソーセージ・フランスパン・ヨーグルト

インド
お菓子が多い・赤いものが多い
・ドレスがかわいい・ごはん・

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

・ひこうきにのって、ほかのくにへいってみたいです。
・インドにいってみたいです。
・日本とちがうところがたくさんありました。
・メキシコにいってみたいです。
・フランスにいってフランスパンをたべたいです。
・アメリカにいきたいです。なぜかというとアメリカのハロウィンをしたいからです。
・日本いがいのひととのちがいがわかりました。
・外国の人となかよくなりたいです。
・フランスと日本のごはんがぜんぜんちがいました。
・もっとほかのくににいきたいです。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

学習前から、教室に世界地図を貼っていた。学習が進むにつれて、世界地図に興味を持ち始める子が多くなっていた。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】

（授業前）

授業の初めに知っている国について聞いてみると、「アメリカ合衆国」、「中国」、「韓国」、「インド」があがっていた。「アメリカ合衆国に行ってみたい」や、「韓国料理を食べに韓国に行きたい」という意見がある一方で、「中国」、「インド」に対しては、「汚い」というイメージが強いようで、行ってみたくないという子が多くいた。

外国語の学習の中で、ALT が住んでいる国のハロウィンの紹介の時には、子どもたちは、日本でのハロウィンの文化しか知らず、文化の違いに対して「変なの」という声が聞こえていた。

（授業後）

海外の食事の写真を提示すると、「全然違う」と、違いに驚いていた。その中でも、じっくりと写真を見て交流を続けていくと、「これは日本にもあるなあ」と、同じところに気づくことができた。

様々な国の食事や文化について知っていく中で、日本での当たり前が海外では当たり前ではないことに驚きながら、「すごいなあ」や、「おもしろいなあ」と、前向きな意見が出てきた。はじめは「汚い」イメージが出ていた「インド」に対しても、「インドの料理を食べてみたい」という意見が出てきていた。

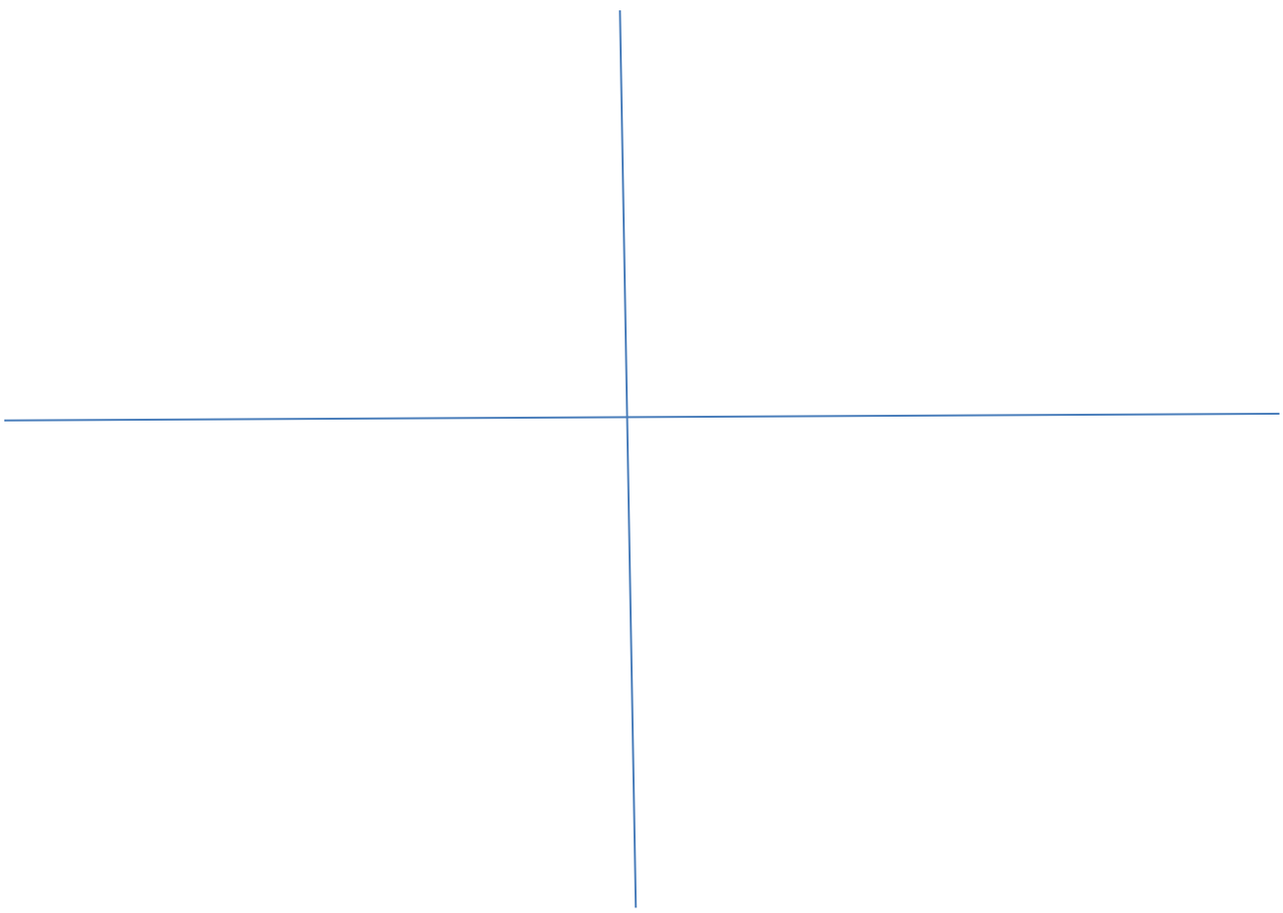
【8】自己評価

1. 苦労した点	写真を見て、気づいたことを伝えることは出来たが、写真を比べて、共通点や相違点を見つけることは 1 年生には難しかった。「同じ食べ物を見つけてみよう。」「初めて見る食べ物に印をつけてみよう。」と声掛けをすると、「同じところある！」と、気づくことができていた。
2. 改善点	苦労した点でも述べたように、1 度にたくさんの情報を与えてしまったので、情報量を絞って、少しずつ共通点や相違点について考えることができるとよかった。 時間に余裕があれば、今回の学習で学んだことで、学習を広げられると良い。
3. 成果が出た点	子どもたちは、学習前から外国について興味を持っていたが、この学習をしてから、さらに意識するようになったと感じる。また、海外の文化について、初めて知ることに対して「変なの。」という言葉が聞こえてきていたが、学習が進むにつれて、「違うところがあっておもしろい。」と前向きに文化の違いについて捉えることができるようになってきた。生活科の学習で、日本の昔遊びの学習をしている時にも、「海外ではどんな遊びがあったんかな。」と、海外の遊びにも目を向ける場面があった。 教師自身が撮影した写真を提示し、話をすることで、その時の様子など詳しく話をすることができた。そのことで、「この国に行ってみたい」という思いを引き出すことができたと考える。
4. 備考（授業者による自由記述）	日本と海外の文化が違うように、同じクラスの子どもたちの中でも様々な違いがある。そのような違いにおいても、違って当たり前、色々な違いを受け止めて、認め合えるようにしてけると良い。

添付資料：
ワークシート

いろいろなくにをしろう！

名前（　　）



きょうのがくしゅうで　わかったことをかきましょう。

参考資料：

地球の食卓（2006　TOTO 出版）

世界の子どもたちは毎日何を食べている？写真で見る現実と理想

https://www.buzzfeed.com/jp/gabrielsanchez/this-is-what-kids-are-eating-1

世界の家庭料理を比べてみよう！｜比べてみよう！世界の食と文化

https://www.meiji.co.jp/meiji-shokuiku/worldculture/culture/

多文化に生きるわたし

氏名：吉川　優（旧姓:檜山）　　学校名：　神戸市立桜の宮小学校

担当教科：全教科　　実践教科：総合的な学習の時間

時間数：5　　対象学年：　6 年　　人数：30 人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

自分が多文化の中で生きていることに気づき、文化が違う相手とも、共により良い社会を築くために大切なものは何か考えることができる。

【2】 単元の評価 規準例	（ア）知識・技能	日本と外国の文化の違いはもちろん、日本人同士の文化も異なることを理解している。
	（イ）思考・判断・表現	異なる文化の人同士でより良い社会を築くために大切にしたいことを考え、自分の言葉で伝えている。
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	外国籍の友達やクラスの友達のことについて、興味をもって考えようとしている。

【3】
単元設定の理由

✓ 児童/生徒観
✓ 教材観
✓ 指導観
✓ 設定時に想定された児童の変容

【単元設定の理由】

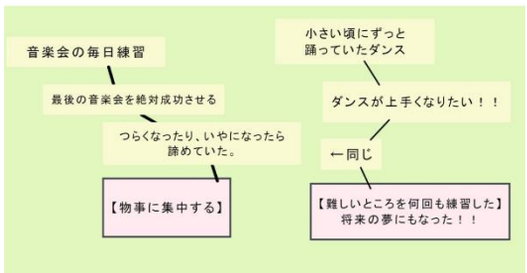
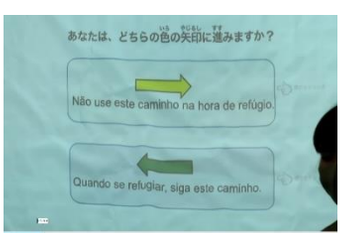
本校は、全校児童 160 人が通う小規模校であり、通常の学級はすべて単学級である。また、そのまま同じ中学校へ進級する校区であることから、転入生や私立受験生を除いて 9 年間をほとんど同じクラスメイトと過ごすことになる。また、普段外国籍の方と関わる機会がほとんどない地域でもある。そのような子供たちに対し、多文化社会の中で人とどう関わっていくべきなのか考えることを通して、自分たちの生活する社会にも異なる文化があふれていることを気づくようにしたい。

【児童観】

昨年に引き続き本学級の担任をしている。単学級で過ごしてきたこともあり、男女問わず仲が良い。ペアトークやグループワークはもちろん、全体での発表においても、積極的に意見を交わす姿が見られる。一方で、異なる意見や考えを受け入れることに抵抗がある子供も多い。今年度の全国学力学習状況等調査質問紙調査の結果では、「自分と意見の異なる人と話すのは楽しいと思いますか」との問いに対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた子供の割合が 6 割に満たなかった。これは全国平均より 20 ポイント弱も低い結果であった。これは、同じ仲間と長い間過ごすことで互いを理解し、人間関係の深まりを感じる一方で、異質の考えなどに触れる機会に恵まれなかったのではないかと考える。そこで、今まであまり交流することのなかった他国籍の子供と交流する機会を設定し、文化も価値観も異なる子供との関わりを通して、「自分との違い」に触れ異文化を理解する経験を積ませたいと考えた。

	【教材観】 　この単元は、普段外国の方と関わることのない子供に、日本という外国で生活する多国籍の人と関わる機会となる教材である。その際、自分たちと同じ神戸市に住む同世代の相手である神戸市立義務教育学校港島学園の国際教室の友達と交流をすることで、相手をより身近に感じてほしい。そこで出会いの前に、港島学園の友達の立場を共感的に理解することをねらいとして震災体験ゲーム「何が起こった？」を実施する。この活動は、言葉が通じないことへの不安や生活で困ったことを体感するために行う。交流後の「オープン・ザ・〇〇」のワークショップは、互いの違いを明らかにすることにより、クラスの中にも多くの異なった文化があることに気付かせることができる活動である。 【指導観】 　今まで生きてきた 12 年間を振り返るところから学習を始める。自分たちが多種多様な関わりの中で生活していることや、その中で成長してきたことを思い起こすようにしたい。ここでは、先述した学力調査の結果を伝えることで、「自分と意見の異なる人」とのかかわりに課題があることを知らせたい。 　次に、自分たちが思っているよりも身近なところに多文化が存在することを実感できるようにするために、同じ神戸市内の小学校である港島学園国際教室の友達との交流を行う。震災体験ゲーム「何が起こった？」を通して、交流相手がどのような環境で過ごしているのかをイメージし、交流相手が感じてきたであろう、言葉が分からないことへの不安や生活で困ったことを体感できる機会としたい。オンライン交流では、お互いの国のことや日本で暮らしてきた経験を共有したり、一緒にできるアクティビティを取り入れたりして、他国籍の者同士でも楽しい時間を過ごす経験ができるようにしたい。 　子供たちが「自分と文化が異なる人」とも楽しく過ごせる体験をした上で、普段一緒に過ごしているクラスの中も、「小さな多文化」の一つとしてとらえ、各々の違いに気づかせたい。そのために「オープン・ザ・〇〇」では、いくつかの項目について自己開示を行う中で自分と相手の違いを明確化したい。さらにその中に１つ嘘を混ぜて、相手にどの項目が嘘なのかを考えさせることで、楽しみながら相手の内面を想像させていきたい。自分たちが過ごしているクラスでさえ、多くの「小さな文化」にあふれていることに気づき、異なる文化をもつことの良さと楽しく過ごしていくために大切なことは何かを考えることができるようにしたい。 【設定時に想定された児童の変容】 　外国籍の友達との関わりもほとんどなく、ずっと同じクラスメイトと過ごしてきた子供が、港島学園の友達との交流や自己開示の活動を通して、互いの文化の「違い」を肯定的にとらえ、受け入れて行こうとする姿勢を引き出していきたい。その中で見えてくるであろう様々な多文化の中で自分たちが生きていくことを実感してほしい。

【4】展開計画（全 5 時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	生まれてからこれまでの 12 年間を振り返り、自らが関わってきた社会の広がりを感じ、自分たちが得たもの、足りないものは何かを考えよう。	・生まれてからこれまでに関わってきた人々を思い起こし、自分が生活する世界がどのように広がってきたのかを考える。 ・6 年間の自分の成長を振り返る。 （文集制作と兼ねて実施）  ・学力調査の結果から、「異なる意見の友達と話すこと」に抵抗がある人が多いことに気づく。	SKYMENU 発表ノート 全国学力学習状況等調査質問紙調査結果
2	港島学園国際教室で学習する子供たちの存在を知り、交流計画を考えよう。	・港島学園の子供たちの母国について調べ、質問したいことを考える。 →地図上の場所はどこかな。 →どんな言葉を話すのかな。	タブレット端末
3	外国で生活することはどういうことかを考えよう。  	・言葉が分からない外国で被災する状況を仮定したワークショップを行う。 →避難経路はどちらだろう。 →避難所で支給される物資は、どれを選べばいいのだろう。 ・言葉や文字が分からないことから生じる不安な気持ち（＝港島学園の国際教室の子供たちが初めての日本の学校生活で感じたであろう気持ち）を体感する。 ・外国の友達が身近にいたときに、自分たちにできることを考える。	震災体験ゲーム「何が起こった？」（(公財)滋賀県国際協会）

4	多文化の中で生きる同世代の子供たちと出会い、異なる文化同士の人たちが交流する良さに気づこう。 	・港島学園国際教室の友達と交流し、世界に存在する多様な文化を知り自身を振り返るきっかけとする。 →お互いの自己紹介をする （桜の宮小学校の場所や、6 年 1 組の紹介） →事前に考えていた質問や、その場で新たに　出た質問に答えてもらう。 ①どうして日本へ来たのか ②日本の学校の好きなところ ③自分の国と日本の違うところ ④日本に良いところ 住みにくいところ ⑤自分の国の食べ物やイベントについて ⑥好きな日本語 →「あるものしりとり」をして遊ぶ。 ※教室にあるものだけを使って、お互いにカメラを通してそれらを見せ合いながらしりとりをする。 	国際教室の子供たちの母国の簡単な挨拶一覧 Teams チャット機能
5 本時	様々な角度から見た自分を互いに伝え合うことで、クラスの中も「小さな多文化」であることに気づこう。	「オープン・ザ・6 年 1 組！」 ・PowerPoint を用いて、自己開示する 4 つの項目を記入したカードを作成する。 （以下の 6 つから 4 つを選択する。） ①性格を一言で ②好きな〇〇、苦手な〇〇 ③わが家のこだわり ④今自分が大切にしていること	PowerPoint （以下　PPT）

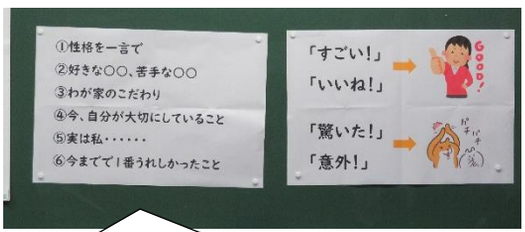
		⑤実は私…… ⑥今までで１番嬉しかったこと ※選んだ４つのうち、１つは嘘の内容を記入する。 ・作成したカードをグループで共有し、聴く側は相手の嘘を考える。 ・クラスの中にも様々な文化や価値観があることに気づき、異なる文化をもつ相手と関わるために大切なことを考える。	SKYMENU 発表ノート

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5 分)	１．港島学園の子供たちとの交流を振り返り、本時のねらいを確認する。	・国籍の異なる友達との交流を振り返り、次はクラスの友達と交流することを伝える。	
	クラスのみんなの文化を知ろう		
展開 (25 分)	２．「オープン・ザ・〇〇」を作成する。 ・複数の項目から４つを選び、配付する PPT に自分のことを書く。（１つだけ嘘の内容を入れる。）	・活動のイメージをもつことができるように、教師がデモンストレーションとして自己開示をする。 ①性格を一言で ②好きな〇〇、苦手な〇〇 ③わが家のこだわり ④今自分が大切にしていること ⑤実は私…… ⑥今までで１番嬉しかったことの６項目から４つを選ばせる。	参考：JICA 横浜 2019 年度教師海外研修実践授業レポート PPT 資料 「オープン・ザ・〇〇」 中央に今の自分を表す写真を張り付け、周りに項目を記載。 アニメーションで項目ごとに見せられるようにしておく。
	３．カードを使って友達に自分のことを伝える。 ・グループごとにカードを使って、自分のことを伝える。 ・他グループの子供は聞いて、どれが嘘だったかを考える。 ・6 年間一緒に過ごしてきてもみんな違う文化を持っている。	・１項目ずつ見せながら、相手に自分のことを伝えるように促す。 ・聞く側は、「すごい」「いい」と思ったときは Good サイン、「驚いた」「意外だな」と思った時は、拍手で反応を示すように助言する。 ・より興味をもって相手のことを考えられるようにしたいので、嘘を混ぜることを助言する。	

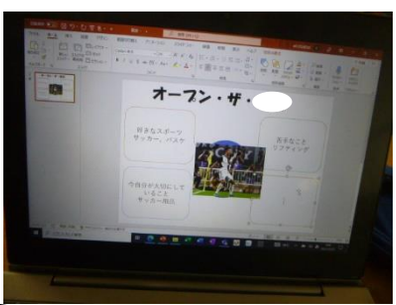
まとめ (15 分)	４．異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために大切なことを考える。	・SKYMENU 発表ノートに自分の考えを入力する。 ・入力した意見をグループごとに共有する。 ・グループの代表による全体共有を行うことで、より多様な視点を取り入れられるようにする。	SKYMENU 発表ノート

【授業実践の様子】（本時での写真を添付し、キャプションをつけて下さい）



カードに記載する項目の候補や、交流する時の反応の仕方について掲示した。

子供に具体的なイメージをもちやすくするために、教師がデモンストレーションを示した。

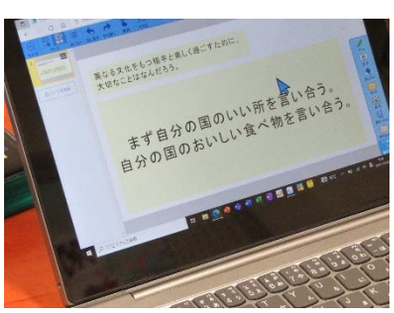


子供たちそれぞれに「オープン・ザ・○○」のカードを作成をした。指定された項目以外にも、真ん中に入れ込む画像や、カードのデザインにもそれぞれの個性が表れていて興味深かった。

班ごとの交流の時間。ハンドサインで反応を示すことで、相手がどう受け取ったかが分かりやすかった。

どの班においても、友達の発表を興味津々に聴いている姿が見受けられた。

まとめでは、単元全体を通して感じたことをSKYMENUの発表ノートにまとめさせた。子供それぞれが自分なりの言葉でまとめることができていた。時間が限られてしまいグループ内での共有が短い時間でしかできなかったのが残念であった。



【6】本時の振返り

「オープン・ザ・〇〇」の共有では、友達の意外な面を知れたという子供もいれば、予想通りだったという子供もおり、6 年間同じメンバーで過ごしてきてある程度互いのことを知っている子供たちにとっては少し物足りなかったかもしれない。自己開示する項目にもう少し工夫が必要だと感じた。また、反応をハンドサインで示すよう促したが、発表を食い入るように聞いたり、嘘の項目はどれかと必死に考えたりする中で、ハンドサインを忘れている子供も多く、型にはめるようでふさわしくなかったと感じた。相手の受け取り方を視覚的に示すためには、札を用意したり、色付きのシールを貼ったりといった方法の方が良かった。

全体的に時間が足りず、最後のまとめを共有する時間を満足に取れなかったことは、残念であった。単元全体を通して、異なる文化を知ったり、異なる文化の人と関わったりすることを、多くの子供が楽しいと感じて主体的に取り組んでいたことが大きな収穫であった。

【7】単元を通した児童の反応/変化

異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

相手のことを理解して素直に受け入れる。
相手の文化や違いを否定しない。

◎考えが変わったこと
＜気づいたこと、感じたこと＞
皆がみんな文化もいっしょだったり
普段の生活もいっしょじゃない
ということが改めて感じた。
外国人も黒人、白人みたいに差別するんじゃ
なくてみんなでたのしく過ごす。

異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

仲良くなるためにはおたがいの
きょうつうてんを見つけて仲良くなり、
お互い相手の意見などを否定せず、
受け止める事を心がけて楽しく過ごす
ことが大切だと思います!!!!!!!!!!!!
たとえ、文化が違っていても
めっちゃ仲良く出来る事が分かった!!!!!!!!
反応などをするだけで相手が
笑顔になってくれるから日常生活
でもしたいと心掛けていきたいです。

Q:異なる文化を持つ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

互いの文化を理解して、その文化に沿って
話したり、遊んだり、多文化の人の事について
調べたりすれば、異なる文化の人たちとも
楽しく過ごせると思う‼
～＋α:この授業で考えが変わったこと、気づいたこと、感じたこと～
今回はゲームのような形で
仲のいい友達と話したりできたけど、
本当の時は、文化について説明することも
難しいことだろうし、文化を説明するということは
相手を知って楽しいこともあるけれど、
説明する側のことも考えながら聞かなければならないなぁと思いました‼

相手の文化を知ろうとすることが大切だと
思います。
違う文化の人だから知らなくていいとか
関係ないとかそれは差別になるし相手の悪いところ
だけ出すんじゃなくて相手の文化のいいところを探すことで共感
できたり分かったりするところもあるかもしれないから大切だと思う。
また、困ってたりしたら会話が出来なくてもできることをすることも大切だと考えました。

気づいたことは、どの国でも通じることはあるということ。
□□さんや□□さんの国と日本の文化はちがうけど
日本もキルギスもパキスタンもいいところがたくさんある！！！

異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

人それぞれ違う文化を共有することで違う楽しみ方が
見えてくる。興味を持つことも大事だと思います。

気付いたコト
人は外見だけじゃないんだなあと思った事です。
自分をオープンするパワーポイントでは□□さんの意外な
一面がありました。
いつもキリっとしていて面白い□□さんでも
怖がりで心配性なのは初めて知りました
人は皆違うんだなと改めて思いました。

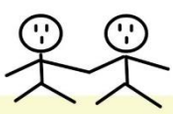
異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

自分の考え方を相手に押し付けずに、「この人はこう考える人なんだ」
と、人は人、自分は自分と考えれて、相手の考え方を受け入れられたら、
楽しく過ごせると思います。

考え方が変わったこと、気づいたこと、感じたこと

自分の意見ばかり押し付けて、相手の意見を受け入れられなかったら、
友だちもいなくなるし、協力してくれる人もいなくなるから、
自分の考え方も大切にしながら、相手の意見も取り入れて、
みんなが楽しく過ごせたらいいなと思いました

異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。



そんなの気にせず普通に仲良くする

異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

自分が知らないことだからと
いって、「私は知らないから～」
「分からない～」とか思うのでは
なく、相手が好きと思っていることや楽しいと思っていることに
興味をもつことが大切だと思いました。

「考えたこと、気付いたこと」
前までは外国人の人は、日本語を話したりするのが難しいから大変と思っていたけど、震災体験や交流を通して、外国人って自分が思っているよりも、もっと大変で不安なんだろうなと改めて思いました

【単元を通し変容した児童の態度や学習意欲があれば記載下さい】
これまでも、互いの良さを認め合うことの大切さについては授業でも取り上げてきていたが、さらにその視野が国を超えて広がったように感じる。漠然とした「違い」を、互いの「文化」として認識することで、異なる文化は排除するものではなく、むしろ受容することを楽しんでいくものだと気づいた様子が、まとめの感想から多く見られた。日本人、外国人を問わず、相手に興味をもって積極的にかかわっていこうとする意欲が感じられた。
【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】
（授業前）日本に暮らす外国人という存在は、ほとんどの子供が ALT しかかかわったことがなく、本校のＡＬＴは日本語も話せるため、特に不自由のない印象だったように感じる。そのため、言葉が異なる外国で暮らすことがどういうことなのかイメージできてい子供が多かった。また、同世代の外国人と関わった経験もほとんどなく、どう接したらいいのかよく分からない子供も多かった。
（授業後）港島学園の子供との交流や震災体験ゲームを通して、言葉や文化の違う国で生活することの大変さを知った。そこから、日本で暮らす外国人の方に対してその困り感に共感し、尊敬の念を抱く子供も多くいた。また、同世代の子供と交流することで、文化が違っていても一緒に楽しい時間を過ごすことができることを実感し、「また交流したい。」「外国人の友達が来たら、積極的に話しかけたい。」など、前向きに関わっていこうとする姿勢が見受けられた。

【8】自己評価

1. 苦労した点	異文化についての認識を、日本と外国という目に見えるものから、日本人同士という目に見えないところへ落とし込むことが難しかった。今回は外国人の子供との交流から、クラスの子供同士での交流に繋げたが、全く別個のものとして捉えてしまう子供もいた。 子供同士での交流において、既に互いをよく知る者同士だったため、意外な一面を捉えさせることが難しかった。単級という環境を踏まえた工夫が必要だった。
2. 改善点	今回は研修の中で紹介いただいた「震災体験ゲーム」を用いて、外国で暮らすとはどういうことなのかを体験させたが、次時に同世代の子供との交流が控えていたため、次回実施する際には日常の学校生活を題材にした体験ゲームを用いたい。 「オープン・ザ・〇〇」の活動における自己開示の項目は、学級の状況に応じて設定する必要がある。今回のように単級で実施する場合には、普段お互いが知ることのない項目や、学校生活では見られない項目をもっと増やしたい。
3. 成果が出た点	単なる「違い」だと否定的に感じやすいかもしれないが、それを「文化」と捉えることで、日本人同士の違いも肯定的に捉えられることに、子供の反応を通して気づいた。外国籍の子供と交流したり、自分たちの違いについてゲーム感覚で共有したりすることで、異なる文化を知ることや、異なる文化をもつ人と関わることを「楽しい」と感じられたことが一番の成果である。また、今回日本に住む外国人について考える中で、その苦労や努力を知り、その困り感に共感し、「尊敬」の念を抱く子供がいたことも嬉しい成果であった。

4. 備考（授業者による自由記述）	単級だからこそ、「これから生きる社会の広がりを感じさせる」「自分たちのまわりにある『多文化』を受容する心を育てる」ことを目的に取り組んできた。各過程の繋げ方には課題も残るが、単元全体を通して子供はこちらの想定以上に多文化との関わりを楽しんでくれた。今後も、今回の授業を改善しながら多文化理解の心を育てる実践を行っていきたい。

添付資料：震災体験ゲーム「何が起こった？」（滋賀県国際協会）、PPT 作成資料、SKYMENU 発表　　ノート

参考資料：全国学力学習状況等調査質問紙調査結果、JICA 地球ひろば主催 国際理解/開発教育指導者研修 授業実践事例集、JICA 横浜　2019 年度教師海外研修実践授業レポート

国際協力について考える

氏名:北山　理加　　学校名:大阪市立玉津中学校

担当教科:社会科　　実践教科:道徳・社会科

時間数:2時間　　対象学年:中学1年生　　人数:105 人(35 人3クラス)

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）:

①多文化社会を知り、自分の身の回りで起こっている出来事だということを実感・理解する。

②日本が多民族国家であるということを理解し、国際協力の視点を形成する。

【2】単元の評価規準例	（ア）知識・技能	知らない言語への対応など、自分自身の行動を振り返り、実際の場面でどう対応するのかまで具体的に実践する力を身に着ける。
	（イ）思考・判断・表現	国際理解、国際貢献に努めることの大切さについて、先進国の役割、ひいては自己の役割を意識し、表現することができている。
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	多面的な視点を持ち、友達の感じ方などを理解しながら、多文化社会に対する視野を広げることができる。 国際的な協力体制の必要性を理解し、グローバル社会へ貢献する視点を持つことができる。

【3】単元設定の理由

✓ 児童/生徒観

✓ 教材観

✓ 指導観

✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容

【単元設定の理由】

いまでも日本は「日本は単一民族国家」として一つの国、一つの民族、一つの言葉、一つの天皇という王朝が続いている国だと思う人は少なくない。しかし、日本の歴史において、アイヌ民族や琉球王国、在日韓国・朝鮮人など様々な人々によって日本が形成されていることは明らかであり、これを「単一民族」としてまとめてしまうのは、実体とのあまりにも大きく乖離していると言わざるを得ない。また、近年では新たに渡日した人々（ニューカマー）であったり、技能実習生の受け入れも政府によって拡大している中で、「多様性JAPAN」の視点を持って成長して欲しいという考えから、①多文化を体験し受け入れる、②国際協力について考える、という構成で生徒の意識に働きかけたい。

【生徒観】

本校の生徒は４小学校からなっており、どの小学校も単学級で人間関係が変わらない中で６年間を過ごし、中学校に入り異文化交流のような状態から学校生活がスタートした。中学校に入り、互いに小学校の時の話などを持ち寄り、新しい人間関係を作っていく様は、４小学校から集まる本校ならではである。また、校区が森ノ宮～玉造～鶴橋にわたっており、コリアタウンも近場にあることなどから、在日韓国・朝鮮人やルーツのある生徒も多数存在しており、本名で通学している生徒も多いが、その他の国にルーツがある生徒の存在が意識されることは少なく、多文化共生の感覚は薄いように感じる。この単元を通じて、他国の文化や国際理解について、多面的・多角的に考え、今後の教育活動での学習に生かしていきたい。

【教材観】

テレビなどで見たことのある人物を題材にしている教材であるため、生徒たちは興味を持ちやすい。また、「海賊」というキーワードもとっかかりやすい題材である。現実問題として海賊行為は犯罪であり、また「犯罪をしなければならない理由」ということに対し、そこに戦争による貧困があることまでを考え、現実を知る文章である。国や地域を越えた国際貢献を果たしていくことに対し、日本ひいては自分たちの役割を考えていきたい。

	【指導観】 　指導にあたっては、海賊の問題は暴力では解決しないほどの背景があることを文章から読み取らせたい。そのため、登場人物（木村社長）の考えを読みとって、自分の考えを振り返らせる。また、資料の読み取りや歴史的背景を知ることで、昔の話ではなく、現代の問題として課題に取り組む姿勢を養わせる。また、ワークシートを使用することで自分の心情の変化に気付かせ、目的に応じた発問を工夫することで、生徒の自主的な発言をうながし、思考力・表現力を高める指導を行いたい。 【設定時に想定された生徒の変容】 　多文化理解ゲームに関しては、知らない言語、知らない文化に対する興味や不安、拒絶がおこり、「どうせ自分には関係ない」という反応が想定される。しかし、２限目の海賊の背景や国境を超えた日本人の支援により、自分の考えの浅さに気付き、少しでも国際貢献への理解を深めることができると思う。ワークシートの最初の「海賊をなくすためにどうしたらよいか」という発問に対する答えが授業の中で変化することを期待している。

【4】展開計画（全２時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	言葉や文字がわからない状態を体験することで、不安な気持ちやいらだちを理解するとともに、逆に自分たちの学校に言語の違う友達が来たらどうすることが必要なのか、主体的な考えと行動力を身に着けさせるきっかけとする。	「何が起こった？（震災編）」の活動 アクティビティに従って、自分たちで選択し、自分たちの身近な課題への気付き、今後このような状況になった場合への対応などを理解し、多文化共生社会への目を向けさせる。	「言葉がわからない」体験ゲーム **「何が起こった？（震災編）」** 国際教育研究会 Golcal net Shiga 制作
2 本時	これからの日本を担う中学生に自国のことのみにとらわれず国際的な視野に立ち、世界の平和と人類の幸福に貢献しようとする心情を高め、実践的な態度を培っていく。	「すしざんまい社長が語る「ソマリア海賊問題」」を題材に、海賊に至るまでの背景、それを支援し海賊という行為ではなく漁師として働き海賊減少のための民間外交や先進国の役割などを知り、途上国支援の必要性を認識させる。	ハーバービジネスオンライン すしざんまい社長が語る「築地市場移転問題」と「ソマリア海賊問題」 より抜粋 hbol.jp/pc/77365/

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 （５分）	・国際社会の現実を知る 「海賊のイメージは？」 「現代に海賊はいると思う？」 ・ソマリア海賊の話を知る	・テンポよくスライドを出すことで興味をひく ・海賊はかっこいいものではなく、人殺しや略奪を行う犯罪行為であることを忘れない	・パワーポイントにて写真の提示 （ワンピース、パイレーツオブカリビアンなど、かっこいい海賊のイメージ） ・ワークシート
展開 (35 分)	・ソマリアの漁民が海賊になった経緯を知る 「そもそもソマリアってどこ？」 「ソマリア海賊は身代金の要求を目的に襲撃をしています。では実際にどんな事件があったか見てみよう。」	・ソマリア海賊の実態を知り、なぜそうなっているのかを自分で考えさせる	・パワーポイントにて写真の提示 （実際の海賊の写真）
	・各国の対応を知る 「海賊を撲滅するためにはどうしたらいいと思う？」	・軍事行動が世界的基準ではあるが、それで解決できるものではないことを注意する	・パワーポイントにて写真の提示 （各国の海賊への対応）
	海賊を取り締まることが解決になるだろうか。本当に必要な支援とは？		
	・「この問題を解決した一人の日本人がいます。この人を知っていますか？」→写真を提示 ・インタビューを配って範読		・ハーバービジネスオンラインからの抜粋「すしざんまい社長が語るソマリア海賊問題」
	・本当に人が必要としているものを考えることの大切さを知る 「ソマリア内戦の結果、海賊行為をしないと生きていけない人たちに木村社長はまず何をしましたか？」 「海賊たちにどのような人生を送ってほしいと訴えていましたか？」	・海賊にならざるを得なかった背景にせまる ・木村社長の、口だけでない実践力に触れ、そういった事例を知ることで生徒自身への気持ちの揺さぶりをかける。 ・たとえ国や背景が違っても「人」である以上対話が必要、暴力では解決しないことを理解させる	・パワーポイントで内戦の写真や、先進国が核廃棄物をソマリア沖に棄てている現状を伝える。

終末 (10 分)	・文章化 「木村社長は、商売にとって目の前の利益よりも必要なことは何だと言っていますか。」 「いまも内戦が続いている国があります。さらに戦争で仕事や住む場所、さらには命の危機にさらされている人たちに何ができるか、を考えられる人になって欲しいと思います。」	・自分の言葉で思ったことをまとめさせる。 ・日本で当たり前のことが、海外では当たり前ではないこと、将来社会の中で、自分だけが良ければそれでいいといった考え方にならないように持っていきたい。	・ワークシート

【授業実践の様子】

１、２：ソマリアの漁師たちが海賊にならざるをえなかったことを説明しているところ
（バーレ政権崩壊後、軍事政権が樹立、軍と先進国の企業が手を結び、武器を売るかわりに核廃棄物をアデン湾に棄てる条約を結んだ、というスライド）

３：ソマリアの治安悪化にともない、海賊が増えたことを説明しているところ

【6】本時の振返り

今後の社会科の授業で「アフリカ州」「北アメリカ州」など州ごとの単元の授業をしていく中で、「経済格差」や「貧困」、「難民」といったキーワードを外すことはできない。その時にいかに自分事として考える姿勢を持つことができるのか、様々な問題解決のために国が、地域が、ひいては世界全体がどのような対策をしていく必要があるのかなどを問いかけ、国際理解・国際協力への視点を養うことを続けていきたい。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

本時のワークシートより「相手の理由を聞かないまま、勝手に決めるけることがダメだと分かった」「他国のことを他人事のように思わず行動にうつして人を救っている人がいて、すごいと思った。」「悪いことをしているように見えても、決めつけるのではなく、きっと向こうにも何か事情があるのだという考え方をして、世界中で発生していることに対して考えたい。」という意見が見られた。

本時の最初の質問「海賊を撲滅するためにはどうしたらよいか。」という少々過激な質問に対し、「人工衛星を使ってアジトをつきとめる」や、「海を見回りして捕まえる」という考え方をしていた生徒たちが、「相手の意見も聞かずに決めつけるのはよくない」という考え方に変容したことが大きな変化である。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

社会科の授業ではアジア州やヨーロッパ州などの学習を進める中で、どうしても「発展途上国」や「スラム」の学習時に、侮蔑的な発言をする生徒がいた。その場その場で指導はするものの、根本的になぜ「発展途上国」や「スラム」を見下してはいけないのかがわからないようであった。今回の単元を通じて、「相手の事情を知って、途上国に何が必要なのか、自分たちにできることは何か」を再度授業の中で聞いてみたところ、「学校を作る。」と前者の生徒が答えたことは興味深いことである。また、周囲の生徒も同じく、金銭的な援助だけでなく、衛生面の知識や技術提供、一緒に働く、などの発言が見られたことは、今後も学習を続けていく上で必要な視点であると思う。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】
（授業前） 学習前の生徒たちは、同じクラスに韓国・朝鮮にルーツがある生徒、中国にルーツがある生徒がいることはわかっていても、実際に日本語が通じない生徒や、自分たちが言葉がわからない状況になるということを考えたことはなかったようである。また、前述したように、他国のことを学んでいても、遠い国のことで日本に住んでいる自分たちには関係ないという意識を持つ生徒が多く、自分事として考えることが難しかった。
（授業後） 明日にでも日本語がわからない生徒がこのクラスに来る可能性がある時代であること、その時に自分たちにできること、いまの玉津中学校では何が足りないのかを真剣に考えることができ、授業後に実際に本校の最寄り駅で多言語表示のプレートを確認した、などという生徒も見られた。また、言葉が違うからといって、決めつけたり話し合うことを放棄してはいけないという考えを持ったことが理解できたのか、その後の社会科の授業で「難民問題」が取り上げられたときに、「どうしてそうなってしまったのか」「どこの国がどんな支援をしているのか」にとても興味・関心を示していた。

【8】自己評価

1. 苦労した点	当初からある程度予想が出来たことではあるが、やはり「言葉がわからなければ、翻訳アプリを使えばええやん。」「日本に来るんやったら日本語勉強してきたらええやん。」といった反応で、最初は全く取り合おうとしない態度の生徒たちがいたため、その意識から変えていく必要があった。どうしてこのような授業を行うのか、もっと前からそういった意識づけをするような話をしておくべきだったと思う。
2. 改善点	今回の内容は一例であって、すべてのアフリカの海がそうではないし、すべての先進国が海賊に対して攻撃的な態度をとっているわけではない、というあくまで「一例である。」ことをもっと強調すべきであった。また、こういった国際理解協力の授業をすることの意義を、「言葉や文化の違う人と一緒に学校に通ったり、将来一緒に仕事をするかもしれない」「自分が違う文化の国に行くことだってあるかもしれない」と冒頭に生徒たちに話をしたが、例えば他の地域や国の中学生でもこうした国際理解の授業を行う、君たちには国際基準の感覚を持ってほしいといった「グローバルスタンダード」という意識をもう少し話をしてもよかったと思う。
3. 成果が出た点	途上国や各国の経済格差について、遠い国のことではない、無関係なことではないんだ、話し合うことで解決の糸口が見えることもあるんだ、という考えを持つことができた。また、その後の社会科の授業においても、「難民問題」や「スラム」「発展途上国の環境問題」などに関して差別的な発言が激減したことは、大きな成果だと言える。また、一部の生徒が YouTube や SNS などで今回の授業で取り上げた内容について調べ（良くも悪くも）様々な情報を得たことで、自分たちで考えるきっかけになった。現代の生徒たちはすぐに情報に触れることが出来ることから、メディアリテラシーの在り方についても学ぶ良い機会になればと思う。

4. 備考（授業者による自由記述）	私は教科の中で世界の国について触れることがあるため、実践後の授業でもその反応を見ること、追って話をすることがあるが、やはり「途上国」「異文化」について継続して意識させることは難しいと感じる。在日韓国・朝鮮人の多い地域にある学校なので、多文化を意識することは、地元への理解を深めることにもなるし、特に多文化ルーツのある生徒にとっては、アイデンティティの形成などにもつながってくる大事な取り組みである。 今回の授業とは関係ないのだが、別の道徳の授業で「地域理解・地元への愛情を持つ」という単元で、玉造は昔「唐居町」（からいちょう）という場所があり、唐、つまりは渡来人などの船着き場であって、大昔から朝鮮半島や中国の人がここに住んでいたんだという話をしたときに、在日韓国人の男の子が目を輝かせて、そんな昔から友好的だった場所なんだととても嬉しそうであった。 それくらい生徒たちにとって多文化共生は切っても切り離せない身近なものであり、こういった取り組みを継続して行うことで、この地域で生まれ育ったことへの誇りへとつなげていきたい。 また、せっかく今回の JICA 関西の研修で、技能実習生の現状や、授業実践の方法などをいろいろと学ぶことが出来たのに、それを活かしきれなかった思いが強い。もっと自分の料簡を広げ、生徒へフィードバックを図れる技量を身に着けたい。

添付資料：

１：ハーバービジネスオンライン　すしざんまい社長が語る「ソマリア海賊問題」の文章
（ハーバービジネスオンライン　すしざんまい社長が語る「築地市場移転問題」と「ソマリア海賊問題」https://hbol.jp/77365/から一部抜粋のもと独自に作ったもの）

２：生徒に配布したワークシート

参考資料：

・ハーバービジネスオンライン　すしざんまい社長が語る「築地市場移転問題」と「ソマリア海賊問題」
https://hbol.jp/77365/
・ハーバービジネスオンライン　すしざんまいが救いきれなかったソマリア海賊の微妙な転職先
https://hbol.jp/82261/
・yahoo japan ニュース　すしざんまい社長はソマリア沖の海賊を壊滅させたのか？
https://news.yahoo.co.jp/byline/dragoner/20160121-00053658
・すしざんまい社長が、あの「海賊壊滅作戦」の真相を語った！
https://gendai.ismedia.jp/articles/-/48307
・Wikipedia　ソマリア沖の海賊
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BD%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%82%A2%E6%B2%96%E3%81%AE%E6%B5%B7%E8%B3%8A
・外務省　ソマリア沖・アデン湾における海賊問題の現状と取組
https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/pirate/africa.html
・(公財)滋賀県国際協会　Glocal net Shiga　言葉がわからない体験ゲーム「何が起こった？（震災編）」

写真１

写真２

写真３

すしざんまい社長が語る「ソマリア海賊問題」

2001 年に第 1 号店を東京・築地(つきじ)場外市場に「すしざんまい　本店」をオープン。現在では北海道から九州まで、51 店舗を展開。その多くが年中無休 24 時間営業で、本格的な寿司を手ごろな価格で楽しむことができるという、それまでの寿司屋の常識を覆(くつがえ)したのが、株式会社喜代村の木村清社長だ。

「すしざんまい」が年間 300 件の海賊被害をゼロに

記者：「すしざんまい」の社長が、アフリカのソマリアで、元海賊とマグロ漁をやっている……と話題になったことがありましたね。

木村：今でもやってますよ。ソマリアの沖というのは、キハダマグロのいい漁場なんです。ところが海賊が出るようになり、危なくてマグロを獲りに行けなくなってしまったんです。しかし、聞いてみると誰も海賊とは話していないという。おかしいじゃないですか。海賊といったって相手は人間なんですから。それでさっそく、伝手(つて)を頼ってソマリアの海賊たちに会いに行きました。そこでわかったことは、彼らだってなにも好(す)き好(この)んで海賊をやっているわけじゃないということです。だったらこの海で、マグロを獲ればいいじゃないか。自分で稼いだ金で家族を養うという、誇りを持った人生にしなくちゃいかん――と彼らと話し合ったんです。

記者：ソマリアの人たちは、内戦で国を失い、無法地帯(むほうちたい)となった彼らの海が荒らされたため、海賊になったと主張しているそうですが、自力では対抗できなかったのでしょうか…？

木村：口で言うのは簡単ですが…、まず彼らは、マグロ漁の技術をもっていないし、船もありません。マグロを獲ってもそれを入れておく冷蔵倉庫が使えなくなっている。獲ったマグロは売らなければなりませんが、そのルートももっていない。

IOTC（インド洋まぐろ類委員会）に加盟していないから、輸出ができなかったんです。じゃあ、仕方がない。うちの船を 4 隻もっていった。漁の技術も教えましょう。冷凍倉庫も使えるようにする。ソマリア政府にはたらきかけて、IOTC にも加盟する。獲ったマグロをうちが買えば、販売ルートも確保できる。こうやって一緒になってマグロ漁で生活ができるようにしていったんです。

記者：「民間外交」の枠を超えた貢献ですね。なぜそこまで？

木村：いろんな国や国際機関も援助をやってますが、どれも上滑りのことばかりであまり役に立っていないことも少なくありません。相手の視線に立って、相手の悩みに気がついてあげることが必要なんです。ソマリア沖じゃ一時は年間 300 件、海賊による被害があったそうですが、うちが行くようになって、この 3 年間の海賊の被害はゼロだと聞いています。よくやってくれた、ジブチ政府から勲章までいただきました。

記者：そこまでして、事業として採算はとれるんですか。

木村：んー。まあ、正直言って今のところまだ採算はとれていませんね。しかし、将来的にはきちんと利益が出る目論見はたっていますよ。それに商売というのは、目の前の利益、儲けのことを第一に考えていたんではうまくいかないものなんです。まず考えなくてはならないのは、

どうやったら喜んでもらえるか、何を求められているかということ。それに応える算段をするのが「商売」ではないですか。

海賊王になった男

① 海賊を撲滅するためにはどうしたらいいと思いますか？

② 海賊たちに対して社長がおこなったこととは？

③ ソマリア海賊たちに訴えた「誇りを持った人生」とはどのようなものでしょうか。

④ 社長が商売において大事にしていることは何でしょうか。

⑤ 社長が④のようなことが大事だと言ったのは、どういう思いがあるからでしょうか。

⑥　この時間中に思ったことをまとめましょう。

１年　　組　　番　名前

SDGs×西中　誰ひとり取り残されない

氏名：　兒島　正子　　学校名：　吹田市立豊津西中学校
担当教科：　美術　　実践教科：　総合的な学習の時
時間数：　6 時間　　対象学年：　第 1 学年　　人数：140 人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

スウェーデンの少女グレタ・トゥーンベリさんが、たった一人で始めた学校ストライキ。またたく間に世界中の若者たちの間に広まった。彼らは「地球にスペアはない！」「私たちの未来を燃やさないで！」とプラカードをかかげ、彼女に賛同した。このように若い世代はSDGｓへの関心が高く、自分たち自身の問題だととらえている。

現在の社会システムでつくられた気候危機、差別や不平等、貧困は、日本で暮らす私たちにとっても「遠い国」の話ではない。「SDGｓ×西中　誰ひとり取り残されない」では、私たちの日常と「気候危機、多文化共生、貧困・平和」とのつながりを考える。そして、私たちの社会のしくみを問い直し、声を上げ、行動する、持続可能な未来を創造し、挑戦し続ける力を育てる。

【2】 単元の評価 規準	（ア）知識・技能	探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする
	（イ）思考・判断・表現	実社会や実生活の中から問いを見いだし，自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う

【3】
単元設定の理由
✓ 児童/生徒観
✓ 教材観
✓ 指導観
✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容

明るく素直な生徒が多く、学習や行事でも前向きで、楽しみながら新しいことに挑戦することができる。これまでの「総合」の授業においても、「国際理解」に関心をもつことができた。また、ゲストティーチャーの方々との出会いを通して「異文化」に触れ、積極的に関わり合いをもち、素直に思ったことや考えたことを発表や感想にまとめることができた。

２学期からは、これまでの取組みを生かして「SDGｓ」に関して、より深く探求でき、主体的・協働的に課題を解決していけるよう内容とした。「ＳＤＧｓ」の内容は多岐にわたるため、「人権」に重きをおき、「誰ひとり取り残されない」という視点から考えることができるようにした。教室の出来事は、「気候危機、多文化共生、貧困・平和」をどのように繋がり、「SDGs」達成のために何ができるかを「体験」を通して学ぶ。そして、「演劇」を通して、自分の見方、感じ方、考え方の枠を超えた「当事者」の視点からのまとめる表現とした。

【4】展開計画（全６時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材・資料
1	中村哲さんの生き方から学ぶ(リモート学習)	アフガニスタンの気候危機について理解を深め、中村哲さんの生き方を通して人道支援、国際協力について考える。	教材：PC、ワークシート
2	SDGs って何？ フォトランゲージ	SDGs って何だろう？身近なところから考え、行動していくことの大切さをグループワークから気づく。フォトランゲージでは、５か国の写真から、推測・想像してテーマごとにランキングし、それぞれの国のよさや課題を考える。	教材：PC、ワークシート
3	気候危機	気候危機によって、私たちの世界はどのように変化してきたかを知り、持続可能な開発について考える。また、グレタ・トゥーンベリさんの「学校ストライキ」から、一人ひとりが声をあげ、行動していくことの大切さを知る。	教材：PC、色画用紙、ゴールカード、ふせん、感想文シート

4 本時	多文化共生	日本に住む外国人の人権と多文化共生について、外国人の人々が「日本で生きる」ことのよさと課題を多様な視点から考える。	教材：PC、啓太（チュムナ）さんカンボジアから、感想文シート（ＷＳ）
５	演劇ワーク	グループで SDGs の１７の項目から１つにテーマをしぼり、テーマから現状や課題などをもとにストーリーを決める。演劇として発表するための話し合い、役割を決め、発表準備する。テーマのゴールをグループで話し合う。	教材：演劇ワーク資料、ワークシート（各班）
６	演劇発表会	グループによる演劇発表を行い、現状と課題を創意工夫して伝える。相互評価を行い、よさや工夫、発表内容について考える。「SDGｓ×西中　誰ひとり取り残されない」をテーマに取り組んだこれまでの内容を振り返える。私たち一人ひとりが社会のしくみを問い直し、声を上げ、行動するきっかけとなるようにする。	教材：振り返りシート

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5 分)	●この授業のテーマ・主題について知る	○「今日は、日本に住む外国人について多様な視点からみつめ、外国人の人々の「人権」と「共に生きること」とはどういうことだろうということを考えていきます」　〈Power Point〉①	☆「啓太（チュムナ）さんカンボジアから」(NPO 法人)開発教育協会 インドシナ難民とは1975 年、ベトナム・ラオス・カンボジアが社会主義体制に移行したことにより、経済活動が制限され、迫害を受ける恐れがあるなどの理由から自国外へ脱出し難民となった人々
展開 （40 分）	●啓太（チュムナ）さんカンボジアから	○「日本にカンボジアから難民としてきた啓太（チュムナ）さんの生き方を文章から考えていきましょう」 〈Power Point〉②～⑤ ・教師が読みながら、生徒に気になる点をアンダーラインに引かせていく ・インドシナ難民として自分のルーツを言えず、つらい思いをしてきたのはなぜか？ ・「誰にでも平等に接してほしい」啓太（チュムナ）さんから見えてくる日本の姿を想像する ○映画「東京クルド」予告編の紹介　〈Power Point〉⑥⑦ 「世界には、故郷をさまざまな理由から逃れ、難民として生きる人々がいます。これから紹介する映画「東京クルド」予告編では、トルコから難民として日本にやってきたオザンとラマザン二人の物語です」 ・「東京クルド」視聴（約２分） 「彼らの必死に救いを求め懸命を生きようとする姿をみてみなさんはどう思いますか？」 〈Power Point〉⑧	☆映画「東京クルド予告編」 故郷（トルコ）での迫害を逃れ、小学生のころ日本にきたオザンとラマザンの物語。彼らは難民申請を続けるが日本の難民認定率は１％満たない。いつ入管に収容されるかわからない不安を感じながら、夢を抱き、将来を思い描いて生きている
	●日本に住む外国人について	○「日本で住む外国人の数はどれくらいだろう？」　〈Power Point〉⑨～⑪ ・答え（約３００万人　日本の人口の４２人に１人が外国人） 「日本に住む外国人の「在留資格」ってなんだろう？」 ・さまざまな資格があるが、具体例を示しながら見ていく	

	●技能実習生について	○「私たちの生活の中でも外国人の人びと関わりがあります。例えば、みんなが利用するコンビニには、たくさんのお弁当が販売されています。そのお弁当は誰が、いつ、どこで作られているのでしょう？」 〈Power Point〉⑫～⑭ 「私の今日のランチはこれです！」 ・映像「コープネットの旬鮮フレッシュ便・朝穫りレタス編」視聴 「朝２時から畑に行き、新鮮なレタスを収穫する人たちの中に技能実習生の人がいました。スーパーマーケットで売られている新鮮なレタスは、私たちが寝ている間に収穫されたものです。私たちの便利で快適な生活は、見えないさまざまな人に支えられています」 〈Power Point〉⑮～⑱ ○「今から外国人労働者たちのいまの姿を新聞から読み解いていきます」 ・○×クイズ、朝日新聞オピニオンより ・技能実習生制度の現状は課題が多い ・長時間労働や過酷な労働条件で体調を崩したり、失踪したりするケースもある ・日本人による差別的な扱い、仕事は日本人が働きたがらないところなど雇用の調整弁となっている ・技能実習生をうまく受け入れている企業や産業なども多いが、その場合その地域や企業が継続的に彼らを必要とし、育てていくという方向性が明確にある ○毎日新聞「斉藤幸平の分岐点ニッポン」 ・『資本主義の先へ　差別にあえぐ外国人労働者たち　社会通念の変革、自分事として』 〈Power Point〉⑲～㉕	☆法務省 「在留資格」とは外国人が日本に入国する際に必要な身分や活動範囲を示す法的資格 ★技能実習生 開発途上地域の労働者を一定期間、技能実習生として日本国内に受け入れ、企業等の産業現場で技能・技術・知識を修得させる制度。国際貢献が目的。実習期間は最長５年間。日本で働く外国人を在留資格別に見たとき、４分の１近くを占めるのが約４０万人の技能実習生 ☆コープネットの旬鮮フレッシュ便・朝穫りレタス編 長野県川上村はレタスの収穫シーズンになると、人口約４千人の村で、働く外国人技能実習生は約１千人にもなる ☆朝日新聞オピニオン ☆毎日新聞「斎藤幸平の分岐点ニッポン」
	●「言葉がわからない」を体験しよう	○「今から、みなさんが外国に行ったという設定で、『言葉がわからない』を体験してもらいます。それぞれの場面で、その時どんな気持ちになるかを感じながら活動してください」 ・「お腹が痛いよ～」薬を買う時 ・「何かが起こった、さぁ、そんなときあなたはどう行動する？」災害編	○「言葉がわからない」 ・薬（ネパール語） 左から薬・水・毒 ・震災（スペイン語） 左「非難するときはこの道をたどってくださ

ま とめ (5分)	●振り返り	・「仕事をしよう１」履歴書編 ・「メニューを選ぼう！」チュニジアのレストランにて 〇「体験を終えてどんな気持ちですか？」 「日本に住む外国人の気持ちについて、授業の最初と最後ではどのように変化しましたか？」 〇この授業を通して学んだことや考えたことをまとめる 〈Power Point〉㉖	い」 右「避難時はこの道を使わないでください」 ・仕事をしよう（韓国語） ・メニュー（アラビア語） 上から　大きな揚げ餃子、白身魚のムニエル、モロヘイヤスープ 〇WS 記入

【6】本時の振返り

「多文化共生」という内容は、難しいかもしれないと予想し、できるだけ生徒が関心を持って取り組むことができる内容になるように資料、映像などを活用した。しかし、年々、日本に外国人の人が増えていることは生徒も生活の中で実感していたようで、違和感なく授業を進められた。最初の「啓太（チュムナ）さんから」では、「難民」といっても様々な環境の中で生きる人々がいることを初めて知り、課題に目を向け、真剣に考えることができた生徒が多くいた。

また「技能実習生」が置かれている境遇には、心を痛め、なぜこのようなことになるのかと疑問に思う生徒がいた。「多文化共生」における課題を知るきっかけとしては、全体的にはうまくいったと思う。しかし、一時間の中で扱える内容に限りがあるため、その一部をきりとった形になってしまったので、もっと多面的に考えを深める必要があると考える。よって、この授業で終わることなく、継続的に「多文化共生」について多様な視点で展開していける内容を実践していきたい。生徒が授業内で「日本国籍」や「第三国定住希望者募集」などの用語などもわからないことが多くあったので、基本情報を事前にやさしい言葉で説明し理解しておくことも大切だと思った。

最後の「言葉がわからないを体験しよう」では、自分が外国人として外国で生活することを疑似体験し、その時々に起こる心の変化に体験を通して気づくことができた。そして「共に生きる」とはお互いの違いを大切に、相手の生き方に思いを馳せ、支え助け合いながら生きることが実感できたと思う。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

生徒の感想

「多文化共生」・技能実習生は日本に行く前と行った後の気持ち、すごく変わってしまったなと思いました。でも、なぜ日本の人は技能実習生にひどいことをするのだろう、そこがよくわかりません。もし外国の人が来て困っていたり、助けを求めていたりしたら、すぐ助けようと思いました。自分も外国に行ったらそのように助けてほしいからです。・日本が快く難民や外国の人を受け入れられる国になってほしいと思いました。外国の人が差別を受けているのを初めて知りました。これからは差別をしない国になりたいと思いました。もっと SDGs のことを知りたいと思います。チュムナさんのような困っている人を減らしたいです。・私は、日本は外国人の扱いがひどいなと感じました。技能実習生の人は家族と一緒に来日できないことや時給が安い。それに生活環境が悪いところに住まわされて、休みが１年間で３日などがあるそうです。技能実習生の人は、言語が違う日本でがんばってくれているのに、こんな待遇を受けていることは、変えていかなければならないと思います。

中村哲さんの生き方から学ぶ（リモート学習）

・自分の意志でアフガニスタンに行き、たくさんの人を救おうと人のために行動していてとてもかっこいいと思う。目の前のことから目を背けず、努力しつづけることはとても大事なことだと気づいた。たった 2%でも豊かな土地をつくったことで平和になったので、中村さんがしたことはとても意義があったと思う。たった２%ではなく２%もの人が救われたとわか

った。大干ばつによって、水・農業・食料・病気など様々なことが影響を受けているとわかった。そして、緑を増やし、土地を豊かにすることで争いや戦争などを忘れ、平和な暮らしを守っていけることも中村さんから学べた。

・中村さんの生き方は、どんな人にも対等に接し、人を助け合うことに喜びを感じる、人を傷つける人も見捨てない素晴らしい方だと思いました。この人は、助けを求めている人のことを「助けてあげる」と考えていたのではなく「手を貸して協力する」と考えているのがしみじみ伝わってきました。私は、見ず知らずの人がたくさん倒れていても、中村さんのような行動はとれません。「人のためにしたと思っていた行動が結局は自分のためにやっていた」というお話を聞いて、中村さんのような素晴らしい行動ができるようになりたいと思いました。

SDGs って何？・フォトランゲージ

・豊かだと思う国が持続可能な暮らしではないことと考えたから、豊かな国も暮らしを変えていくべきだと思いました。アメリカは、食糧の数や種類がたくさんあるけれど、野菜が少なくて栄養バランスが悪いと思いました。けれど、食品の量が多い方が楽しいし、豊かだと思いました。・国によって家族の人数、食べるもの量が違ってびっくりした。いろんな面から、国の食生活を見て、順番が変わったりするんだな。・「持続可能な暮らし」「長い目で見ると」って考えたら、ドイツだなぁ。どの国も幸せそう！・日本などは、自分がほしいものがあるが、その分ゴミが多く出ることがわかった。・それぞれに違いがあり、共通点もあることが改めて分かった。各国の幸せがあるなと思った。・マリとアメリカの豊かさの違いが大きかったから、なるべく公平になってほしい。

気候危機

・学生が学校を休み、抗議をおこすなんてとても勇気のいることなので、すごいなと思いました。口で言うことは簡単だけど、実際に行動して変えていくのは、難しいことだと改めてわかりました。でも一人ひとりの小さな行動が大きなことを救うこともわかりました。私の今できることをがんばりたいと思いました。・グレタさんはわずか１７歳で首脳の人に環境に訴える姿を見て、他人事ではないことを知りました。また、４つの目標についてゴミをできる限り捨てないという共通点があったので、そのことについて気をつけたいです。「真実を知って未来を開く」という言葉は、これから環境について無視せず、行動すべきだという意味の言葉だと思うので、いつも意識しておくようにしたいです。・私は、自分の考えを大人たちに言える人たちがすごいと思いました。私は、こういう人たちが政治をしたらよくなるかもしれないと思いました。私は、あまり政治のことを理解せず大人の言いなりになっていたのかもしれないと感じます。自分の考えが正しいと思うならつき進んでいいと自信をくれるような人たちに憧れます。私はそんな人になりたいです。・グレタさんがすごく説得力がありました。ゴミを出さないために、再利用するのが大事だと思います。最近はスタバのフラペチーノのストローが紙になり、工夫している店が増えてきました！環境って身近なものだから、私たちの世代、この先も大切に受け継いでいきたいなと思いました。

演劇発表会

・クラスでみんなの前で発表して、もちろん自分たちが発表したことは深く考えることができた、そして、他の班の発表も聞いて深めることができてよかったです。・クラスの班の劇をみて、みんな今まで習ったことをしっかり演劇としてみんなに伝えることができたと思う。他の班を観て、いい発見をたくさん見つけることができた。・他のグループなどの発表は、同じ目標でも内容が違っていたりして楽しかったです。発表の時、ミスしてしまったけれど、楽しかった。他国の状況や、政治、宗教など、わからないところはたくさんあるけれど、わかるところだけでも理解したい。・一つ一つの班に個性があってよりSDGｓの大切さを知った。もやもやした気持ちはあるけれど、解決する方法を少しずつでもいいから考えたい。・みんなおもしろいしわかりやすいしですごく上手ですてきでした！！！たった３分の劇でもすごく頭の中に入ってきてそれが演劇のすばらしさだと思いました。・ほとんどの班がスラスラ、ハキハキと言えていてすごいなと思いました。全て SDGｓについて詳しく調べてくれて、わかりやすく伝えるための工夫をしてくれていたからとても勉強になった。・それぞれ考えられた表現方法や工夫、ネタなどがありました。それは、おもしろく学べるものでした。SDGｓの取組みを劇という形でしたが、ポイ捨て、環境、平等などの内容で見ていて、身近にもこういうことが起こり、それが積み重なって問題が大きくなってきた。今を変えなければと改めて思いました。・みんなに伝えたいことをしっかり伝えられているなと思いました。動きで表現しているものも見ていて楽しいなと思いました。・どの班の発表も上手でわかりやすかったし、とてもおもしろかったです。特に２

班の発表が昔話と海洋ゴミをかけていておもしろかったし、わかりやすくてよかったです。また、班で発表することをしたい。・それぞれＳＤＧｓについて詳しく知ることができる発表でそこにおもしろさ等の工夫がたくさん入っていました。１７の目標を守らないとどうなるかそのためにどうするかがよく分かるものがとても多かった。・みんなミスもあったが、精一杯やっていて見ていて楽しかった。あと、発表の仕方がみんな違ってよかった。行動があって、共感しやすかった。多くの問題や課題が知れた。全体の発表を見て、自分のグループよりクオリティーが高く、演技力が高くてすごいと思いました。そして、説明もしっかいしている班があり、ペットボトルや袋を持参している班もあり、とても表現に工夫していてよいと思いました。・みんなそれぞれ違う場面でいろんなことがわかった。同じゴールでも内容が全然違った。演劇でいろいろな個性がみれた。これで SDGs についてみんな考えることができるから、環境が少しでもよくなったらいいと思った。・他のグループで一番よかったのは、７班でした。短い時間で、食品ロスを防ぐためのことについて、わかりやすく伝えてくれたのでとてもよかったです。・それぞれの表現方法や伝え方がありました。身ぶり、手ぶりを使ったり、物を使って表現したり、しゃべり方を工夫していたり、色々なやり方を見ることができました。全員、役にあったしゃべり方ができていて、すごいと思いました。内容がどの班もとてもよくてすごいなと思いました。プラスティックについて以外にも女性差別もあっていいなと思いました。・どの班もわかりやすかった。中に画像を使ったり、作って表したりしてよかった。声の大きさ、おもしろさもあって楽しかった。演劇で改めて SDGs のことがわかった。これからは海で物を捨てたり、プラスティックを再利用したりしたい。・いろいろな班が自由なアイデアで SDGｓをもとにして劇を進めていって面白かった。内容が重なることが懸念だったので、順番が３番をとれたのはよかった。これまでの学習を通して、自分にできることがあるのでやっていきたい。

生徒の変化

ＳＤＧｓが自分たちの身近な問題だと感じた生徒が多く、興味を持つ第一歩となった。自分の視点から、物事を見るだけでなく、視野を広げ、気候危機や多文化共生を通して、地球規模で物事を見つめ、困難な状況にある地球環境や当事者の気持ちに寄り添うことができた。そして、遠い世界の話ではなく、自分たちの身近なものとして発言や感想、演劇、行動変容へ還元することができた。一時的な学習で終わらせず、今後もその都度、立ち戻り考える機会を継続して持ちたい。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

この取組みは６時間であったが、１学期の総合で「共に生きる」と言うテーマで５時間の取組みを行っていた。内容は「もしも世界が１００人の村だったら」「ＪＩＣＡ国際協力出前講座」「とよなか国際交流協会出前講座」「ドキドキワールド（吹田市）」「アフリカンステップに挑戦！」と国際理解教育が中心であり、今回の SDGｓに関連することも多く、一連の流れの中で取組みが進められたことは有意義で生徒も継続的に取り組むことができた。９月に入り、１回目の「中村哲さんの生き方から学ぶ」では、分散登校中のリモート学習で行った。パワーポイントでの説明の後、一時間の動画を各自が視聴し、その後まとめを行う内容だったが、１学期と２学期の総合のつなぎ的な内容で、生徒も真剣に考えることができていた。「環境危機」「多文化共生」では、写真、動画、資料などを用い、できるだけ生徒が主体的に学習を進められる内容にした。そこでは、難しい内容ではあったがものの、生徒は関心を持ち意欲的であったため、こちらもとてもやりがいのある授業を展開できた。

ＳＤＧｓの取り組みのまとめで行った「演劇ワーク」では、４～５人のグループに分かれて１７のゴールからテーマを決め、現状や課題、解決方法を創作演劇で創った。その際に、生徒の方から、「〇〇の国の中学生は学校に行けるの？」「貧困って具体的にどんな状態？」など、演劇ワークを通して「主体的に学ぼうとする」姿が多く見られた。そして、いろんな人の気持ち、身の回りの生き物や環境に目を向け、独自の視点を大切に、短時間で演劇を創り上げることができた。演劇発表会では、バラエティー豊かな内容でそれぞれが必要な要素を取り入れながら、自分たちの主張を表現することができ、発表者、鑑賞者ともに充実した時間となった。

それぞれの授業後には、できるだけ多くの生徒の感想を「学年だより」を通じて伝え、生徒同士が思いや考え、多様な意見を共有できる機会を持ったことでただ学んだだけで終わらせない、実生活につながりをもつ工夫を行うことができた。今後も継続してこの取組みを行っていきたい。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】
（授業前）日本に住む外国人に対して、深く考えたことのなかった生徒が多かった。自分たちの身近に外国人はいるものの日本人と同じようにさまざまな自由や権利があり、日本は豊かな国だから、幸せに暮らしていると思ったいた。
（授業後）日本に住む外国人にはさまざまな在留資格があることを知って、その中にはとても不安定な中で、仕事や人権が保障されていないことを知って悲しく残念に思った生徒が多くいた。「技能実習生」に関しては、日本に夢や希望をもって来日しても、このような悲惨な現状を目の当たりにし、日本人として申し訳ない気持ち、やるせない気持ちを感じながら学習を進められた。「難民」の人が日本で差別的な扱いを受けていることを知り、「不法滞在者」にもさまざまな立場や環境の中で生きている人がいることを知り、物事を多面的な視点で見ることの大切さを実感した。もしも自分が言葉のわからない外国に住むとしたら、どんな不自由があるか、疑似体験を通して知り、今回学んだ「技能実習生」「難民」などの日本に住む外国人の人たちの気持ちを想像でき、大変さや不安の中で生きているということを感じられた。全体を通して、現状を理解し、これから何が必要か、どう生きることが「多文化共生」にとって大切かを考えることができた。

【8】自己評価

1. 苦労した点	・「SDGｓ」の中で限られた時間で必要な内容を選ぶことに苦労した。それが、生徒が問題意識をもてるか、これらかの行動に影響を与えるか、これからの生き方のヒントになるか等、できるだけ生徒が興味をもち、学んだことが日常に還元されるような教材選びに時間をかけた。「中村哲さんの生き方から学ぶ」では、リモート学習だったため、生徒の反応を見ながら授業を進められなかった。「フォトランゲージ」や「気候危機」に関しては生徒の関心が高いと予想していたので、内容を深めるような教材づくりに苦労した。「多文化共生」の内容の選択後は、第一に現状を正確に伝え、研修で学んだことをもとに書籍などの資料を集めた。自分の学びを深めながら、生徒に向けてはできるだけ一般的な用語を使用し、受け入れやすいような教材づくりの工夫を行った。「多文化共生」の内容は、基本の用語などから生徒に伝える必要があったため、限られた時間内で難しいことがたくさんあった。学んだ内容を「発表」する形態は今回「演劇」を取り入れたものにした。体験し学ぶことを重視したため、この内容となったが、生徒の動きが予想困難だったため、発表が終わるまでハラハラ・ドキドキした。
2. 改善点	「多文化共生」は基本的情報を生徒全員で共有することで、学習に深みや広がりが持てる授業を展開できると思った。よって、内容に対して、もう少し時間をかけて継続的に学習を進めていく必要がある。
3. 成果が出た点	難しい内容をできるだけわかりやすく、学びたいという気持ちが持てるような授業を進めていくことができた。授業者として６時間を終え、教科担任として美術の授業で関わってきた以上に、この学習の中で生徒との距離が近くなり、美術の授業においてもよい影響となった。それは、やはり「総合的な学習の時間」で行った「SDGｓ×西中　誰ひとり取り残されない」の取組みが生徒にとって有意義であったということ、そして、この学習を通して、人として大切にしなければいけないこと、世界のことなど、一人ひとりの「生き方」に関することを共に考えられたからではないだろうかと思う。

参考資料

文献：「SDGs クイズ図鑑」笹谷秀光、「SDGs 入門」JICA、「日本の SDGs それってほんとにサステナブル？」高橋真樹、「グレタ　たったひとりのストライキ」　マレーナ＆ベアタ・エルンマン・グレタ＆スヴァンテ・トゥーンベリ『人新世の「資本論」』斎藤幸平、毎日新聞、朝日新聞、「地球の食卓」「啓太（チュムナ）さんカンボジアから」(NPO 法人)開発教育協会

サイト：映像：ＮＨＫ　for　School、ＢＢＣニュース、クーリエ・ジャポン HUFFPOST、Hope、BBC　NEWS　JAPAN、国際連合広報センター、WWF 法務省、映画「東京クルド」予告編、コープネットの旬鮮フレッシュ便・朝穫りレタス編 ETV 特集　「武器でなく命の水を」医師・中村哲とアフガニスタン

1年生･総合「共に生きる」

「多文化共生」

「SDGs×西中　誰ひとり取り残さない」

日本にカンボジアから難民としてきた啓太（チュムナ）さんの生き方を文章から考えていきましょう

啓太（チュムナ）さん（カンボジアから）

命がけで難民キャンプへ

日本国籍をとりたいと思っていた

同じ境遇の子どもたちとの「場」が居場所に

外国にルーツがあることが理由で子どもには辛い思いをさせたくない

開発教育協会

インドシナ難民として自分のルーツを言えず、辛い思いをしてきたのはなぜか？

「誰にでも平等に接してほしい」啓太（チュムナ）さんから見えてくる日本の姿を想像してみよう

世界には、故郷をさまざまな理由から逃れ、難民として生きる人々がいます

今から紹介するのは、トルコから難民として日本にきたオザンとラマザンのドキュメンタリーです

映画「東京クルド」予告編

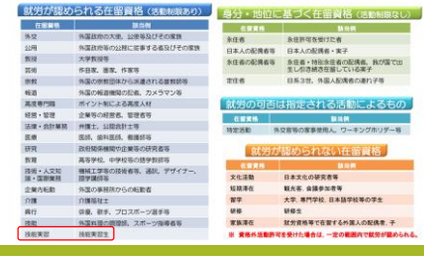
彼らの必死に救いを求め懸命を生きようとする姿をみてみなさんはどう思いますか？

日本で住む外国人の数は
どれくらいだろう？

約３００万人

日本の人口の４２人に１人が外国人

日本に住む外国人（在留資格）



法務省

今日のランチ

コンビニのお弁当ってどこでだれがつくっているでしょう？

coopnetweb

OXクイズ１

ベトナム出身のAさんは、技能実習生として酪農の仕事をしています。長時間労働が続いたため、体調を崩してしまいました。Aさんは、転職できると思いますか？

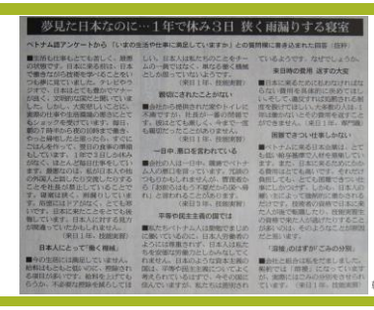
×

OXクイズ２

フィリピン出身のBさんは、技能実習生として水中ポンプをつくる工場で働いています。

フィリピンに住む妻は一緒に日本に来ることはできませんでした。

○



夢見た日本なのに…1年で休み3日 狭く雨漏りする寝室

朝日新聞

斎藤幸平の分岐点ニッポン

資本主義の先へ　差別にあえぐ外国人労働者たち　社会通念の変革、自分事として

毎日新聞　2020/11/1

「言葉がわからない」
を体験しよう

「何かが起こった、さぁ、そんなときあなたはどう行動する？」

「仕事をしよう」履歴書編

주민표에 기재되어 있는 주소	도도부현	시구정촌	
후리가나		전화번호	( )
성명			

「メニューを選ぼう！」チュニジアのレストランにて

قائمة
زلابية مقلية كبيرة في تونس
مونير عربي من السمك الأبيض
شوربة مروحية

日本に住む外国人に対する気持ちについて、授業の最初と最後ではどのように変化しましたか？

この授業を通して学んだことや考えたことをまとめましょう

見えないものを見る力

～データを批判的に読み解き、概数を推定すること～

氏名:北村　啓明　　学校名:立命館守山中学校

担当教科:数学　　実践教科:数学

時間数:4 時間　　対象学年:中学 3 年生　　人数:80 人

【実施概要】

<table>
<tr><td colspan="3">【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

確率の基礎的知識を社会の具体的な事象に結びつけ、数学と社会のつながりを意識する。
数学を社会問題の解決に活用する技能を学び、主体的に問題を発見する力をつける。
データを批判的に読み解き、情報を鵜呑みにせず、根拠のある主張ができるようになる。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">【2】
単元の評価
規準例</td><td>（ア）知識・技能</td><td>・標本調査・全数調査などの用語の理解とその活用場面を理解すること
・標本調査の必要性と意味を理解すること。</td></tr>
<tr><td>（イ）思考・判断・表現</td><td>・標本調査の方法や結果を批判的に考察し、表現すること
・簡単な場合について標本調査を行い、母集団の傾向を推定し判断すること。</td></tr>
<tr><td>（ウ）主体的に学習に取り組む態度</td><td>・与えられたデータを盲目的に過信せず、批判的に判断して有効に活用しようとすること。</td></tr>
<tr><td>【3】
単元設定の理由</td><td colspan="2">【生徒観】
塾に通い、受験を突破することに焦点を当てた学習中心の生徒が多く、定型問題に対応する力は高いが、問題の背景を考察し「なぜ」を問う姿勢は乏しい。また、与えられた問題に対して受け身の姿勢であり、根本にある思考する楽しさが失われていたり、解決に至る長い道のりを耐え忍びながら学びを進める力が弱まってきたりしている。

【教材観・指導観】
データを扱う単元はこの度の学習指導要領改定において、小中高ともに重点が置かれている。というのも、批判的思考力を鍛えることであったり、文系理系を問わず数学を学ぶ重要性が高まっていることであったり、グローバルな社会問題に対峙する際の素養としてデータリテラシーへの期待の高まりであったりすると考える。指導においては誘導的でなく、生徒たちが自ら確率の重要性や有用性に気づけるような教材を与え、実験を通して体験的に理解を深めることを重視したい。

【想定される生徒の変容】
標本調査を学ぶことで、母集団の傾向に対して根拠をもって推定する力、結果を正しく解釈する力が高まり、世に溢れるアンケートや誘導的な宣伝が適切か否かの判断力などの育成につながると考える。</td></tr>
</table>

【4】展開計画（全４時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	＜概数を求める実験＞ 作業を通じて、多くのものを数える方法を試行錯誤しながら考える。また、他の班の発表を聞くことにより、数え方にいろいろな方法があることを知る。 ＜割合を推定する実験＞ 中を見ることなく数を推定する確立の実験を行う。他の班の発表を通じ、理解を深めた上で、生じたズレなどにも考察を深める。	○グループ A と B に分かれる。 （グループ A） 容器に入っているたくさんの玉が何個であるのかを、用意された道具を自由に用いてできる限り正確に、（できれば早く）数える作業を行う。 （グループ B） アタリとハズレを合わせて 20 個の玉が入った袋の中身を見ないで１つずつ取り出す実験を行い、アタリが何個入っているのかを推定する作業を行う。	BB 弾、容器、紙皿、測り スプーン、袋など ワークシート１　表 （添付資料１）
2	＜標本調査と全数調査＞ 標本調査、全数調査という言葉の意味を知り、いくつかの事例がどちらに当てはまるかを考える。 どのような状況において、どちらの調査が適応されるのかを考える。	○言葉の定義を講義形式で受講したのち、前回と同じグループに分かれ、ワークシートに挙げた事例がどちらに当てはまるかを考える。 ○意見交換を行ったのち、どのような状況においてどちらの調査方法が適しているのか考察する。 ○各グループで、それぞれの調査に当てはまる事例を 5 個ずつ考え、発表する。	ワークシート１　裏
3 本時	＜琵琶湖の魚の数＞ 琵琶湖に生息する魚の概数は検索すれば公表されたデータはいくつか見つかる。こちらで調べた資料を見ながら感じたこと、疑問に思うことなどを考えたのち、そもそも全数調査が不可能なはずの魚の数をどのように調査しているのか議論する。	○琵琶湖の写真を見て、琵琶湖の抱える問題点の一つである外来魚と固有種の話に着目する。 ○魚の数の調査結果を提示し、経年変化のグラフなどを見ながら、感じること、疑問点を議論する。 ○そもそも、琵琶湖の魚の全数調査が不可能なことに気付いたのち、どのように調査しているのかを考える。 →1 回目の授業のグループ B の取り組みを思い出してもらう。 ○アイデアが出た頃に、各グループ実験を行う。	容器、BB 弾、紙皿など ワークシート２　表 （添付資料２）
4	＜情報操作を疑う＞ 前回の実験を通して、実験・調査の精度を高めるために必要なことは何かを考える。 また、与えられたデータというものを批判的に見なければ、無意識のうちに情報捜査されている可能性があることを事例を用いて理解する。	○前回の実験の振り返りを行い、各班の実験結果と、教員側が把握している実際の数値とのずれを考える。その中で、実験精度が高い低いいずれの場合も、自分達の実験の何が良くて何が良くなかったのかを整理する。 ○検索すればすぐに見つかるデータや、アンケート調査、コマーシャルとして使われる数値などの例をいくつか紹介し、何が問題点かを考える。	ワークシート　裏

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5 分)	○グループ分け ２～４人に分かれる。指定はせず、話し合いが最も活発にできるよう自由に分かれる。	スクリーンや iPad での提示をしながら座席についてもらう。	
展開１ (5 分)	○琵琶湖について 琵琶湖の写真を見ながら、琵琶湖の抱える問題を各グループから挙げる。 ○外来種と固有種 いくつかある問題のなかで、外来魚の問題に着目し、生息数の経年変化のグラフを見ながら、このグラフを見て気づいたこと、疑問点などを考え、グループから挙げる。	内部進学生徒は中学１年生の際に琵琶湖学習をしている。 ・さまざまな問題や着眼点がある中で、共有しながら外来種と固有種に着目してもらう。 ・経年変化のグラフでは読み解き方がいく通りも考えられるが、おそらく概数そのものに着眼する生徒は少ないと予想される。	・琵琶湖の写真 ・外来種と固有種 （添付資料３） ・外来種概数の推移 （添付資料４）
展開２ (5 分)	○グループ議論 「このデータの魚の概数は、どのようにして求められたのか」 グループごとに議論する。 ○意見共有 それぞれの班がどのような考えを持ったのか意見を発表、共有する。	・2 回前に行った中身の見えない袋の中にあるアタリの数を推測することを思い出してもらいながら、問題意識を本日のテーマにフォーカスしていく。 意見がどうしても出ない場合はこちらからヒントを与える。	ワークシート２ （添付資料２）
展開３ (25 分)	○グループワーク 容器に入った玉を魚に見立てて、実際に実験を行い、中に入っている玉の数を推定する。	・共有した方法を参考にしながら、数多く存在する玉を魚と見立てて概数を推測する。一度に数十個とっても良いが、全数調査はできないことは再確認しておく。	容器、紙皿、BB 弾
まとめ (5 分)	○各班の実験結果を共有し、教員が把握している数と実験結果を照らし合わせる。	今回の自分達の実験の精度を確認するためだけに実際の数値を教える。次回、考察を深める。	ワークシート２ 記入

【授業実践の様子】

3年生 数学

『 数を数える　その１ 』

配布日　　月　　日（　）；提出日　　月　　日（　）

２年　　組　　番　氏名

・**標本調査** … 集団の中から**一部**を取り出して調査し、集団全体の傾向を**推測**する調査方法

ex）	選挙出口調査、選挙当落速報(全部開票しても逆転はないだろう という頃)、 テレビ視聴率、世論調査(内閣支持率など)　など

・**全数調査** … 集団の**全て**について行う調査方法

ex）	選挙結果、国勢調査(世帯構成など)、健康診断、入試テスト　など

グループワーク　その１

【グループ A】 入れ物の中にある玉は何個あるか調べなさい。 ポイント：できる限り正確に（できれば素早く）	【グループ B】 袋の中にある当たりの数を推定しなさい。 ポイント：袋の中にあるのは当たりとはずれ合わせて２０個です。
＜調べた方法＞	＜調べた方法＞

【練習問題】

次の調査は、全数調査と標本調査のどちらが適しているか答えなさい。

（１）二条城周辺の蚊がデング熱の病原体をもっているかの調査

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　調査

（２）りんごを出荷する際の味見調査

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　調査

（３）りんごを出荷する際の機械によるサイズ調査

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　調査

（４）中学校での健康診断

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　調査

（５）・ある中学校の１クラスの勉強時間に関する調査

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　調査

・ある中学校の１学年ごとの勉強時間に関する調査

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　調査

・日本の中学生の勉強時間に関する調査

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（添付資料１：ワークシート１）

3年生 数学

『 数を数える　その２ 』

配布日　　月　　日（　）；提出日　　月　　日（　）

２年　　組　　番　氏名

見えないもの、数が多いものをどうやって数える（数を推測する）とよいか。

【練習問題】

琵琶湖に生息している魚は何匹であるか。

調査が困難な点・・・

グループワーク　その２

グループワーク１のＡグループがやった入れ物の中が見えない、直接数えることができないとしたらどうやって数えるか。

グループＢで最初にわかっていたもの・・・＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

だから今回は、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

では、やってみよう！

問題点・注意点は・・・

【まとめ】

絶対的基準

全数調査	標本調査
絶対的に正確でないといけない （間違っていると 社会的に大問題になる）	ある程度正確ならよい （間違っていても 社会的に許される）

コストがかかろうが、母集団が多かろうが、「正確でないと、問題になる、意味がない」ものは、

➡＿＿＿＿＿＿＿＿

それ以外なら、＿＿＿＿＿＿＿＿でも OK な可能性がある。

できる限り正確な調査の為には、

＿＿＿＿＿＿＿＿「わざとでない、意図的でない、人為的でない」に取り出すことが必要

（　　）

「無作為に抽出した」というのは母集団と標本は「相似である」と行っているのと同じです。

母集団と相似ということは、

母集団対象／母集団全体＝標本対象／標本全体

と同じになります。

（添付資料２：ワークシート２）

ブラックバス

ブルーギル

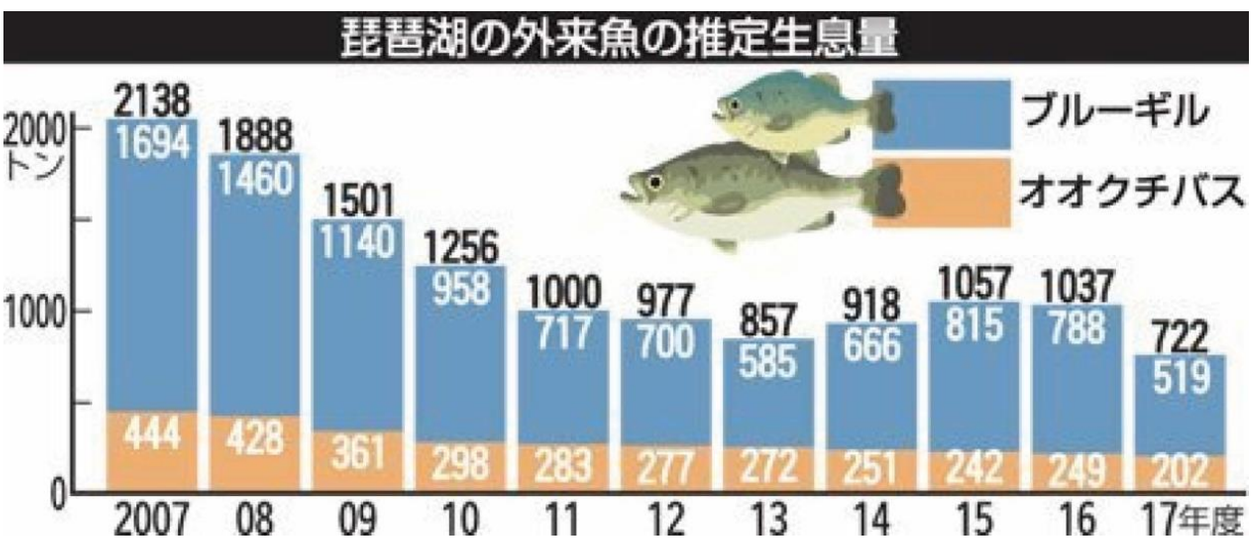
ニゴロブナ

鮒寿司

ホンモロコ

ホンモロコの佃煮

（添付資料３：外来種と固有種）



（添付資料４：外来魚の生息量の推移）

（実験教具）

（授業の様子１）

（授業の様子２）

【6】本時の振返り

実験・作業は皆積極的に取り組み、話し合いも気の合う生徒同士で作ったこともあり活発な活動ができた。ただ、思っている以上に生徒たちの発想が凝り固まっていたり、ステレオタイプに浸かっていたりすることがわかり、発想を巡らせるための発問方法は然ることながら、時間をもっと長く設定する必要性があるかもしれない。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

（授業後のアンケートより抜粋）

・実験をしてみて、どのグループも大体答えに近い答えになっていて、僕たちのグループも近い結果になっていたので、本当にだいたい確率通りになるんだなと数学の力を実感した。

・全体が分からなくても一部の実験の結果からわかるんだなと知り、ちょっと考える幅が広がった気分になった。こうゆう授業は楽しいので今後ももっとやっていきたいです。

・湖の問題はとてもなるほどなと思った。もっと他のものの数をどうやって調べているのか知りたい。数学が意外と社会に使われているんだなと思った。数学使えばなんでもわかりそう。

・やっぱり数学は大切だなと思いました。数学は将来の仕事の時だけ使うものではなく生きていく上で使うものであると感じました。社会の動きや経済は数学とも繋がって、一つになっているのだと私は考えました。

・今までは数学など生きていて使わないのになぜ勉強しているのだろうとおもっていましたが、今回このような授業を受けて考えが変わりました。意外と生活中に数学があって興味深かったです。

・見えないものの数も計算で求められることにびっくりしました。今まで数がわからなかったら途中で諦めたり大体の数で考えていたけど、次からこのやり方で身近にあるものの数を考えてみようと思いました。
・自分たちで組んだペアだったので、積極的に会話をして、止まることなく、楽しく授業を受けることが出来ました。

・湖の魚を推定する方法は印をつけた魚を逃すという方法である程度の推定は可能だと思ったしとても素晴らしい方法だと思った。湖の魚を全部捕まえて何匹生息しているのか確認するのは不可能だけど、数学で習ったことを使って大体の匹数を推定できるので、他にももっと日常生活でも生きてくるのではないかと思いました。

・今までグラフの数字を疑ってみるということはしなかったが、今回の授業でおかしいところはないかと考えてみると、どうやって数字を出しているのか確かに気になるなと思いました。グラフの数字はちゃんと式を立てて推定量を出しているということがしれてよかったです。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

（アンケート集約）

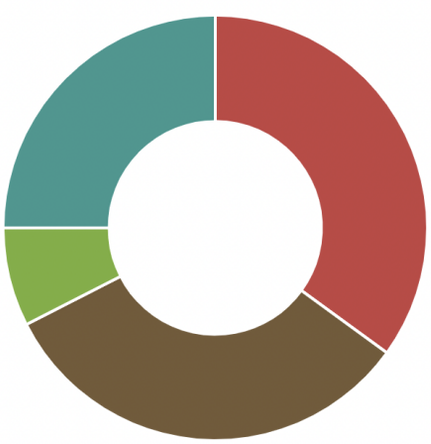
設問 1 今回の授業についての、興味（面白いと感じる）・関心（もっと知りたいと感じる）について以下のどれに近いですか

未回答を含める　回答数 30

- 選択肢 1　14人(35%)　興味・関心ともにあった。
- 選択肢 2　13人(32.5%)　興味があった
- 選択肢 3　3人(7.5%)　関心があった
- 選択肢 4　0人(0%)　どちらもなかった
- 未回答　10人(25%)

設問 2 数学と社会のつながりをどの程度感じているか、以下の中で近いものはどれですか。

未回答を含める　回答数 30



- 選択肢 1　14人(35%)　以前から感じていて、今回さらに強まった
- 選択肢 2　0人(0%)　以前から感じていたが、今回で弱まった
- 選択肢 3　13人(32.5%)　以前は感じていなかったが、今回で強まった
- 選択肢 4　0人(0%)　以前から感じていず、今回で弱まった
- 選択肢 5　3人(7.5%)　特に変化しない。
- 未回答　10人(25%)

【8】自己評価

1. 苦労した点	教材の準備が大変であった。しかし、１００均で手頃な教材を発見できたときはとても楽しかったし、充実した時間であった。 授業実践の前に自分で実験することが大切で、当初購入していた玉の重さが微妙に違ったため、重い玉が下に溜まることに気づけた。
2. 改善点	開発教育として、環境面に視点を持っていくことは一定できたと思うが、国際的な視点にフォーカスすることができなかった。今後はそちらの方向でも教材を開発していきたいと考えている。
3. 成果が出た点	普段の講義形式の授業では退屈そうにしていたり、理解が深まっていない生徒も多い中、社会との結びつきを考えることで、積極的に意見をしたり、さらなる問題意識を持って学習に取り組んでくれた。こちらが些細なことだと考えていることでも、生徒にとって学習を追体験する機会はもっと多く必要であることがわかった。
4. 備考（授業者による自由記述）	国際教育としての数学教員の参画率は決して高いものと言えない。しかし、今後数学的な思考は今までにも増して必要になってきていることは明らかであり、文系理系に早期に分かれてしまう日本の教育システムも変わろうとしている。データ分析の分野は批判的思考力を鍛える単元として活用が期待されている。教材研究を積み重ね、生徒の主体的な学びにつながる学習教材、授業デザインを今後も研究していきたい。

参考資料：

添付資料３：ブラックバス　琵琶故知新　2020.3.24　https://www.biwako.info/topics/1044/

ブルーギル Sabuism 2018.9.19 https://sabuism.com/2018/09/19/lakebiwa-bluegill-drastic-decreasing/

ニゴロブナ　水中写真のすき間　http://suityu-sukima.sakura.ne.jp/kasen/nigorobuna.html

鮒寿司　琵琶近江商店　https://www.biwa-oumi.com/SHOP/gift_TF1.html

ホンモロコ　ウィキペディア
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9B%E3%83%B3%E3%83%A2%E3%83%AD%E3%82%B3#/media/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:G._caerulescens.tif

ホンモロコ佃煮　石山寺至誠庵　https://www.shiseian.com/item/1008/

添付資料４：琵琶湖のミステリー、過去１０年で外来魚最小　ブルーギル寿命？　2018.12.17　京都新聞
https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/1685

滋賀県 HP 水産業　https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/shigotosangyou/suisan/

リサーチクエスチョンの作り方

―問いづくりを通して多文化共生に触れる多文化共生に触れる―

氏名:髙市　佳名子　　学校名:大阪教育大学附属高等学校池田校舎

担当教科:国語科　　実践教科:グローバル探究Ⅰ(総合的な探究の時間)

時間数:1時間　　対象学年:第1学年　　人数:80 名×2 時間の 160 名

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）:

・今後のグループ探究での活動を前に、リサーチクエスチョンの作り方を知る（知識・技能）

・グループで協力し、「日本に住む外国人」をテーマにしたリサーチクエスチョンを作る（思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度）

【2】単元の評価規準例	（ア）知識・技能	課題を理解し、グループで話し合いワークシートに記入している（行動の観察）
	（イ）思考・判断・表現	課題を理解し、グループで話し合いワークシートに記入している（行動の観察）
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	グループワークに積極的に取り組んでいる。（行動の観察） 新聞記事や、ワークシートを提出している。（提出物の確認）

【3】単元設定の理由

✓ 児童/生徒観

✓ 教材観

✓ 指導観

✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容

【生徒観】

課題に対して前向きに取り組む生徒が多い。課題研究に取り組むのは初めてである。昨年度までは、課題研究とは何かについて学ぶ機会が少ないまま、グループ探究に入ったことで研究方法に戸惑う生徒も多かった。ＳＤＧｓについての知識も、出身中学校によってさまざまである。今年度はこれまでよりも丁寧に研究の仕方について学ぶ機会を設けることで、さらに質の高い研究活動ができることを期待している。

【教材観】

新聞記事を用いて、リサーチクエスチョンを作る練習をする。ＳＤＧｓをテーマにした探究活動を行っていくなかで、ＳＤＧｓが誓っている「誰一人取り残さない（leave no one behind）」という考え方を再度確認したい。この考え方は、「多文化共生」にも通じるものであるだろう。生徒たちが各自持ち寄る新聞記事のテーマは、「日本に住む外国人」とした。「日本に住む外国人」に関する新聞記事について問いを出しあい、また、研究にふさわしい問いをグループで合意形成する。そのことによって、２つのことを学ばせたい。

第一に、リサーチクエスチョン作る方法を身に着けることだ。リサーチクエスチョンを作ることができるようなテーマとはどのようなものであるかをワークによって実感し、リサーチクエスチョンを作る練習をさせたい。「グローバル探究Ⅰ」の教科書として使用している『課題研究メソッド』を使用し、７つの問いの種類（①言葉の意味や定義を問う「問い」②原因（なぜ）を問う「問い」③信ぴょう性を問う「問い」④比較を行う「問い」⑤先行研究・先行事例を問う「問い」⑥影響を問う「問い」⑦方法や関連性を問う「問い」）

	を知り、それに従って問いを出す。その中から「すぐに答えの出ない」問いを選択し、リサーチクエスチョンへと発展させる。 　もう一つは、問いを作る中で多文化共生について「知らなかったこと」に意識を向け、問題意識を持つことである。こちらが提示する課題ではなく、生徒自ら選んできた新聞記事を用いることによって、「多文化共生」に関する問題を自分ごととして捉えられると考えた。「日本に住む外国人」は、扱い方によってはセンシティブなテーマにもなりうるが、「多文化共生」について学ぶためには避けることができない事柄だ。選択できる記事も幅広く、テーマ設定として適切だと考えた。 【指導観・設定時に想定された生徒の変容】 　本校では、グローバル探究Ⅰ〔１単位〕（学校設定科目。総合的な学習の時間としての位置づけ）と、２年生において開講されるグローバル探究Ⅱ〔２単位〕の２年間を通じて、ＳＤＧｓをテーマにした探究活動を行っている。本年度のグローバル探究Ⅰでは、１２月より開始するグループ探究に向けて、「ＳＤＧｓの 17 のゴールについて」（４～７月）、および、「課題研究の行い方」（８～１１月）について学んでいる。 　私がＪＩＣＡ教師国内研修において学んだ多文化共生について、実践を行うにあたり、本校のカリキュラムでは１時間しか確保することはできなかった。１時間という短い時間の中で多文化共生について生徒たちが少しでも理解するためには、「多文化共生」にはまだ問題が山積しており、それは身近なものであることに気付くことが有効であると考えた。授業者が「教える」のではなく、生徒たちが自分で選んできた新聞記事についてクラスメイトの力を借りて言語化していく中で問題に気付くことを期待している。

【4】展開計画（全１時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 本時	・リサーチクエスチョンの作り方を知る ・グループで協力し、「日本に住む外国人」をテーマにしたリサーチクエスチョンを作る	・「日本に住む外国人」に関する新聞記事を持ち寄り、グループで共有する。 ・まだわかっていない「問い」が出そうな記事をグループで一つ選ぶ。 ・選んだ新聞記事について、「問い」を作る。 ・「問い」を検証し、リサーチクエスチョンに発展させる。	・教科書『課題研究メソッド 2nd Edition』岡本 尚也 ・新聞記事 ・ワークシート（資料１）

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
事前	・前時（１週間前）の授業において、宿題の連絡を受ける。 ・宿題は、「『日本に住む外国人』に関する新聞記事を一つ選び、次の授業で持ってくること。」	・宿題を提示する。ネット記事でもよいが、出典に気をつけるよう注意喚起する。校内で新聞を閲覧できるスペースも用意した。宿題忘れを減らすために、前日までに選んだ記事を Google Classroom で提出させる。	
導入 (5 分)	・本時の目標を知る。 課題研究とは何か（既習）について説明を聞き、復習する。		授業全体を通して、資料２のスライドを使用した。
展開 (35 分)	・WORK①「探究にふさわしいテーマ探し」に取り組む。 ・４人のグループになり、持ってきた記事を共有する。 ・１人が１分間で記事の概要を説明した後、残り３人は、記事について「持ってきた人の考え・意図」がわかるような質問をする。残りの３人も繰り返す。 ・４人全員が終わったら、まだわかっていない「問い」が生まれそうな記事を、班で合意形成することで選ぶ。 ・選んだ新聞記事を「研究テーマ」として、ワークシートに記入する。	・グループ活動が活発に行われているか、机間指導を行う。 ・課題の理解が不十分である生徒に対しては補足で声掛けをし、適宜全体へも声掛けも行う。	ワークシート（資料１）
	・WORK②「選択した新聞記事から『問い』を作ってみよう」に取り組む。 ・教科書を参照しながら、問いの種類を知り、問いの種類を意識しながら問いを作成する。	・課題の理解が不十分である生徒に対しては補足で声掛けをし、適宜全体へも声掛けを行う。	教科書：「課題研究メソッド」

まとめ（10分）	・WORK③「問いをリサーチクエスチョンに発展させてみよう」に取り組む。 ・WORK②で作成した問いの中から、「すぐに答えが見つからない問い」を選び、ワークシートに記入する。 ・「すぐに答えが見つからない問い」を検証し、ワークシート「問いの検証」に記入する。 ・教科書の見本を参考に、リサーチクエスチョンを作り、ワークシートに記入する。 ・授業者の指名によって、「どんな記事からどんなリサーチクエスチョンができたか」発表する。 ・授業者による本時の目標についての確認と、まとめを聞く。 ・ワークシート②③を振返りとして記入する。	・課題の理解が不十分である生徒に対しては補足で声掛けをし、適宜全体へも声掛けを行う。 ・班を１～２班指名して発表させる。	

【授業実践の様子】

↓持ってきた新聞記事を共有する。合意形成して記事を一つ選択する。

↓選んだ記事から問いを作る。

↓リサーチクエスチョンに発展させる

↓指名により発表

【6】本時の振返り

生徒たちは、積極的に取り組んでいる様子だった。「多文化共生」のみをテーマにした授業はできなかったため、探究活動前の「リサーチクエスチョンの作り方を学ぶ」という回を通して行った。

大きく２つの内容を１時間に行ったことで、生徒たちは深くは学べなかったかもしれない。しかし、一定の効果があったことを次項より述べたい。

なお、生徒が選んだ新聞記事や作ったリサーチクエスチョンの一例は【8.】4 を参照。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

▼ワークシートの②「『日本に住む外国人』についての『問い』を作ることでわかった自分の『知らなかったこと』について、なぜ『知らなかった』あるいは『知ろうとしなかった』と思いますか？

《生徒の記述》

興味関心がなかった/身近でないテーマだから/周りに在日外国人がいない/周りの人の気持ちになっていなかった/自分とは遠いものだから/差別について考えるのは心がしんどい/ニュースを見ていなかった

▼ワークシートの③「　者を『知る』あるいは『知ろうとする』ことで起こりうる、自分や自分のまわり、社会の変化について想像して書いてください。

《生徒の記述》

知らなかったことを知ることは、その課題に対して意識的になる、つまり解決しようという気持ちも高まる/社会の中にはいろいろな人が色々な理由で困っている。どのように改善できるか考えられる/外国人が日本に住むことに何の違和感も持たなくなる/自分たちが受けている扱いとの違いに気づく/悲しい気持ちになってもできることがあるはずなので、努力しようという気になる/周囲にそういう子がいたとき、孤立しないように寄り添ってあげられる

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

その後、６回の授業の中で実際に生徒たちはグループでみずからのリサーチクエスチョンを立てて、探究活動および発表を行った。「日本に住む外国人」に近いテーマを選ぶ生徒はおらず、私が行った１回の授業では「日本に住む外国人」について身近に感じ、興味を持つ生徒はいなかったようで残念である。とはいえ、「みずからとは異なる者」を受け入れようとするようなテーマは数多く見られた。例えば、「紛争地域での教育をどうするべきか」や、「何を基準にスポーツにおける性別を分ければいいのか」等である。ファストファッションで、発展途上国が損をしないような仕組みについて考えたグループもあった。「当事者」の立場に立ってみるという多文化理解の根幹は伝わったのかもしれない。１年生では、本格的な探究活動をする時間は取れなかったが、２年生では１年間をかけて、個人で設定したテーマの研究をすすめていくことになる。彼らの今後の研究に期待したい。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】

（授業前）

【７】における生徒の記述から読み取るに、このようなテーマは身近ではなく、興味・関心を持っていた生徒が少なかったことがわかる。また、知ってはいても、考えることは辛いテーマであることから、考えることを避けていた者もいた。多文化共生というテーマに限らず、ニュース自体を見ていないと答えた生徒も多かった。

（授業後）

【７】における生徒の記述で、「多文化共生」というのは新たな視点であったと答えた生徒は多かった。授業前には「身近ではない」と答えた生徒が多かった一方で、授業後には、「身近にそういう人がい

たら助けてあげたい、寄り添ってあげたい、近所に引っ越してきた外国人について考えたい」というように、「国」や「政府」という大きな単位をあげるだけではなく、身近な外国人について思いを寄せた意見が多数見られた。

また、「多文化共生」を理解するために大切な「当事者の気持ち」というところに思いを馳せた生徒もいたようであり、私が予想していた以上に、短時間で多文化共生の核心にまで、生徒たちは自らたどり着いていたようだった。

【8】自己評価

1. 苦労した点	短時間で、生徒の意識を変容させ、その変容が見える形になるような問いかけをすることは難しい。ワークシート②③の　問いかけは半ば強引ではあった。 また、本校は国際枠入試制度があるにも拘らず、ワークシート②の　内容から、「日本に住む外国人」を身近ではないもの、周囲に在日外国人はいないものとする思い込みがあったことは予想外であった。この意識は授業後もそこまで変えることはできなかったように思う。
2. 改善点	再度実施するのであれば、「日本に住む外国人は身近ではない」という思い込みを変えるような授業展開が望ましいと考えた。
3. 成果が出た点	「多文化共生」という考え方に初めて生徒が触れたという点で成果があった。高校生は、部活動に塾にと忙しい。新聞を読んだりニュースを見たりする時間もあまりないようだ。「自ら新聞記事を選ぶ」というのは、あまりしない体験だっただろう。そのことによって、探究のテーマというのは、周囲で起こっている「困りごと」に目を向け、耳を澄ませることから見つかるものだということに気付くことができたのではないだろうか。 この短時間で「多文化共生」の核ともいえる「当事者に寄り添う」というところまで考えた生徒もいたことは私の予想を超えた成果だったといえる。
4. 備考（授業者による自由記述）	本時を通じて生徒たちが作ったリサーチクエスチョンをいくつか紹介したい。 ・「ALT の欠員」についての記事から「ALT がいる学校といない学校でどんな差が生まれるのか」 ・「外国人技能実習生の不当な労働」についての記事から「日本において外国人技能実習生が受けている不当な労働に対して起こせる解決策は何か」 ・「外国籍の住民投票権」についての記事から「国がすぐに外国籍の住民投票権を認めない背景には何があるのか」 ・「外国人児童生徒の教育を受ける権利」についての記事から「全ての外国人児童が快適な学校生活を送るにはどうすればいいか」

添付資料：

リサーチクエスチョンを作ろう

（　　）組（　　）番　名前（　　）

①リサーチクエスチョンを作る

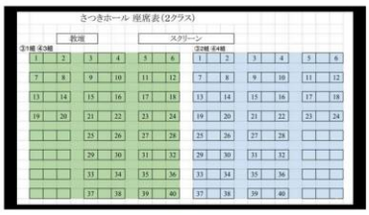
・『課題研究メソッド』p.55 を参考に記入します。

・グループワークですが、「全員」提出してください（表の内容はグループ同じ内容になるはず）

１．研究テーマ	
２．研究テーマについて立てた問い（p.44 参照）	
３．すぐに答えが見つからない問い（p.46、54 参照）	
４．問いの検証	
・どこの地域が対象か？	
・どのような人やものが対象か？	
・いつの時代が対象か？	
・どのような状況を想定しているか？	
・どの学術分野（p．34）に関連するか？	
５．リサーチクエスチョン	

②「日本に住む外国人」についての「問い」を作ることでわかった自分の「知らなかったこと」について、なぜ「知らなかった」あるいは「知ろうとしなかった」と思いますか？

③それを「知る」あるいは「知ろうとする」ことで起こりうる、自分や自分のまわり、社会の変化について想像して書いてください。→課題研究の意義となるもの



リサーチクエスチョンの作り方

2021/11/19　グローバル探究Ⅰ

本時の目標

- リサーチクエスチョンの作り方を知る
- SDGsをテーマにした課題研究のために、「多文化共生」という考え方に触れる

そもそも課題研究（探究）とは何か

- 課題研究＝
  答えの用意されていない「問い」を見いだし、より適切な手法を用いて探究すること（知識の論証・疑念解消・問題解決）

〔『課題研究メソッド』p.12〕

自由研究との違い

- 自由研究＝**自分の興味・関心のある**テーマについて調べる/観察する/実験する
- 課題研究＝自分の興味関心のあるテーマ
  かつ
  社会・学術の課題や自分の進路と関係しているテーマ（完全に自由じゃない）

〔『課題研究メソッド』p.12〕

調べ学習との違い

リサーチクエスチョン

- 調べ学習＝すでに明らかになっていることを調べて理解する。
- 課題研究＝すでに明らかになっている情報を踏まえ（**先行研究調査**）、「問い」をたて、さらに調べ、問う過程を繰り返すことで、**まだわかっていない「問い」に取り組む**

＊「問い」は探究の過程で変化していくもの
〔『課題研究メソッド』p.12〕

WORK①
探究にふさわしいテーマ探し

WORK①　探究にふさわしいテーマ探し　個人をシェアしよう！

(1) 1人が、持ってきた記事の概要を説明する。
〔1分間〕

(2) 他の3人は、記事について質問する。持ってきた人の考え・意図がわかるような質問をしてください。〔2分間〕

(3) 残りの3人も同様に繰り返す。

(4) まだわかっていない「問い」が生まれそうな記事を一つ選んでみよう。わからなければ、「たくさんわからないことがある記事」でOK！（班で合意形成してください）
〔3分間〕

〔参考：山中信幸〔川崎医療福祉大学〕スライド・高市氏〕

WORK①　探究にふさわしいテーマ探し　個人をシェアしよう！

(1) 1人が、持ってきた記事の概要を説明する。
〔1分間〕
- どんな記事？
- いつ
- どこで
- 誰が出てくる
- 何について書いてある
- どんな状況

など

〔参考：山中信幸〔川崎医療福祉大学〕スライド・高市氏〕

WORK①　探究にふさわしいテーマ探し　個人をシェアしよう！

(2) 他の3人は、記事について質問する。持ってきた人の考え・意図がわかるような質問をしてください。〔2分間〕
- なぜその記事を選びましたか？
- その記事を読んで、どんな気持ちがしましたか？
- その記事は、どんな意図で書かれていると思いますか？
- その記事は、どんな人に対して、何を伝えようとしていますか？
- この記事について課題研究する意義は？

など

〔参考：山中信幸〔川崎医療福祉大学〕スライド・高市氏〕

WORK①　探究にふさわしいテーマ探し　個人をシェアしよう！

2人目、3人目、4人目も同様にやってみてください。

WORK①　探究にふさわしいテーマ探し　個人をシェアしよう！

(4) まだわかっていない「問い」が生まれそうな記事を一つ選んでみよう。
難しければ、「たくさんわからないことがある記事」でOK！
（班で合意形成してください）
〔3分間〕

選んだら、ワークシート「1. 研究テーマ」に記事のテーマを簡潔に記入してください（『メソッド』p.55）

WORK②
選択した新聞記事から「問い」を作ってみよう。

WORK②　選択した新聞記事から「問い」を作ってみよう。

- 問いの種類を知ろう→『メソッド』p. 44
  ① 言葉の意味や定義を問う「問い」

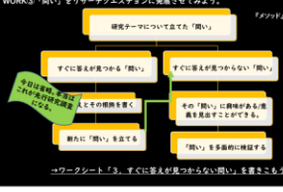
「問いの種類」を参考にしながら、ワークシート「2. 研究テーマについて立てた問い」を記入しよう。〔5分間〕
＊すべての種類を網羅する必要はない。
＊「問い」の質は問わない。たくさん作ろう！
（『メソッド』p. 55も参考に）

  ⑥ 影響を問う「問い」
  ⑦ 方法や関連性を問う「問い」

WORK③
「問い」をリサーチクエスチョンに発展させてみよう。

WORK③「問い」をリサーチクエスチョンに発展させてみよう。

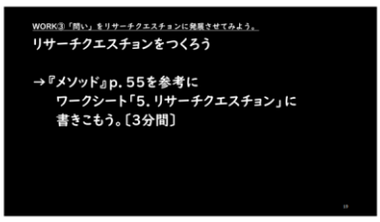
『メソッド』p. 54

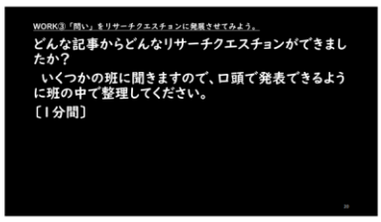


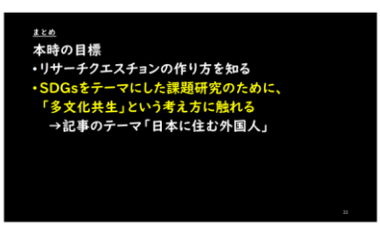
→ワークシート「3. すぐに答えが見つからない問い」を書きこもう〔5分間〕

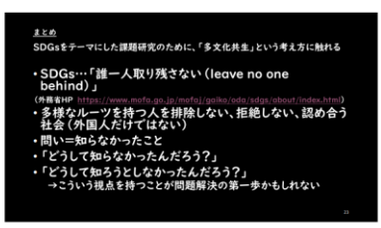
WORK③「問い」をリサーチクエスチョンに発展させてみよう。

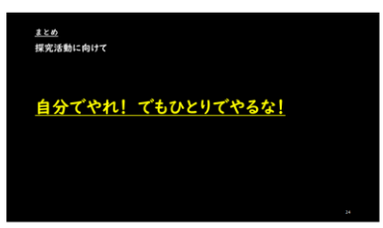
「すぐに答えが見つからない問い」を検証しよう
→ワークシート「4. 問いの検証」に書きこもう
〔3分間〕
- どこの地域が対象か？
- どのような人やものが対象か？
- いつの時代が対象か？
- どのような状況を想定しているか？
- どの学術分野（メソッドp.34）に関係するか？

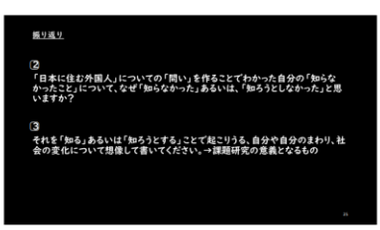












参考資料：
・岡本尚也『課題研究メソッド　2nd　Editon』2021,啓林館
・外務省「JAPAN SDGs Action Platform」
https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html, 最終閲覧日 2021/11/18
・JICA 関西「教師国内研修」山中信幸(川崎医療福祉大学)スライド資料

What can we do to achieve the SDGs?

氏名:二宮　宏樹　　学校名:兵庫県立明石西高等学校
担当教科:外国語　　実践教科:総合的な探究の時間
時間数:5時間　　対象学年:第1学年　　人数:39 人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

JICA関西訪問や国際交流活動など、本校国際人間科の行事をきっかけに、言語や文化の多様性への気づきを促し、その多様さから生じる課題について考察する。この度の授業実践を、多様な意見の受容や他者との協働、新たな価値観への出会いの機会の提供と位置づけ、主体的かつ協働的に学ぶ態度の育成を目指し、２年次の探究活動の礎とすることを志向する。

【2】単元の評価規準例	（ア）知識・技能	言語や文化の違いから生じる問題に気付き、そのことが自分自身の生活とつながっていることを理解している。
	（イ）思考・判断・表現	言語や文化の違いから生じる問題から解決策を考え、論理的に表現する力を身に付けている。
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	自ら進んで課題に向き合い、自他のよさを認めながら、協働して課題を解決しようとしている。

【3】単元設定の理由

✓ 児童/生徒観
✓ 教材観
✓ 指導観
✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容

【教材観】言語や文化の違いから人々が快適に安心した生活を送ることを難しくさせてしまうような問題は、日本で生活する我々の周りにも存在する。多文化共生社会の実現を目指すにあたり、そのような問題の存在に気づくだけでなく、具体的にどのような問題が国内外にあるのか、どのような解決策が考えられるのか、高校生である自分たちには何ができるのかについて考え、２年次の探究活動のテーマ設定への準備の機会となる教材である。

【生徒観】本校国際人間科の生徒たちは、入学前から英語をはじめとする外国語や異文化への高い関心をもち、言語習得や異文化との出会いに楽しんで取り組んでいる。今回の授業実践前もその高い関心を維持している（アンケート調査より）一方で、本学科の特色である国際交流に関する活動が COVID-19 感染拡大の影響を受け、軒並み中止・縮小を余儀なくされ、生徒たちの学びの原動力が失われつつあった。多様な文化への関心を刺激し、地球規模で活躍することを志す生徒たちの動機づけとなる機会の提供が求められる。

【指導観】普段の授業（特に外国語科の授業）でもディスカッション等複数の生徒での活動に取り組んでおり、他者との協働になじみのある生徒たちだが、今回の実践を通して、改めて他者から新たな学びが得られるとともに、自分自身も他者に影響を与えている存在なのだと気づかせ、自己肯定感の向上につなげたい。また、言語や文化の違いから生じる問題について考えさせるとともに、JICA 関西訪問によって学校内だけでは学べ

	ない海外の事例についても触れることで、生徒の国際的な課題への高い関心の維持・向上につなげたい。 【設定時に想定された生徒の変容】 今回の授業実践のみで生徒たちの意識が大きく変容することは想定されず、普段の授業や日頃の学校生活、本学科の特色ある数々の取り組みなど様々な要因の影響を受けて生徒たちの学びは促されていく。しかしながら、本実践では普段の授業では考えることのない言語や文化をテーマとし、その違いから生じる問題への意識づけや他者との協働、ディスカッションでの表現力などにおける成長が期待される。

【4】展開計画（全５時間）

※全体の総時間数や「本時」の記入場所は適宜変更して下さい。

※活動・内容の部分は具体的に記載下さい。適宜写真を添付下さい。

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 本時	Discussion 1（JICA 関西訪問事前学習①） ●言語や文化の違いから生じる問題の存在に気づく ●１つの題材から多様な見方ができることに気づき、多様な価値観を受容する態度を養う	◆外国語で書かれた２種類の薬品（頭痛薬と農薬）の画像を比較し、頭が痛い時にはどちらを飲めばよいかを考える ◆「日本語や英語が通じない地で生活しなければならないとしたら、どのようなことに困るだろうか」というテーマで意見交換し、その解決策を考える	・PPT スライド ・ワークシート ・iPad（ロイロノート）
2	Discussion 2（JICA 関西訪問事前学習②） ●ブラジルについて情報収集する ●限られた時間内で自分の調べてきたことと意見を的確に伝える表現力を培う	◆５名のグループに分かれ、JICA 関西訪問に際して話を伺う講師の方がかつて派遣されていた国であるブラジルに関する情報（政治、経済、観光、移民、教育など）ついて各生徒にテーマが与えられ、事前にその情報を集めておく ◆各生徒がグループ内で調べてきた情報や意見を伝えるとともに、他の生徒はその発表に関して自由に質問をしながら理解を深め、疑問点は JICA 関西訪問時に解決する	・PPT スライド ・ワークシート ・iPad（ロイロノート） ・生徒が事前に調べてきてきたブラジルについての情報
3	JICA 関西訪問 ●JICA の活動内容を知る ●開発途上国の課題について考える ●国内外における課題の解決のために自分たちができ	◆JICA の取り組みや SDGs について学ぶ ◆マラウイ・ブラジルへ派遣されていた方々のお話を聞いたり、それらの国々に関する解決すべき課題についての質問をしたりしながら、開発途上国における課題についての理解を深める	・これまでに使用してきたワークシート ・JICA 関西が用意したワークシート

	ることを考える	◆JICA 海外協力隊の取り組みについて学び、自分たちができることについて考える	
4	Discussion 3 （JICA 関西訪問事後学習） ●マラウイやブラジルなどの開発途上国における諸問題に気づき、その中には自分自身の生活とつながっているものがあることを理解する	◆JICA 関西訪問時に各自が考えた、マラウイにおける課題を解決するためのプロジェクト案をグループで共有する ◆JICA 関西訪問を終えて、新たな疑問やこれから考えていきたいこと、身の回りにある言語や文化の違いから生じる解決すべき問題について考える	・JICA 関西訪問時に使用したワークシート ・iPad（ロイロノート）
5	●日本の大学で学ぶ留学生との交流を通じて、新たな視点から	◆日本語（and/or　英語）でお互いの国についての情報を共有する ◆生徒たちが海外で生活する際や、留学生が日本で生活する際に困ることを想像し、その原因や解決策について考える	・iPad（テレビ会議）

【5】本時の展開

※過程の網掛け部分は適宜変更下さい。

※詳細に記載ください。

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 （10 分）	1. 単元の目標とスケジュールを共有する	○この単元を通じて身につけて欲しい能力について意識させ、主体的に活動に取り組む雰囲気づくりを促す	・PPT スライド ・ワークシート
	2. ロイロノートの使用方法の確認 及び JICA の取り組みについて知る	○今後の活動のために、ロイロノートで Web 検索をする方法や意見をカードに書いて提出する方法を確認する ○JICA に関する情報は、JICA 関西訪問時に詳しく学ぶため、ここでは詳細な情報の共有はせず、生徒の動機づけのために簡単に HP を閲覧するだけにとどめる	・iPad（ロイロノート） ・JICA の HP から「JICA at a Glance 一目でわかる JICA」のページ

展開 （30 分）	3. Discussion① ・２つの薬瓶の画像から正しく頭痛薬を選ぶために必要なことは何かを考える ・個人で考えたことをロイロノートに記録・提出し、グループで共有する ・ロイロノートで提出した意見のカードを他の生徒と共有しながら、理由や根拠についても考える 4. Discussion② ・「日本語や英語が通じない地で生活しなければならないとしたら、どのようなことに困るだろうか」というテーマで意見交換し、その解決策を考える	○頭痛薬を選ぶために必要な能力（英語や化学に関する知識など）だけでなく、状況や場面（購入時や周囲の人々など）に関する視点にも話が広がるように、生徒の多様な意見を肯定的に評価することで、多角的に物事を見る姿勢を促す ○薬瓶の画像はあえてプロジェクターでスクリーンに投影し、見やすい生徒と見えにくい生徒が生じる環境を作ることで、情報へのアクセスのしやすさの差も要因の１つだと気づかせる ○Discussion①で考えたことを一般化して言語や文化の違いから生じる問題について考えさせるため、Discussion①で共有した意見を示しながら、生徒間のやりとりを促す	・２つの薬瓶（頭痛薬と農薬）の画像（瓶のラベルは英語で書かれており、専門的な用語も使用されている）
まとめ （10 分）	5. Feedback ・この授業の目標をどのくらい達成できたかを振り返る ・考えたこと、これからも考えたいこと、友だちから学んだことなどを自由記述形式で記録する 6. 今後のスケジュールの確認	○今後の学びに活かせるよう、些細な気づきでも記録に残すように伝える ○生徒からの多様な意見、意見の伝え方など、この授業での生徒たちの評価すべき姿勢を具体的に伝え、生徒たちの自己肯定感の向上につなげる	・ワークシート

【授業実践の様子】

①授業風景１（事前学習）

②授業風景２（事後学習）

③JICA 関西訪問

【6】本時の振返り

本時では２つのテーマの Discussion を中心に行ったが、グループ内での Discussion が想定以上に盛り上がり、クラス全体の共有に十分な時間を割くことができなかった。展開１では、言語や文化の違いが生命に関わるという具体的な事例を扱い、生徒たちの多角的に物事を見る姿勢を心がけるきっかけにすることができた。展開２では、クラス全体での共有や教師からのコメントができなかったが、JICA 関西訪問後の授業で改めて取り組んだ。全体を通して、生徒たちの前向きに取り組む姿勢が見られ、一人ひとりから積極的な自己表現がなされることで、常にいきいきとした雰囲気の中で授業を進めることができた。本時の授業は２年次に取り組む課題研究に向けた導入の一つと位置づけられ、生徒たちの身の回りの出来事における問題に意識を向ける機会の提供ができたと評価できるが、言語だけでなく、環境や宗教など別のテーマの事例を扱うなど、今後も教材研究を続けて授業改善に努めたい。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

単元を通して、生徒の海外の文化への強い関心が感じられた。生徒のコメントにも「以前から自分は世界の問題に理解があると思っていた」というコメントは散見されたが、「実際は知らないことばかりだということに気づくことができた」など、新たな気づきもよく見られたことは大きな収穫であった。以下に生徒の実際のコメントやアンケート調査の結果の一部を記載する。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

（ワークシートより　生徒の感想）

・自分で調べるだけでなく、友だちから話を聞くことで、新しいことをたくさん学べた。

・ディスカッションで、普段あまり考えたことのないことを考えられ、自分にもできることについても考えた。

・限られた時間で自分の言葉で説明することが難しいと感じた。自分の言葉で自分の意見をうまく表現できるようになりたい。

・友だちの発表から、うまく人に伝える方法を学んだ。

・自分の意見や考えを言葉にして相手に伝える力がついてきたと感じる。

（授業アンケートより）

・友だちと Discussion することで、自分だけでは得られない学びがあると実感した

→ よくあてはまる：95%　まああてはまる：５%

・友だちと Discussion する中で、自分と違う考えがあっても、それを受け入れることや、互いの多様な考え方を尊重することの大切さを実感した

→ よくあてはまる：97%　まああてはまる：３%

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】

（授業アンケートより一部抜粋）

・（授業前）私たちの身の回りにある、言語や文化の違いから生じる問題について考えたことがあるか
　↓　　よくあてはまる＋まああてはまる：68%　あまりあてはまらない：32%
（授業後）言語や文化の違いから生じる問題についてよく考えるようになった
　　よくあてはまる＋まああてはまる：95%　以前と同じくらい：５%

・（授業前）言語や文化の違いから生じる問題の解決策について考えることがあるか
　↓　　よくあてはまる＋まああてはまる：60%　あまり/全くあてはまらない：40%
（授業後）以前に比べて、言語や文化の違いから生じる問題を解決するために
　　何らかのアクションを起こそうと考えるようになった
　　よくあてはまる＋まああてはまる：95%　以前と同じくらい：５%

（ワークシートより　授業後の生徒のコメント）

・世界にはまだまだ知らないことだらけだと感じた。もっと世界に目を向けて知識を得ていきたい。

・言語や文化の違いが、思っているよりも生活に影響があることに気づいた。 外国の問題であっても、自分事として考えていきたい。

・外国と日本の文化や言葉、ライフスタイルの違いや問題について考え、自分たちとのつながりを感じるようになった。

・JICA 訪問で知ったマラウイやブラジルに限らず、世界のいろんな国の文化をたくさん知りたいし、私からできるようなことは率先してやりたい。当たり前が当たり前でないことがよくわかったし、私の生活も外国の生活も大切にしたい。

・今まで私は世界の問題や他国の文化に十分理解があると思っていたが、全然知らないことばかりで、私たちの将来に関わる問題があることを知った。その問題への対策について考え、それを実行するのは私たちだと気づくこともできた。

【8】自己評価

1. 苦労した点	今回の私自身の研修で学ばせていただいたことを授業実践に活かすことに苦労した。今回の授業実践は私が普段担当する学年ではないクラスで行ったため、十分な時間が確保できず、生徒たちには事例をたくさん提示することができなかったことが大きな反省点である。COVID-19 感染拡大に伴う緊急事態宣言発令により学校行事などの教育活動が計画通りに進まない中での授業計画・実践だったこともあるが、十分な計画を立てるべきだったと反省する。しかしながら、毎年参加する JICA 関西訪問が今年度も実施できたおかげで、生徒に具体的な事例から世界の問題について考えるきっかけを与えることができた。私が得た知識をより多く生徒たちに直接伝え、生徒たち自身が考える機会を提供できるよう改善していきたい。
2. 改善点	２学期の授業実践では十分な事例を授業では提示できなかったが、３学期以降にもオンラインでの国際交流などの活動が予定されているので、それらをうまく繋げながら、いろんな国・地域の事情について触れさせて、２年次の探究活動に移行したい。また、今回は総合的な探究の時間の中での実施だったが、外国語科の授業にも取り入れられるよう、英語での教材作成にも取り組んでいきたい。

3. 成果が出た点	例年本校の生徒は１年次に JICA 関西を訪問しており、そこでの学びは生徒たちにとって楽しみなイベントの一つである。一方で、そこで得た経験は別の教育活動と目に見える形で繋げる機会を設定することが難しかった。今回は JICA 関西訪問だけでなく本校の複数の国際交流活動を関連づけることで、生徒たちの学びをより豊かにする可能性を見出すことができた。今回の授業実践は私が普段授業を担当しない学年の生徒を対象に行ったので少し不安があったが、HR 担任の教員にも入ってもらいながら授業を行い、HR 担任の教員も普段なかなか見ることがないような生徒の活発な面を引き出すことができたことは成果の一つである。
4. 備考（授業者による自由記述）	海外での研修や留学生との交流などの国際交流活動が盛んな本校で勤務してきたが、「直に」「肌で感じる」「直接的な」経験を通じて得られる学びに固執してしまっていた自分に気づかされた。国内外を自由に移動することが難しい現在、以前のような国際交流活動を通じての学びができないことを言い訳に、生徒たちを目の前にしながら何もしないことは許されない。今回の研修では、国内にいながらも学べる内容も手段も無数にあることに気づくことができた。得られた知見は、本報告書に記載していない別の教科や学年での授業にも取り入れられつつある。今後もどのような場面においても、SDGs や多文化共生社会の実現を志向する視点をもって、教材研究に励み、これから出会う生徒に還元していきたい。

参考資料：

・『JICA at a Glance　一目でわかる JICA』（JICA）
https://www.jica.go.jp/about/at_a_glance/index.html
・『読解力と表現力を高める SDGs 英語長文』竹下厚志（三省堂）
・『国際理解教育実践資料集』（JICA 地球ひろば）
・『私たちが目指す世界』（Save the Children 他）
・『earth music&ecology2019 年春新 CM「エシカルへ」篇』（ストライプインターナショナル）
https://www.stripe-intl.com/news/2019/0227-01/
・『The 2 Euro T-Shirt - A Social Experiment』（Fashion Revolution）
https://youtu.be/KfANs2y_frk

SDGs 探究

氏名: 峯川　昇二　　学校名:　奈良県立法隆寺国際高等学校
担当教科: 外国語(英語)　　実践教科:　創生(総合的な探求の時間)
時間数: 7 時間　　対象学年: 3 年　　人数: 38 人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）:

SDGsについてその概要を正しく理解するとともに、これから自分たちが生きていく世界の10年後、20年後について考え、高校生である自分たちにできることはなにかを模索する。また、他者の立場になって考えることを意識し、身近にある困りごとについて気づき、対処することができるようになる。

【2】単元の評価規準例	（ア）知識・技能	・SDGs についてその１７の目標や採択されるまでの経緯について理解している。 ・各クラスで設定された目標について、現状や課題、解決に向けた取り組みについて理解している。 ・SDGs の達成に向けて必要な情報を適切に集めることができる。
	（イ）思考・判断・表現	・調べた情報を他の情報と結び付け、比較することで推移などについて考察することができる。 ・調べた情報から仮説を立て、その証明のために新しく情報を調べることができる。 ・調べた情報を効果的に他者に伝えることができる。 ・他者のおかれている状況を正しく認識し、他者の視点に立って物事を考えることができる。
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	・課題解決に向け、主体的に情報を集め、クラスメイトと協力しながら、「私たちにできること」について考えている。
【3】単元設定の理由 ✓ 児童/生徒観 ✓ 教材観 ✓ 指導観 ✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容	本校には総合英語科があることから毎年渡日生や帰国生が在籍しており、様々なバックグラウンドをもった生徒同士の交流が行われている。取り出し授業や日本語の授業、コミュニティーを活用した進路指導セミナーなど学校として日本語教育やキャリア指導をサポートする体制を整えてはいるが、学級内での普段の生活などでは生徒間の支援が大きな役割を担っていることから、渡日生や帰国生への適切な支援について外国での生活を体験することを通して知る機会を設けるため。 また、第 3 学年では創生（総合的な探究の時間）の授業で SDGs について調べ、本クラスでは目標４「質の高い教育をみんなに」について調べた。その中で日本での就学率が比較的高い水準にあることを学んだが、学校に通うことと、十分な教育を受けられているかどうかは別であり、学校に通うことのできる全ての生徒が十分な教育を受けられるようにできることはないかについて、考える機会を設けるため。	

【4】展開計画（全７時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	・SDGs 概要理解 ・課題発見	・SDGs の概要（その理念や採択までの経緯、17 の目標について）について書かれた資料を読む。 ・17 の目標に関するクイズに答え、世界の状況について自分の理解度を知り、同時に情報を取り入れる。 ・フォトランゲージを用いて、北極やマイクロプラスチック、児童労働などの写真を見て気づくことをペアで共有する。	自作教材
2	・グループの作成 ・研究課題の設定	・６人程度の６つのグループを作る。 ・各班が、目標４「質の高い教育をみんなに」に関する６つの課題について模索する ⇒出てきた６つの課題 1. 質の高い教育とは？教育先進国の事例 2. 質の改善が必要な教育とは？事例 3. 「みんなに」の実現度は？ 4. 教育と生活の関係性 5. 日本の目標達成のへの取り組み事例 6. 世界規模の目標達成への取り組み事例	なし
3・4	・各班の調べた内容について情報を収集する ・中間報告を行う	・各班、インターネットや著書から情報を収集する。 ・集めた情報を結び付け、比較、考察を行う。 ・集めた情報から仮説を立て、立証に向けて再度情報を収集する。	インターネット
5 本時	・日本の就学率 99%の実態について知る ・「外国に住んでみる」を体験する ・在日外国人の方と私たちの生活について知る ・私たちにできることを模索する	・パワーポイントを活用した体験学習 ・グループでの考えの共有	外国に住んでみる（パワーポイント）
6	・それぞれの課題について情報を共有する ・「私たちにできること」について考える	・各班、クラス内での発表	生徒自作資料
7	・各クラス（７クラス）が調べたそれぞれの目標について見識を深める。	・各クラスが調べた目標について、発表する	生徒自作資料

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (3 分)	［問いかけ］ ・日本の就学率 99%は高い？ ・就学率が高い＝全員が十分な教育を受けられている？	 一つの情報だけで判断せず、常に比較し現状と課題を正しく認識できるよう促す。 身の回りの情報を全てそのまま受け入れるのでなく、あくまで自分の目で確認することの必要性を考える。	パワーポイント資料
展開 (41 分)	☆体験型学習「海外に住む」 ※放送や表示を見慣れない言語で行い、言葉が通じない中での生活を体験する ・言葉の通じない海外に移り住むことに！ ・自分もこの国のことを知らないし、その国の人も日本について知らない。 ・一人でいるときに緊急放送「選択」 １．どっちに逃げる？ ２．どっちを飲む？ ３．どれをもらう？ ☆意見交流・発表 ・班に分かれて次の議題について話し合う。意見を付箋に書き、Ａ３の用紙に張り付ける。 1. 体験中どのようなきもちになったか 2. もし周り（学校）に、同じように言語がわから	読みや聞くだけのインプットではなく、できる限り体験的にその状況になるよう工夫する。（以下具体） 具体１．実際に馴染みのない教室風景を示す。 具体２．緊急速報で使われる警報を鳴らし緊迫感を演出する。 具体３．状況カードを利用し、ケガをした状況やもらったアイテムをわかりやすくする。 具体４．実際にミネラルウォーターと経口補水液を利用し、何かわからないものを口にする恐怖感を感じやすくする。 １．の質問には、不安や恐怖だけで終わるのではなく、周りに何を求めるかや、こんな制度であればいいのについてまで考えるよう促す。	

	ず困っているクラスメイトがいたら何をするか 3. もし周り（社会）に、言語がわからず困ってる人がいたらどのような支援ができるか。 ・各班の代表が発表をする。	２．の質問については、体験前でも想像できる支援ではなく、実際にその状況で自分が求めていた支援について考える。	
まとめ （1 分）	知識として知っているだけで終わらすではなく、実際にアクションを起こすことが大切であることを抑えて授業を終える。		

【授業実践の様子】（本時での写真を添付し、キャプションをつけて下さい）

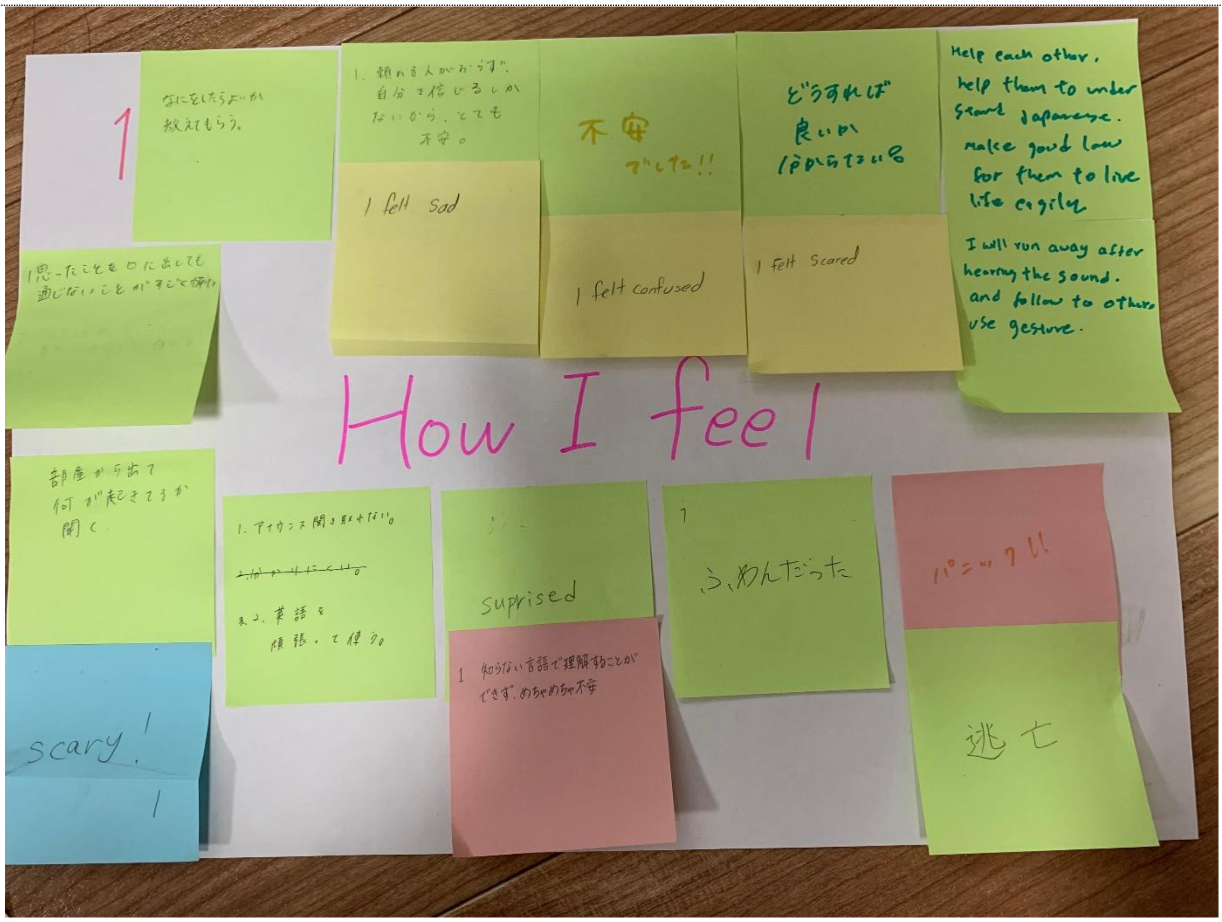
体験学習の概要説明

不安そうに水を口にする

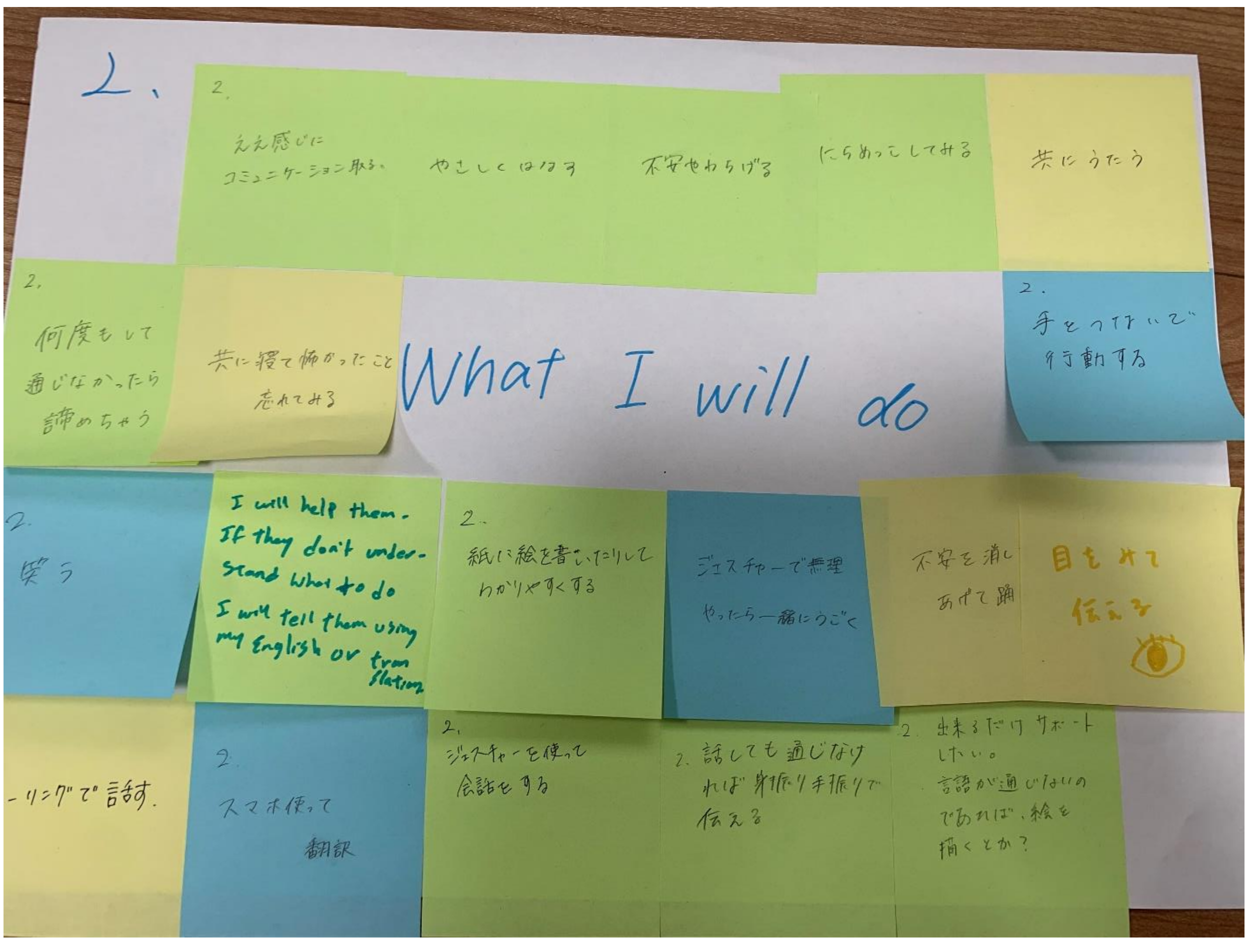
意見交換

意見交換２

意見発表


How I feel
1
なにをしたらよいか教えてもらう。
1. 頼れる人がおらず、自分を信じるしかないから、とても不安。
I felt sad
不安でした!!
I felt confused
どうすれば良いか分からない
I felt scared
Help each other, help them to understand Japanese. make good law for them to live easily
I will run away after hearing the sound. and follow to others use gesture.
部屋から出て何が起きてるか聞く。
suprised
ふあんだった
パニック!!
1 知らない言語で理解することができず、めちゃめちゃ不安
scary!
逃亡

意見交換


2.
What I will do
ええ感じにコミュニケーション取る。
やさしくはなす
不安をやわらげる
にらめっこしてみる
共にうたう
何度もして通じなかったら諦めちゃう
共に寝て怖かったこと忘れてみる
手をつないで行動する
笑う
I will help them. If they don't understand what to do I will tell them using my English or translation
紙に絵を書いたりしてわかりやすくする
ジェスチャーで無理やったら一緒にうごく
目をみて伝える
スマホ使って翻訳
ジェスチャーを使って会話をする
話しても通じなければ身振り手振りで伝える
出来るだけサポートしたい。言語が通じないのであれば、絵を描くとか?

【6】本時の振返り

教材については数点改善する必要もあるが、体験的に学習するのに適していた。しかしながら、事前事後学習および学習の雰囲気作りが十分ではなく、中にはめあてに届かずただ体験して終わったと感じているように向けられる生徒もいた。今回体験した内容のように困った経験がある、もしくは困っている人が存在し、自分たちでも支援ができるということをより深く理解してもらうために、事前もしくは事後に実例などを示すのも効果的だったかもしれない。しかしながら、今回の授業は多くの生徒にとって印象的なものであり、その後行動の変化も多くみられた生徒も多くいた。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

・聞いたことのない言葉はとても怖かった。英語や中国語は普段から聞くことがあったから、口調でなんとなく状況が理解できるとおもっていたけど、今日の言葉は全く何もわからなくて知らないことがまだまだあったことに気づけた。言葉がわからない人がいたら、一緒に行動するだけでも役立てるのかなと思った。

・小学生の頃、言葉のわからない環境で生活していたことを思い出した。緊急事態ではなかったけど、先生や周りのひとの言っていることが何もわからず、本当に孤独だった。１か月間という期限が決まっていて、学校にはほかにも同じようなプログラムで来ている人もいたから教室の外では不安はなかったけど、それもなかったら今日みたいな気持ちになっていたかもしれない

・普段から〇〇さん（帰国生）と一緒にいるけど、自分が想像していたよりも不安な気持ちがあったのかもと気づけた。学校にいるときは一緒だけど、行きや帰り、移動教室のときなどもっとできることがあったかもと思った。

・（帰国生）中学生の時に日本に来た時はこんな感じだった。高校みたいに周りにこんなに帰国生の人もいないし、友達も英語を話せないから不安だった。それでもずっと一緒にいてくれる人もいたからその人のまねをしたり、ついていったりしたらなんとかなっていた。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

　これまで帰国生や渡日生に対して支援を行っていた生徒も、これまで以上に想像力を膨らませ、本当の困りごとに対処できるよう工夫したいという意見がでていた。また、これまで積極的な交流がなかった生徒においても、学級活動における発言の中で帰国生等への配慮（理解しやすい言葉遣いなど）が見られるようになった。中には、学級だけでなく社会の在日外国人の方の不安や困りごとに興味関心を持つ生徒も出てきた。

　また、今回の授業を経て海外に行くことに不安を感じた生徒がいる一方で、「違い」に興味をもちもっと多くの違いに触れたいと海外進出に意欲的になった生徒がいた。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】

（授業前）

メディアを通して世界には不安定な生活を送っている人や、環境破壊などが存在するのは知っているが、遠い場所で起こっていることであり、私たちにできることはない。もしくはしてもほとんど意味がないというような感覚を持っている生徒が多くいた。

（授業後）

世界の教育に関するこれまでの歴史や現状について理解し、教育が生活にどれほどの影響を与えているのかに気づいた。また、困っている人間は身近にいて、自分の支援がその人たちにとって意味のあるものであることに気づいた生徒が一定数でてきた。

【8】自己評価

1. 苦労した点	最も留意したのは、今回の学習が講義形式になり知識だけを取り入れ、行動への動機づけには繋がらないという結果にならないよう、あくまで普段の生活との関わりを深くなるようにしたこと。SDGs の学習において、日本では比較的それぞれの課題が見えづらい、もしくは生徒の私生活には直結していないことが多いので、自分には関係がないから知らなくてよいという考えにならないよう気を付けた。
2. 改善点	今回は緊迫感を感じやすいよう学校における緊急事態を想定した内容にしたが、より日常的なものを取り入れた内容も効果的である可能性がある。また、４５分の授業では時間が十分ではなく、意見交換に十分に時間をとることができなかった。各班を周りより多くの問いかけをすることで学習を深められたかもしれない。
3. 成果が出た点	生徒からのフィードバックを見ると、世界の教育事情いついて理解するとともに、自分たちが普段何気なく受けている教育についても振り返って考えることができた様子である。また、自分だけでなく周りの人（今回は帰国生に絞られていたが）への配慮についても、自分の経験だけを頼りに支援するのではなく、相手の立場になることの重要性やその難しさについても学ぶことができた様子である。
4. 備考（授業者による自由記述）	下記にある Glocal net Shiga 様が提供してくださった教材は大変扱いやすく、体験型学習において効果的な教材であった。この教材をよりよく使用するためには授業の雰囲気づくりと、事前事後学習が重要であり、今回私の行った授業ではその部分は不足していた。渡日生や帰国生は日本全国に多く存在することを考えるとこの題材における学習は本校だけでなくより多くの学校で実施されることが望ましく、知識のインプットにとどまらず、気づいた内容を行動に移すような動機づけをより多く取り入れることで、環境の変化につながることを期待したい。

添付資料：

- 別途パワーポイント提出

参考資料：

- 「言葉がわからない」体験ゲーム　何が起こった？（震災編）(公財)滋賀県国際交流協会 国際教育研究会　Glocal net Shiga
- 出入力在留管理庁「令和２年６月末現在における在留外国人数について」
  （パワーポイントにあるデータの参照）
  https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04_00018.html#:~:text=%E4%BB%A4%E5%92%8C%EF%BC%92%E5%B9%B4%EF%BC%96%E6%9C%88%E6%9C%AB%E7%8F%BE%E5%9C%A8%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E4%B8%AD%E9%95%B7%E6%9C%9F,%EF%BC%96%EF%BC%85%EF%BC%89%E6%B8%9B%E5%B0%91%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82

Living in a foreign country??

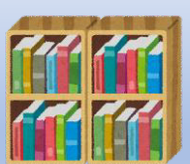
Please imagine…

You were born and brought up in Japan. You can speak Japanese perfectly and English a little. Because of your parents' work, it is decided that you will move to another country which you don't know anything about with your family.

?

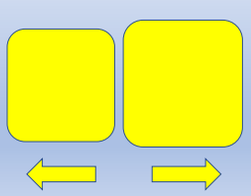
A week after you arrive in the new country, you go to school for the first time. A teacher introduced you to your new classmates and told them that you came from Japan. However, nobody knows anything about Japan and you cannot understand their language at all.

When you are in the school library alone, you suddenly hear this…



In a few seconds, an earthquake happens, and you realize that it was an earthquake alert.

You get out from the library right away and try to go outside. On the way out, you see two signs in front of you.



CHOICE 1

Percorso di evacuazione

Pericoloso! Divieto di ingresso

CHOICE 1

Evacuation Route

Danger! No Entry

Percorso di evacuazione

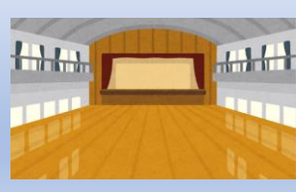
You safely got out…

Pericoloso! Divieto di ingresso

You had to walk on the dangerous path… And you hurt your foot….

You went to the school gym for evacuation.

After two hours…
You were getting thirsty.
Then you heard an announcement.



CHOICE 2

When you follow other people, you saw them receive two kinds of bottles. Which one do you drink?

Drikker vand

Genvundet vand

We are providing you with two kinds of water. One is drinking water and the other is non-drinking water. Don't drink the second one.

Drinking Water

Non-Drinking Water

If you choose

Drikker vand

If you choose

Genvundet vand

You hear the next announcement.

Bộ sạc

Mũ sắt của lính

cái mền

Dụng cụ y tế

You hear the next announcement.

Charger

Helmet

Blanket

Medical Supplies

Can you imagine what life would be like without comprehensible language?

Group Discussion

1. How did you feel while imaging the scenario?
2. What will you do if you see a foreign student who doesn't speak Japanese?

在日外国人の方の人口を知っていますか？

ヒント！
奈良の人口・・・１３１万人（令和３年11月１日）

~~A.　６７万人~~

~~B.　１７９万人~~

C.　２８８万人

令和２年６月末

We have many foreigners living in Japan, who contribute to Japanese society.

But… do you think we can return the favor? Have we been able to make a comfortable environment for them?

日本の義務教育の就学率・・・９９．９６％

文部科学統計要覧（平成30年度）参照

ほぼ全員が就学できている状態

ほぼ全員が十分に[illegible]受けられている

Group Discussion

3. What should we do to help all people who don’t speak Japanese? (in society)

「ある日の昼ごはん」を見て話そう

～大学の留学生と中学生とのオンライン交流授業～

氏名:　　上田　安希子　　学校名:　京都教育大学

担当教科:　日本語アカデミックスキル　　実践教科:　日本語アカデミックスキル

時間数:　3 時間　　対象学年:　留学生・中 1・中 2・中 3

人数:留学生 14 名（タイ4・韓国2・ウクライナ 2・中国1・ウズベキスタン 1・トルコ1・ブラジル 1・ポーランド1）

大阪市立玉津中学校　1 年生 5 名・2 年生 6 名・3 年生 7 名

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

留学生側：

①日本の中学生たちとオンラインで直接話すことにより、リアルな「日本」を知る

②日本の中学生に向けて自国のことを伝える

③日本語が伝わる・理解できる楽しさを味わい今後の学習につなげる

④「ある日の昼ごはん」を題材に各国の食の事情を知り、さまざまな食文化を知る

中学生側：

①留学生たちとオンラインで直接話すことにより、リアルな「海外事情」を知る

②留学生たちに向けて日本のことを伝える（わかりやすく伝える、伝わる楽しさを知る）

③日本以外の国のことに関心をもつきっかけとする

④「ある日の昼ごはん」を題材に諸外国の食の事情に関心を持ち、さまざまな食文化について考えるきっかけとする

【2】 単元の評価 規準例	（ア）知識・技能	留学生側： ・中学生との対話を通して日本を理解することができる ・日本語を使って自国のことを発信し伝えることができる 中学生側： ・留学生との対話を通して諸外国のことを知ることができる ・日本語を使って自分や日本のことを伝えることができる
	（イ）思考・判断・表現	留学生側： ・日本にさらに興味を持ち、違いを受け入れ、自分の考えなどを伝えることができる 中学生側： ・諸外国の事情に関心を持ち、違いを受け入れ、自分の考えなどを伝えることができる
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	留学生側： ・学習言語である日本語を積極的に使い、日本をより知ろうという意欲を養う 中学生側： ・諸外国の事情を聞き、知りたいと思ったことを積極的に聞く、調べる意欲を養う

【3】 単元設定の理由	今年度、新型コロナウィルスの感染拡大を受け、留学生がなかなか来日できず、オンライン留学、つまり国から接続して授業を受けているという状況が続いている。そんな中、留学生たちが、教師とのやり取りや文献・インターネットから得られる情報だけでなく、直接日本を知り、体験できる方法はないかと考えていた。一方、教師研修に参加していた教員たちの学校現場でも、自粛が長引き、海外旅行などもままならない中、生徒たちに「多文化」に触れさせる機会があまり得られないということも耳にした。そこで、来日できない留学生と日本にいる小中高の児童・生徒たちをオンラインで交流させることが実現できないかと考えたのがこの授業を考案した動機である。そんな中、大阪市立玉津中学校の中学生 18 名と、放課後の時間を使って交流をさせていただく機会を得た。 本学の今学期の日本語アカデミックスキルの留学生たちは日本語レベルは中級から上級で、日本についての知識もそれぞれにかなりある。ただ、それがやはりインターネットを通した情報から得ている日本文化のイメージに偏っているところは否めず、生の日本人と触れ合うことで、本当の意味での多文化を知るきっかけとしてほしいと思った。 このコロナ禍での世の中の変化により、さまざまな学校現場でオンライン授業の環境が進み、オンラインでつながって世界中の人とリアルタイムに話せるということが可能になっている。この利点を生かして、その国に行かなくても、国や文化の違う人と交流することができるという現代の新しい国際交流の形を留学生、中学生のどちらにも体験してもらいたいという狙いもある。 交流のテーマとしては、中学生と大学の留学生どちらにも話しやすい「食」をとりあげ、主に普段どんな昼ごはんを食べるかという話題を通して各国の食を取り巻く事情について考えるきっかけとしてほしいと思った。

【4】展開計画（全　3　コマ）※1 コマ 90 分

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	●中学生にわかりやすい自己紹介を考える ●出身の町について簡潔にわかりやすく伝える方法を考える ●昼ごはんについて簡潔に伝わるような説明を考える	【留学生向け授業】 ・パワーポイントのスライドを使用し、1 分間自己紹介を準備する。 ・スクリプトも準備し、オンラインで中学生に伝わるかどうかという観点で語彙や表現などをよく検討して完成、練習して準備をする。 ・「ある日の昼ごはん」の写真を撮り、その食事の味、材料、作り方などを簡単に説明できるよう準備する。 【資料１】	Powerpoint スライド
2 本時	●相手に伝わりやすい自己紹介をする ●中学生の自己紹介を聞いて理解する ●中学生の昼ごはん（給食）について知る ●昼ごはんを通して、各国の食をとりまく事情について考える	【留学生・中学生交流授業】 参加者紹介、注意事項 ↓ 〈グループに分かれる〉 ①留学生の自己紹介（1 分×3～４名）＜5 分＞ ②中学生自己紹介　＜5 分＞ ③中学生たちの昼ごはん（給食）　＜5 分＞ ④留学生たちの昼ごはん ⑤「昼ごはん」について質問タイム・自由に話す　＜25 分＞	PC、スピーカー Microsoft Teams Powerpoint スライド （給食の写真、昼ごはんの写真なども入れたもの）

	●対話を通して、日本とさまざまな国に対する理解を深める	⑥（時間が余ったら）自由テーマで質問タイム ↓ 〈全体に戻り〉 ⑦まとめ 各グループ 代表者（留学生・中学生）からのひと言　＜10 分＞ ↓ 終わりのあいさつ	
3	●活動を振り返り、学んだことを整理する ●クラスメートと、交流の間に話したこと、感じたことなどを共有し、話し合う ●中学生にお礼の手紙を書くことで、交流の感想を伝える	【留学生向け授業】 ・グループ内で、どんな話をしたか、そのときどう思ったかなどを共有し、話し合う。 ・生じた疑問などについても話し合う。 ・ワークシートに、活動の振り返りを記入する。 ・パワーポイントのスライド 1 枚に、中学生へのお礼のメッセージをまとめ、自国のあいさつを入れる	Microsoft Teams 振り返りワークシート Powerpoint スライド

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 （10分）	○あいさつ、参加者の紹介 交流の流れ説明、注意事項の確認 ○グループに分かれる （中学生のグループ２・３・４は別教室に移動、留学生はブレイクアウトルーム機能で４つのグループに振り分ける）	・交流に参加してくれた玉津中の中学生と教員のみなさんが、どんな国のどんな留学生と交流するかわかるように、名前を呼んで、返事をしてもらう ・交流の流れがわかるようにスライドで説明する	・PC （オンライン会議ツールとしてはMicrosoft Teamsを使用） ・Powerpoint スライド　【資料２】
展開 （40分）	○留学生(1グループに３～4人)から順番に１分間自己紹介（【資料１】）をする ○中学生（1グループに４人～5人）から順番に自己紹介をする ○中学生から給食の写真（【資料３】）を見せ、簡単に説明する。留学生から聞きたいことを自由に聞く ○留学生から、一人ずつ順に「私のある日の昼ごはん」（【資料４】）の写真を見せて、簡単に説明する。中学生から聞きたいことを自由に聞く。 ○全体に戻る（中学生は教室を移動、留学生はブレイクアウトルームを終了）	・４つのグループを順次まわり、交流がスムーズにいっているか確認する（映像、音声の状態も安定しているか確認） ・対話が途絶えていたり、意思疎通がうまくいっていないグループがあれば、支援する	・Powerpoint スライド 【資料１】 【資料３】 【資料４】
まとめ （10分）	○各グループ代表から、感想を一言ずつ言う（留学生・中学生） ○終わりのあいさつ		

【授業実践の様子】（本時での写真を添し、キャプションをつけて下さい）

【資料１】留学生が作成した１分間スライドの例

【資料２】活動の流れの説明用スライド

【資料３】玉津中学校の給食

【資料４】留学生の「わたしのある日の昼ごはん」の例

【資料５】交流中の様子（全体）

【資料６】交流中の様子（グループ３）

【資料７】交流中の様子（グループ４）

【6】本時の振返り

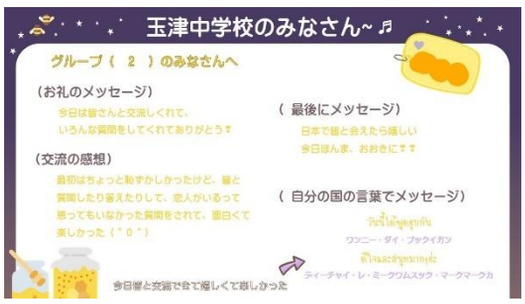
玉津中学校のみなさんにあいさつをし、玉津中学校の生徒たちがみな退出した後、休憩をはさんで、留学生のみ、再度ブレイクアウトルーム機能でグループごとに分かれ、振り返りを行った。グループの中で、活動がどうだったか、どんな話があったかなどを共有した。

全体に戻り、グループごとに報告してもらうと、「本当に楽しかった」「中学生たちがとても元気でおもしろかった」という感想がほとんどだった。楽しかったという感想ばかりでなく、短い交流であったにも関わらず、学生たちは同じグループで話した中学生たちにとても親近感を持ち、また彼らが着ている制服や、給食、教えてもらった大阪のおすすめの場所、大阪の言葉についてなどとても興味を持った

ようだった。

特に、給食については、「コッペパン」という言葉がうまく聞き取れなかったようで、給食のメニューにあったパンの名前について話していたグループが多かった。また、写真に写っていた牛乳についても、「どんなメニューにもかならず牛乳がついていていつも一緒に飲む」と中学生たちから聞き、「ごはんと牛乳は合わないと思う」と、驚いていた。給食については「初めて見て、おいしそうだと思った」というコメントや、自国の給食などと比べた感想が多くみられ、それぞれに関心を深めたようだった。

その後、それぞれワークシートに感想や気づいたことを記入してもらった。また、交流に参加してくれた中学生たちにお礼の気持ちを表すため、メッセージカード（Powerpoint スライド１枚）を書いてもらった。留学生たちの言語に関心を持ってもらうきっかけになればと思い、メッセージの最後に、自分の国の言葉でひと言あいさつ（読み方・日本語での意味も併記）を添えるよう促した。



【資料８】留学生が作成したお礼のカードの例

【7】単元を通した学生の反応/変化

＜留学生側の反応＞

以下に挙げたものは、振り返りシートに書かれた感想（活動全体を通して）の一部である。※原文ママ

・生徒たちが本当に明るくて元気だと思ったし、何よりも幼い生徒たちであるにもかかわらず、非常に礼儀正しいという感じがしてすごいと思った。

・私たちは様々なことを交流できました。交流するうちに、色々な知らなかったことを理解できるようになって、珍しい経験だったと思います。この交流は僕の忘れられないで素敵な思い出になりました。皆さんと一緒に交流できて、とても嬉しく思います。

・今まで日本の中学生と話したことがないので、いろいろなことについて話して、そういう経験がとても面白かったです。交流できてありがたいと思います。

・中学生たちが最初から僕達と仲良くしてくれて、僕達と僕達の国の文化について興味を持って、コミュニケーションをちゃんとするような努力をして会話はとても自然に流れました。多分僕達留学生のほうはちょっと緊張とか不安や恥ずかしさがあって、中学生たちの優しさがとても助かりました。
それにみんながほんまに元気でにぎやかだったので僕達も盛り上がってきまして面白くて楽しい時間を過ごすことが出来ました。特にフリータイムに恋バナの話を聞かれた時でした。びっくりしましたが、初恋のアドバイスとかみんなが付き合ってるかどうかの話やタイプについて話したりして、中学生たちが先生も巻き込んで、面白いでした。みんなが爆笑して、笑顔で会話したことは多分僕にとって今日の大切な思い出になりました。

中学生に対して、「明るくて元気」「礼儀正しい」「やさしい」という印象を持っており、自分たちと「仲

良く」してくれ、自分たちの国の文化について「興味を持って」くれたことはとてもうれしかったという感想がみられた。
＜中学生側の反応＞
　中学生たちも、とても興味津々で楽しく交流に参加しており、グループも時間が足りないというほど盛り上がっていた様子であった。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

＜留学生側＞
　以下のコメントのように、留学生たちが中学生に対して、伝わるように話したり質問したりしたことは、日本語が伝わる楽しさにつながっていると同時に、さらなる学習への意欲を高めることに繋がっている。

・自己紹介したり、いろいろな質問をしたりしたのは、スムーズに話せなくても、面白くてとても楽しかったです。
・時間に合わせることに集中したため、イントネーションや発音などに注意ができなくて生徒たちが少し理解しにくかったのではないかという思いが出た。
次はもっと圧縮してもっと自分をよく表現できるように気を使わなければならないと思った。
・もうちょっと一緒に交流できたらいいのにと思うと同時に、私の準備が足りなかったのではないかと反省するようになり、日本語をもっと熱心に勉強しなければならないという決心をするようになった。
とても意味深い交流の時間だった。

＜中学生側＞
　交流後に中学生たちが自発的に書いて送ってくれたメッセージには、「海外の方と話す機会はあまりないので良い経験になった」「今回のお話で海外への興味が増えた気がする」「ぜひ（留学生の国に行ってみたいと思った）といった感想がみられ、留学生たちの話から多くの新しい知識や刺激を得て、日本以外の国に興味を持ち、行ってみたい、知りたいと思う意欲につながっていることがことがわかった。
　また、「海外の方は日本語が苦手だと思っていたけど予想以上に日本語が上手でおどろいた」「皆さんが熱心に日本語を勉強していることを知り、私も勉強を頑張ろうと思った」「日本のことを知って興味をもってくれていることがとても嬉しい」という感想もあり、留学生の頑張りや日本への関心の深さに刺激を受け、学習意欲が強まった様子もうかがえた。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】

「ある日の昼ごはん」と「給食の写真」を見て話したところで、以下のような気づきがみられた。
＜留学生側＞
・Mさんの食事のカッテージチーズは非常に興味深かった。チーズだけを食べながら一食をすませるのはとても西洋的な食事だという気がして、韓国人の私にとってはやはり食事には汁が必要ではないかという気がした。
・栄養バランスがいい給食があるのはとてもいいだと思います。
そして、きれいなプラスチックなトレーできちんと食べ物が載って、爽やかな感じです。
一つの不思議だと思った事は、中華丼、きゅうりやみかんを食べた後、牛乳を飲むことです。
私のイメージでは、これが全然牛乳と合わない食べ物ですが、日本の学校では普通らしいで、びっくりしました。
・グローバル化の世界で毎日の料理が国によってそれほど違いないと思いましたが、N さんが紹介したカオ・パンパックと S さんが紹介したカタバラトッポッキと言う料理はそれまで聞いたことがありません。美味しそうで、いつか食べてみたいです。
・ウクライナ出身の C さんが見せてくれたのは、ビートで作った「ボルシチ」というスープでした。ポーランドの「バルシチ」と同じのスープだと気づきまして、やはり、ポーランドとウクライナの料理は似ていると思いました。
＜中学生側＞
中学生たちも、「昼ごはん」の写真を見て話したことで、「日本と近い国なのに、こんなに食の違いがあってびっくりした」「食べ物がとてもおいしそうだったので、ぜひ行って食べてみたい」などと、違いに驚き、興味を持った様子がうかがえた。また、たくさん牛乳のことを聞かれたことも、自分たちが普段当たり前だと思っていることに、留学生たちが疑問を持つのだということを気づかされるきっかけとなり、給食や日本の食についてあらためて考えさせられる機会となっているようだった。

【8】自己評価

1. 苦労した点	オンラインでの交流を実現させるために、何よりもまず、オンラインの接続環境の整備が大きな課題だった。特に、交流相手の玉津中学校は大阪市の規定で Microsoft Teams しか使うことができないという事情があった。実践者も玉津中の担当教員も、学外の人と交流するための Team の作成、会議室の設定、ブレイクアウトルーム機能の使用に慣れていなかったため、2 度のオンラインでの打ち合わせを含めやり取りを多く重ねた。何度かの試行錯誤を経て、実際に玉津中側でも複数の教室に PC を用意し、さらに交流に参加させる留学生（来日できていないため国から接続）にも接続テストに協力してもらい、無事接続し、話すことができることを確認して、当日を迎えた。 大方うまくいったが、当日、残念なことに２つのグループで中学生側の PC２台のマイクのトラブルがあり、中学生側の声が留学生たちに聞こえないという状況が 20 分ほど続いたため、１つのグループでは準備してあった「昼ごはん」のテーマについて話す時間が取れず、自由な会話だけになってしまったということがあった。そのグループについては、せっかく写真を撮ってスライドにも入れて準備した写真について説明できなかったのはとても残念なことだった。 また、Microsoft Teams では、画面共有をしてプレゼンテーションをする場合、

	発表者には自分が画面共有しているスライドしか見えず、聞いてくれている人たちの反応がわからない。そのため、留学生たちが 1 分間自己紹介をしたり、昼ごはんの写真を見せて説明したりしているとき、みんなの反応が見えず、反応がよくわからなかったという声があった(実践者の知識不足でやり方を知らなかっただけかもしれないが)。Zoom などほかのツールであればこの問題は解決できたかと思うが、大阪市の場合 Teams のみという規定があったため仕方がなかった。 　また、交流の内容についてであるが、60 分という限られた時間に、14 名（8 か国）の留学生と 18 名の中学生が、まずお互いのことを知り、興味をもったことを自由に聞き合うことができるような工夫として、留学生側にあらかじめ準備させた 1 分間自己紹介に必ず出身の町の場所や特徴を簡潔に入れるようにさせたことがある。このおかげで、中学生たちは交流相手の留学生がどこからオンラインで繋いでいるのかを端的に知ることができ、スムーズに交流に入れたように思う。また、その後の会話のテーマとして、誰もが話しやすく興味を持ちやすい「食」を選んだが、できるだけ身近な自分たちの実生活に沿ったことで話してもらいたいと考え、「ある日の昼ご飯」の写真を見ながら話す、という内容にした。「昼ごはん」は身近なもので、誰にとっても興味を持ちやすく、話が盛り上がるもので、写真を使用したことも、インパクトがあり、記憶に残りやすく、効果的であった。
2. 改善点	接続テストをしっかり行ったつもりであったが、当日は思わぬトラブルが発生するものなので、もっとしっかりと当日の接続環境と同じにしてテストをしておくべきだと思った。また、万が一マイクのトラブルがあって話ができないなどのトラブルが起きた場合はどのように交流を続けるのか、どのようにして実践者に連絡を取るのかなども、留学生たちに指導しておくべきだったと思う。
3. 成果が出た点	何より、「とても楽しかった」、「なかなかできない経験ができた」、「貴重な時間だった」などという声が多く、すべての学生がこの交流を楽しんだことが最も大きな成果であったと思う。来日することができず国から接続して授業を受けているだけの現在の状況で、さらに 11 月 30 日以降海外からの入国を一時停止するという政府の発表を受けて、落胆しやる気を失いそうになっていた学生たちにとって、この活動は、何よりも大きな励みになったようだった。中学生たちから、大阪のおすすめの場所を教えてもらったり、大阪の言葉を教えてもらって、日本への関心がさらに高まり、日本に早く来たいという気持ちがより強くなったという声もあった。 　日本の中学生たちから、普段教科書やインターネットなどからは学べない日本のことを学べたり、給食や中学生が好きなものなどについて直接の感想を聞けたことで、日本のほんものの現状を知ることにつながったことと思う。たとえば日本の給食について、美味しい、栄養のバランスもよく考えられている、などということは聞いたことがあったとしても、毎日かならずどんなメニューでも牛乳が出て皆が飲んでいるということ、そしてそれに日本人のほとんどは慣れてしまっている、ということは今回交流をするまで留学生たちが知ることのなかったことである。実践者自身も、今回の交流をさせなければ、そのことに留学生のみんなが着目し、驚くとは思いもしなかったので、特に取り上げたことはなかった。このような小さな「ちがい」であり、日本人も普段は特に意識していないようなことに気づける機会を得

	られるのは、やはり直接交流の良さであろう。 　また、日本についての気づきが得られただけではなく、留学生どうしも、お互いの昼ごはんを見て、多くの発見があったようである。(「皆さんの国の料理はじめて見るものばかりだった」「(ボルシチという料理を見て) ポーランドとウクライナの料理は似ていると思った」「(ウクライナの学生のチーズとマカロニの昼食を見て) チーズだけを食べながら一食をすませるのはとても西洋的な食事だという気がして、韓国人の私にとってはやはり食事には汁が必要ではないかという気がした」など) このように「多文化」を感じる機会は、本来、来日してほかの国の学生と一緒に生活していれば多くあることかと思うが、現在はそれぞれの国にいて、授業だけオンラインで受けている状態なので、ほぼないに等しい。そのような中で、少しではあるがこの交流でその機会が与えられたことも大きな成果と言えよう。 　また、「違う」ことに気づくだけではなく、「同じなんだ」という気づきも、お互いに多くあったようである。例えば韓国の留学生の宅配デリバリーのパスタとサラダの昼食の写真を見た中学生が、日本と同じようにデリバリーサービスを利用したり、パスタを食べたりするんだな、と知って面白かった、という感想を述べていた。また、交流の間にひとりの中学生が留学生にと薦めた、どちらにとっても馴染みの深い日本のアイドルグループの曲を留学生たちが交流後に聞き、「とてもいい曲だった」「感動した」とお礼手紙の感想に書いていたが、この例のように、同じ音楽をいいと思ったり、感動したりする、という体験を通して、文化の違いを超えた普遍的な何かを知らず知らずのうちに留学生側も中学生たちも感じ取っていたのではないかと思う。
4. 備考 (授業者による自由記述)	１で書いたようなマイクのトラブルがあり、しばらく中学生の声が聞こえないという時間があったが、その間、中学生たちが紙に伝えたいことを書いて見せたり、大きめのジェスチャーをして伝えようとしたり、様々な方法を駆使して留学生たちとコミュニケーションを取ろうとした姿がとても印象に残った。お互いに興味を持っていて、とても話したいと思うからこそ、伝える方法を一生懸命探して伝えようとする、これこそがコミュニケーションというものだ、としみじみ思って感動した。その２つのグループの留学生たちも、この姿を見て本当にうれしかったようである。 　今回の実践は、コロナ禍の今、移動や対面の交流がままならない中、文化を超えて、距離を超えて、時差も超えて、人と人とが語り合い、理解し合うことが可能になるのだということを気づかせてくれるものであり、ある意味、教育において、多文化の接触場面を創出する活動の可能性を見せてくれるものであった。大学において今後担当する多文化共生、国際理解教育の授業においても、学生が直接足を運ぶことができないところにいる人から話を聞いたり、対話したりするための方法として、オンライン交流の方法は今後も活用できるものである。今後、ポストコロナの時代を迎え、再び人的交流や国を超えての移動が元通りに行われるようになっても、オンラインの交流と対面の交流のそれぞれの良さを生かした活動を考えていきたい。

参考資料：

『地球の食卓―世界 24 ヵ国の家族のごはん』開発教育協会(DEAR) 2010

「多文化共生」について

氏名：松居　勇　　学校名：大阪府立大学

担当：大学ボランティアセンターのコーディネーター　学生有志に対するプログラムとして実施

時間数：1時間　　対象学年：大学生　　人数：6名

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

「世界とつながろう」という（よく語られる）ニュアンスについて、海外に目を向けるばかりではなく、自分たちの身の回りで暮らす、多様な文化的背景をもつ人たちの存在も意識すること。その人たちが心地よく日本社会で生活するためには何が必要なのかを慮ること。

【2】単元の評価規準例	（ア）知識・技能	日本社会で暮らす多様な文化的背景をもつ人たちに対する理解
	（イ）思考・判断・表現	多文化共生社会を実現するために何が必要なのかを慮る力
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	日常生活の中で取り組めるアクションを生み出そうとする姿勢

【3】単元設定の理由

大学生にとっての「国際経験（国際的視野を身に付けること）」について、これまで耳にしてきたのは、文化体験や、異なる言語・生活について理解を深めるなどポジティブな意味合いで世界を捉えるものや、地球規模での課題（貧困撲滅や環境保護など）について考えようというスローガン的なものなどが多い印象だった。
そこで、普段の暮らしの中にある実情を捉えることから「多文化共生」について理解を深める機会を、大学生に届けたいと考えた。

【学生観】
本プログラムを受講する学生たちは、ボランティアセンターにおいて「誰もが国際課題を自分ごとに　国際協力をもっと身近に」と掲げて活動する学生グループに所属している。国際課題に目を向けるきっかけづくりや、日常生活の中で取り組める身近な国際協力についての発信活動等に日頃より取り組んでいるが、これまでの活動において、日本国内における多文化共生に関するテーマが扱われたことはなく、意識が及んでいない様子が窺える。

【教材観】
オンライン（Zoom）による実践を行うにあたり、パワーポイント資料による教材を準備する。多文化共生に関する各種テーマをダイジェストで取り扱っていき（教師国内研修にて取り扱われた内容を簡単に提示）、学生の関心を広げ意欲を掻き立てることに重きを置く。

	【指導観】 説明をしすぎない。ヒントを与える。学生たちの自主的な調べ学習や、今後のアクションへとつながる導入になるよう努める。（ボランティアセンターとして、教科指導ではなく、きっかけづくりであることに留意する。） 【設定時に想定された学生の変容】 身近な国際問題に目を向けるようになること。 自分たちにできるアクションを考えるようになること。

【4】展開計画（全１時間）

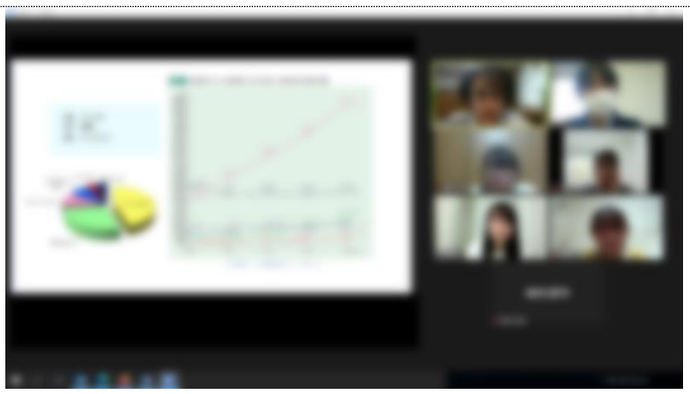
時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 本時	身近な国際問題に目を向ける。 自分たちにできるアクションを考える。	少人数のゼミ形式で質疑応答を行いながら各種テーマに関する理解を深める。	パワーポイント

【5】本時の展開

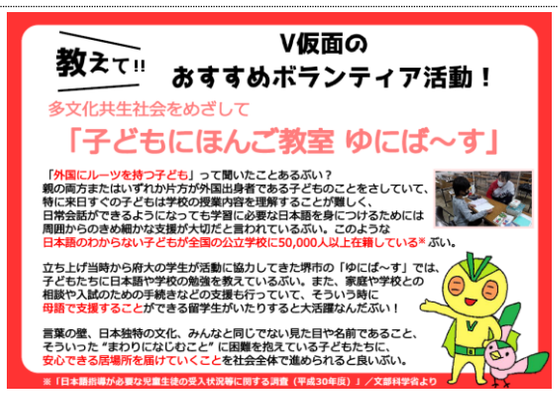
過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (20 分)	問い.「多文化共生」と聞いて何を思い浮かべるか？（文章にして提出） …「多文化共生」語句説明 短編映画「Born With It - 生まれつき」の導入１分を視聴し、感想を語り合う。 …「国籍」語句説明 …「外国人児童の受け入れ」について解説	全体を通じて、学生が聞いているだけにならないよう適宜感想を求めるなど対話型になるよう留意する。	パワーポイント （YouTube 利用）
展開 (20 分)	各種テーマを文字のみで示して言葉の認知について確認し、次に事例資料を見せて内容の解説を行う、という作業を順々に繰り返す。 「在日朝鮮人問題」 「民族学級」 「アイヌ民族」 「拉致問題」 「難民問題」 「技能実習生」		（事例資料はすべて教師国内研修で提供されたものを活用）

まとめ (20 分)	キーワードの整理 …日本で暮らす外国人（ルーツを持つ人） …その人たちを支えるコミュニティ …異なる言語・文化の中で暮らす大変さ …言葉は道具のみならず文化でもある …アイデンティティと自己表現 なぜこのプログラムを企画したのか、何を伝えたかったのかを説明。 問い．改めて「多文化共生」と聞いて何を思い浮かべるか？（文章にして提出） 問い．これから意識したいこと、取り組みたいことがあるか？（文章にして提出）		

【授業実践の様子】



（オンラインにおける実践の様子）



（大学近辺でのボランティア活動の紹介）

【6】本時の振返り

一つ一つ採り上げても十分に意見交換等を行えそうなテーマをダイジェストで取り扱い、スピーディーな展開となった。言い換えると、各種テーマについてまだまだ深められるのではないかという余韻を残すかたちで終えられたとも表現できる。集中力を切らせず駆け抜けることができた。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

プログラムにおいて様々なキーワードを提示したが、何となく聞いたことはあるがよくはわかっていないという反応が多かった。例えば在日朝鮮人について、大阪市内出身の学生は小中学校において学ぶ機会があったと答える者がいたが、大阪府外出身の学生の場合はほとんど耳にすることがなかったと答えていた。出身地によって、民族問題等を学ぶ環境が大きく変わるのであろうことが見て取れた。
以下の項目は受講した学生たちからのアンケート結果を記載。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

以下、学生からの事後感想

・世界のことを知るよりも、まず日本について身の周りのことを知ろうとすることを意識したい。
・人々の生活に関わる福祉という観点が印象に残ったので、そういう意識で国際分野にも関わるものについて見ていけたらいいなと思いました。また、Born With It（うまれつき）という言葉が印象的で、国籍もふくめ、すべての人にうまれつきはつきものかなと思うので、その違いをどうやって認識して

いったり認識してもらえるようにしたりといったところを意識してみたいなと思いました。
・今日出てきたような、外国人に関わる言葉について調べて自分の中に落とし込んで、説明できるようになりたいな、と思いました。とりあえず理解したいな、と思いました。身近なところに在日の人に向けた活動をしている団体があることを知らなかったので、それについても自分が考えられることがあれば考えてみたいです。
・今日自分が話を聞いたように、もっと色んなことや人権問題などに興味を持って勉強したいです。また、周りの人に対しても伝えられたらなと思います。
・外国人といっても様々な背景で外国人になっていることを知れた。日本から見ると外国でも、ほかの国から見ると日本が外国になる。「バベルの学校」（※フランスの多文化学級を描いたドキュメンタリー映画）を見て、遠い国の話と思ってしまっていたが、日本でも同じような問題が起きていることを学んだ。私の中で、今までの活動は、遠い国のことを思ってしていた。これからはもっと身近な自分の住んでいる地域で困っている人についても活動していきたいと感じた。
・多様な文化的背景をもつ人たちが心地よく日本社会で生活するために、日本人への国際理解を進めることは出前授業などの例からイメージできたが、本人たちをエンパワメントしていくことはあまり思い描くことができなかった。“当事者”でなければ分からないことなのか...少なくとも知ろうと努力したいと思った。その輪に入り、一緒に活動したり、支えたりすることが可能であればやってみたいと思った。受け入れてもらえるのか多少不安である...。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

（授業前）「多文化共生のイメージ」
・在日外国人
・多国籍国家
・「人種のるつぼ」
・移民・外国人・国籍などの違いを認めること。
・お互いの文化を尊重すること。
・様々な人種の人や宗教の人が一緒に暮らしている。
・肌の色がちがったり言葉が違ったりする人達が一緒に生きる。
・いろんな国に住む異なる文化の中で暮らす人たちが、相手の文化を尊重しながら生きること。でも、日本の中でも家庭によって暮らし方は異なるから、各家庭を外から見た関係も多文化と呼べるのかもしれない。

（授業後）「多文化共生のイメージ」
・尊重・おもいやり・アイデンティティ
・自分以外の人について背景や文化を知ること。
・お互いの違いを認めて、思いやりの心をもつこと。
・（実例を知ることで今までの印象よりもずっと）身近なこと。
・様々なルーツを持つ人がいるということなので、身近にいる人に関心を向ける。様々な文化を知らないとそもそも理解するのは難しいと思うので、まず文化を知ることが大事。
・異なる国に住む文化や生活が自分とは全く違う人だけでなく、自分の周りに暮らしているけど違う文化を一つでも持つ人(外国人とひとまとまりにしていいのか、あまりまとまっていないです)とお互いを尊重しながら、わからないことや気になることなど助け合って生きていくこと。

【8】自己評価

1. 苦労した点	実践内容の考案。教師国内研修における学びがすべて印象深かったため、学生たちにもなるべく広く追体験をしてもらいたいと考えた結果、多数の要点を短時間に詰め込んだ駆け足の内容となってしまった。学生たちの学びが中途半端（悪い意味で広く浅く）になってしまわぬよう丁寧な進行を心掛けた。
2. 改善点	時間設定に余裕がある場合は、一つ一つのテーマの掘り下げをもっと入念に行うことができる。また、進行にあたっては「授業者⇔受講者」の時間をとることはできたが、「受講者⇔受講者」の時間をとることが満足にできなかったので、今後は学生同士の語り合いの機会を盛り込んでいきたい。
3. 成果が出た点	意図していた「学生の関心を広げ意欲を掻き立てる」という点については、アンケート結果を読む限り、一定の成果を残せたように感じている。次の段階として、学生たちとさらに学びを深め、その成果を学生たちが地域（小中高校生等）にも伝え、そしてまた次の学生たちにも伝え…というサイクルを生み出すきっかけにしたい。
4. 備考（授業者による自由記述）	教師国内研修に参加していた教員から教えてもらった「アイたちの学校」という朝鮮学校の歴史と現状を描いたドキュメンタリー映画の上映会を、授業プログラムの翌週に大学内にて開催予定にしており、学生たちの学びをさらに深めるための連携企画として位置付けている。 このように、教師国内研修に参加した教員同士の情報交換から得られたものも多く、教育現場で腐心している先生方との出会い自体も非常に有意義だった。JICA をはじめとする運営の方々の手厚いサポートも含め、恵まれた環境に身を置くことができたからこそ実践にこぎつけることができたということを申し添えておきたい。

参考資料：

・JapanSocietyNYC. “Born With It - Japan Cuts 2016”. Youtube.＜https://www.youtube.com/watch?v=yzfI9pAJkqg＞.（参照日 2022 年 2 月 7 日）
・鈴木久仁子.「園児のピアス風習でも駄目？」.神戸新聞.2019 年 10 月 7 日.朝刊
・文部科学省.「外国人の受入れ・共生に向けた文部科学省の取組概要について」.＜https://www.moj.go.jp/isa/content/930004524.pdf＞.（参照日 2022 年 2 月 7 日）
・武田肇.「ルーツ肯定的に　通名使わぬ小学校、100 年の歴史に幕」.朝日新聞デジタル.＜https://www.asahi.com/articles/ASP3833ZWP33PTILOOX.html＞.（参照日 2022 年 2 月 7 日）
・有田佳代子・志賀玲子・渋谷実希（編著）新井久容・新城直樹・山本冴里（著）2018『多文化社会で多様性を考えるワークブック』研究社
・岩岡由季子・八木亜紀子（著）2019『基本アクティビティ集 2-難民』開発教育協会
・武田敬子.「【最新版法務省統計】技能実習生の人数推移と現状。人数枠についても解説」.外国人採用サポネット.＜https://global-saponet.mgl.mynavi.jp/visa/4272＞.（参照日 2022 年 2 月 7 日）
・宋光祐.「若者の夢につけ込み金もうけ　理念ずたずた技能実習制度」.朝日新聞デジタル.＜https://www.asahi.com/articles/ASP8T5JR4P8LUHBI02S.html＞.（参照日 2022 年 2 月 7 日）
・Projeto Construir ARTEL.＜http://www.projetoconstruirartel.org/index.html＞.（参照日 2022 年 2 月 7 日）

本プログラムにご協力いただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。

発行:
独 立 行 政 法 人 国 際 協 力 機 構

関西センター(JICA 関西)

〒651-0073　神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2
Tel:078-261-0384(課直通)
Fax:078-261-0357
E-Mail: jicaksic-kaihatsu@jica.go.jp
https://www.jica.go.jp/kansai/